
SKY EARTH

齋藤ノベオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S K Y E A R T H

【Nコード】

N 1 3 2 3 Z

【作者名】

齋藤ノベオ

【あらすじ】

エネルギー資源が枯渇した世界。人々は資源が残された地域に密集し、その資源を巡って対立の溝を深めていた。そんな中、ある国が他国に向けて侵略を開始する。拡大する戦火の中で、戦闘機に変わって生み出された生物兵器「ドラゴン」を追う青年、復讐を誓う女、そしてたった一人の家族のために戦場を駆ける男。様々な思念が絡み合った時、真の闘いへの幕が開く。

試合開始

闘技場。

そこは、鳴り止まない歓声で埋め尽くされた娯楽の場。しかし、選手達にしてみれば、敵対心という名の刃をむき出しにさせる舞台だった。

その闘技場の控え室で、一人の男がベンチに腰掛け、目を閉じていた。

男が出場する試合が始まるまで、残り五分を切っているというのに、誰も控え室まで呼びに来ないのは、この男が常連だということを物語っている。

男は試合開始三分前になると目を開き、あらかじめベンチに置いておいた自分の「商売道具」を身に付けていく。

防弾チョッキを着込み、腕と足の関節にサポーターを着けていく。左腕には防弾・防爆・防刃の三拍子が揃ったシールドを取り付ける。太もものレッグホルダーにはハンドガンを装備し、腰にはナイフを巻きつける。背中に一メートルほどのブレードを背負い、最後に右腕でアサルトライフルを持ち上げた。

常人では立ち上がることにすら不可能なこの重装備を、男は強靱な肉体を駆使して使用する。

装備が整った男は、控え室を出て、選手入場口であるターンテーブルまで歩いていく。すると、ターンテーブルへと続く廊下の向かい側から、よく見かける顔の男が歩いて来た。

男はそのまま無視して通りすぎようとしたが、案の定、話しかけられた。

「……あんたにとっちゃ、消化試合かもしれないが……」

「……………」

「俺にとって、良い判断材料になる。あんたと闘うためのな」

「……闘う？ 殺すの間違いじゃないのか？」

「……こんなところでやられんなよ」

男はそう言うのと、最後に「見てるからな」と付け加え、去っていった。

男は、たった今去っていった男の試合中継を、見たことがあった。マーカーと呼ばれるその男は、いずれの試合でも相手選手を殺してしまうそうだった。

出来れば、あたりたくない相手だ。男はそう考えながらターンテーブルに辿り着く。

この位置からでも観客の歓声が届いてくる。

観客の大多数が自分の名を呼んでいるにも関わらず、男が考えていることはいつも一つだった。

「ホリー……、今日も必ず帰ってくるから……」

男は、目の前に用意されているターンテーブルに足を踏み入れ、その時を待った。

「レディース、アンド、ジェントルメン！ 『ゲオルギウス』にお

集まりの皆さん！ 今日も素晴らしいカードが組まれました！ ぜひ注目してってください！ それでは、選手入場！」

男の乗っているターンテーブルが起動し、闘技場の広大なフィールドへと上昇していく。

観客達は男の姿がフィールドに現れると同時に、一斉に歓声を上げた。

それと同時に、その歓声に負けない位の声量で、実況の男がマイク片手に解説する。

「その通り！ 皆さんご存知のベルトウェイ・ゴールドマンが今回の防衛戦の主役です！ 身長百八十八センチ！ 体重九十五キロ！ 筋骨隆々の大男！ ゲオルギウス初参戦から無敗の四十四連勝！ 不屈の精神と強靱な肉体を持つこの男を止めることは出来ないのか！？」

相変わらず前置きの長い実況の男を尻目に、ベルトウェイは今回のフィールドを見渡す。

天気は晴天、曇一つ無い昼下りの午後だ。

いつものごとく、丁度サッカーフィールド一個分の広さのフィールドには、高さ一メートル半ほどの遮蔽物が、点々と置いてあるだけだった。地面は、学校にあるグラウンドとさして変わらない砂となっている。

今回は、この遮蔽物に身を隠しながら闘えということか。

ベルトウェイは、試合開始と同時に移動するポイントを決めていた。

見たところ頑丈そうなコンクリートで出来ているが、それは相手の武装によって変わってくる。ベルトウェイは相手側の入場口を見つめた。

「しかし！ たとえいくら不屈のベルトウェイ選手であっても、今日の試合結果は予測出来ませんよ！ 今回の挑戦者はこちらです！ どうぞ！」

そのアナウンスと同時に、相手側のターンテーブルが上昇してくる。

現れたのは、子供だった。

しかも、女。

観客の落胆の声が、一斉に響き渡る。

そんな観客の落胆を見透かしていたのかのように、実況の男が声を張り上げた。

「皆さんの言いたいことはわかりますとも！ 確かに初めて彼女を見たときには私も驚きました！ 思わず観客席までお戻り頂こうと考えたほんです！」

そこで闘技場が少し沸く。観客の興味が自分に戻ってきたところで、実況の男は続ける。

「しかし！ 人は見た目によりません！ 今から言うこの一言でご理解頂けるでしょう！ 彼女は先日、ゲオルギウスランク『十五位』

に認定されました！」

その瞬間、闘技場全体がどよめきたつ。

ベルトウェイも、この発表には驚いた。

民間の娯楽として機能しているゲオルギウスという競技は、対戦のカードのバランスが狂わないよう、選手達の成績に応じてランク付けがなされている。

ランクの数が少ないほど強く、逆に多いほど弱い順になっているため、実力の差が開かない仕組みになっていた。

ベルトウェイのランクは十四位。全世界の選手を合わせると二百人近くいると言われるゲオルギウスの競技人口の中では、間違いなく上位に位置づけされる。

対して、少女のランクは十五位。四十三戦無敗のベルトウェイが十三位ということは――。

「今回の挑戦者、名前はイーリス・サングネイアちゃん！ 年はゲオルギウスの年齢制限ギリギリの十八歳！ 身長は百六十二センチ！ 体重は言わないでおきましょう！ そんな彼女に付けられてしまったあだ名は、『ボマー』です！」

「ボマー……」

ベルトウェイはイーリスの武装を確認する。

しかし、イーリスがその体格に似合わない厚手のトレンチコートを羽織っているせいで、見た目からは判断出来なかった。

「ルールを説明します！ 制限時間は十分！ 持ち込める物は『個人で携帯出来る物』なら何でもOK！ 勝敗条件は相手選手がギブアップ、もしくは十秒以上地面に背中がついていた場合、そして死亡した場合です！ ですがいくら死亡がカウントに入るからといって、戦意喪失した相手に向かったの攻撃は許されません！ 一応『競技』ですのでスポーツマンシップにのっとって行ってください！

それではスタンバイ！」

アナウンスが終わると、一気に闘技場が静まり返る。

天井近くに設置してある巨大スクリーンに、大きく「Ready」

の文字が表示された。

どちらにしても、手早く終わらそう。

自分のためにも、少女イーリスのためにも、そしてホリーのためにも。

巨大スクリーンに大きく「GO」の文字が表示された瞬間、ベルトウェイは一番近くにある遮蔽物に身を隠した。

「おっと！　ベルトウェイ選手！　さっそく遮蔽物に身を隠す戦法をとりました！」

これでしたいに距離を詰めていけば、接近戦に持ち込める。

ベルトウェイは次の遮蔽物に向かって飛び出そうとしていた。するとその時、イーリスのいる位置から、バシュンっと、何かが飛び出してくる音がした。

急いで確認すると、ロケットランチャーの弾頭が、こちらに向かって来ていた。

ベルトウェイは次の遮蔽物へと飛び込んだ。

すると、ついさっき自分の居た遮蔽物が、爆風と共に碎け散る。

間一髪、左腕のシールドを展開したベルトウェイは、飛んでくる破片に身を晒さずに済んだ。

「恐ろしい！　何ということでしょうか！　少女の細腕に似合わない重火器が火を噴きました！」

ベルトウェイは、遮蔽物から右腕だけ出すと、アサルトライフルの弾丸を周囲にばら撒く。するとそれに応じるかのように、何かが風を切って自分の方に飛んで来た。それを確認したベルトウェイは、またもや別の遮蔽物に飛び込む羽目になった。

手榴弾だ。

おかげでまたも、ベルトウェイはシールドの世話になる。

「挑戦者イーリス！　ベルトウェイ選手を寄せ付けません！」

ボマーか……、分かった気がする。

ベルトウェイは一人で納得すると、次から次へと遮蔽物を変えていく。それを追うようにイーリスも、グレネードランチャーを連射

してきた。

フィールドの遮蔽物が、瞬く間に爆破されていく。しかし、それと同時にイーリスは、ベルトウェイとの距離が縮まっているのに気付いた。

ベルトウェイはアサルトライフルを投げ捨てると、整った顔立ちに焦りを見せ始めたイーリスに対して、遮蔽物越しにハンドガンを連射する。二、三発の銃弾がトレンチコートに命中したが、まるで衝撃を吸収されたかのように地面に落ちただけだった。

そしてイーリスも、近くの遮蔽物に隠れる。

どうやらあのトレンチコートは、俺のシールドと同じく防弾らしい。

「接戦です！ 誰がこの展開を予想出来たでしょうか！？」

しかし、あのコート……、防弾の上に重火器を収納しているのか？

「ベルトウェイ選手！ 決定打を見失っています！」

確かにコートの中に、見た目からは想像出来ない重火器を隠しておけば、初めて対戦する相手の意表を突くことは出来るだろう。だが、それでは少女の長所である身軽さが無い。

「イーリス選手！ またも重火器で攻撃します！」

ベルトウェイは、イーリスのいる遮蔽物へと全速力で駆け出した。後方で爆音が鳴り響いているが、無視して腰のナイフを抜く。

「ああと！ ベルトウェイ選手！ なりふり構わず突撃していく！」

ベルトウェイが迫ってきていることに気付いたイーリスは、急いでその場を離れようとする。しかし、飛んで来るナイフがイーリスの行く手を阻む。

そこでイーリスは、ロケットランチャーを構えると、向かってくるベルトウェイに向けて発射した。

観客が息を呑む中、ベルトウェイは近くにあった遮蔽物を踏み台にして、飛んできたロケットランチャーの弾頭を、飛び越えた。

そのまま背中中のブレードを抜くと、啞然とするイーリスの喉元に

突きつける。

しばらくの静寂の後、イーリスは静かに両手を挙げた。

観客が、一斉に沸いた。

「と！　　いうわけで今回の防衛戦！　見事にベルトウェイ選手の防衛成功です！　挑戦者イーリス選手の攻撃も目を見張るものがありました！　しかしそこは経験の差か！？　ベルトウェイ選手の勇気ある特攻によって幕を閉じました！　最後に両者の健闘を祝って盛大な拍手を！」

闘技場が割れんばかりの拍手に包まれる中、ベルトウェイはブレードを背中に仕舞うと、悔しそうな顔をしているイーリスに向かって言った。

「……もっとマシな稼ぎ口があるだろう？」

「……早急にお金が欲しかったの」

イーリスはそう答えると、僅かに赤みを帯びている長髪を翻し、自分のターンテーブルへと消えていった。

「なお、今回の防衛戦の結果は後日公表となります！　また、勝者であるベルトウェイ選手には多額の賞金が授与されます！　次回も彼らの活躍に期待しましょう！　マイケル磯崎がお送りしました！」

優しい嘘

競技が終わった後、ベルトウェイはヘルスセンターに来ていた。十日に一度、この病院に行くことが習慣となっている。

ベルトウェイは、馴染みのドクターにゲオルギウスで得た賞金の一部を渡した。

「怪我は？」

「大丈夫だ」

そう返したベルトウェイに、ドクターはため息を吐くと、あらかじめ柵に置いてあった薬を渡した。

「じゃあ俺はこれで……」

「ホリーちゃん、早く良くなるといいな……」

「ああードクターにはいつも感謝してる」

「ああ。よろしく伝えておいてくれ」

ドクターがそう言うと、ベルトウェイは部屋を後にした。扉が閉まるまで、ドクターはベルトウェイから目を離さなかった。

ベルトウェイは自宅に着くと、真っ先に娘の部屋に向かう。

「お父さんお帰りなさい」

「……ただいま」

今年で十八になる娘、ホリーが出迎えてくれた。

「今日は仕事、早かったんだね？」

「……うまくいったんだ」

「そっか」

ベルトウェイは、先ほどドクターから貰った薬を取り出す。

「これが明後日からの分だ」

ホリーはベッドに横になったまま手を伸ばし、それを受け取る。

「うんーでもこれ、凄く高価なんだよね……？」

「お前が気にすることじゃないさ」

「……ありがとう、お父さん」

「ああ。今日はもう寝なさい」

「うん……おやすみなさい」

「おやすみ。ホリー」

ホリーは布団を深く被ると、すぐに寝息を立て始めた。

その様子を見てベルトウェイは微笑むと、ベッドの脇に置いてある椅子に座り、ホリーの寝顔を見つめる。

ベルトウェイには、重い難病に苦しむ娘が居た。

軽い運動でも命に関わるので、ドクターから、家の外には出れないだろうと言われている。また、治療には高価な薬品を使用しなければならなかった。

そのため、ベルトウェイが危険と引き換えに多額の報酬を得られるゲオルギウスに挑戦するのに、そう時間はかからなかった。

静かに寝息を立てるホリーを見ながら、ベルトウェイはその頭を撫でてやろうとする。しかし、寸前で思いとどまり、その手を退けた。

ベルトウェイは、自分に問いかける。

「ホリーは、許してくれるだろうか……？」

ゲオルギウスという競技を行う以上、人を殺めたことが無いとは言えない。

もし、ホリーの病気が完治して、来るべき時が来たときも、自分は笑っているのだろうか。

そうだとしたら、俺は、異常者だ。

しかし……娘の、ホリーのためになら、俺は何にでもなる。

ベルトウェイはそう、亡き妻に誓うのだった。

夫婦

その部屋には、男と女、一人ずつ居た。

女は椅子に腰掛け、男を見ている。男は立ち上がったまま、女を見ている。

男が女に話しかける。

「――お前自身には価値が無い。俺が欲しいのは、今お前が居座っている、そのポストだ」

男はそう言っ、視線を机に移動する。そこには、「総務補佐」と書かれたプレートがあった。

「あの子はどうするの？」

「……一人で生きていくさ」

「そう……」

女は諦めた様子で、目を閉じる。

「時間が無い」

男はそう言っ、懐からハンドガンを取り出し、女の胸を撃ち抜いた。

女は、銃声と共に崩れ落ちる。

そこに、誰かが廊下から走ってくる音が聞こえてきた。その音の主は、部屋の扉を慌しく開ける。

息を切らしながら、音の主は、その部屋の状況を理解した。

「――もう、あなたの下では働かない」

「構わない。君に戦略的価値は無い」

「……後悔するわよ」

女は、崩れ落ちた亡骸に向けて、哀悼の意を表するように目を閉じると、部屋を後にした。

男は、最後に亡骸に向けて、言った。

「……心配しなくても、お前の死を無駄にはしないさ」

開戦

ベルトウェイは闘技場にいた。

いつものように控え室に向かう途中、今日の対戦相手が向かい側から近づいて来た。

「――よお」

「……対戦前に相手選手と会うことは、禁じられているはずなんだが……」

「お前と闘えるっていうから、つい挨拶したくなっただけ」

「準備がある。通してくれ」

そう言って脇を通り過ぎようとする。

すると、左肩を掴まれた。

思わず懷に忍ばせてあるナイフに手を伸ばしたが、マーカスの「まあ落ち着け」という声を聞いて、抑えた。

「今まで俺の相手が死んでったのは、単に『弱かった』からだ。生きる覚悟が少なかった、とも言えるな」

「まあ、一理あるな」

「……あんたはどっちな？」

マーカスは去っていった。

嫌な相手とあたってしまったな、ベルトウェイは内心そう呟くと、控え室に入った。

ロッカーから装備を取り出すと、ベンチの上に並べていく。銃火器の整備が済むと、空いた箇所を腰を下ろした。

ベルトウェイは時間が来るまで、マーカスへの対策を考えることにした。

今まで見てきた限り、マーカスの試合内容は単純だった。二メートルはあるかという巨大な刀身を持つブレードで守りを固め、銃火器で相手に接近し、守りから攻めへと転じたブレードで相手を真っ二つにする。

シールドとブレードという違いはあるが、これはベルトウェイの戦い方へと通ずるものがある。ベルトウェイ自身は、単純で基本的なこの戦い方を無意識のうちに選んでいたが、戦っていくうちに臨機応変に立ち回れることに気付いていた。

基本だからこそその強みがある。

この闘いは、恐らく生半可ではいかなだろう。

ベルトウェイは装備を身に着けると、ターンテーブルへと移動した。

——久しぶりに相手を殺すことになるかもしれない。

ベルトウェイは、そう感じる。

ゲオルギウスに慣れてからは、なるべく相手を殺さないようにしてきたベルトウェイだったが、今回ばかりはそうは言っていられないようだ。

ターンテーブルに乗ると、観客の歓声が聞こえてきた。

「許してくれ、ホリー」

ベルトウェイは覚悟を決めた。

「さあ今回のゲオルギウスはとんでもないことになりました！ 毎回の言葉を口にしていますが今回ばかりは本当です！ ガチです！ なんとあのベルトウェイ選手とマーカス選手の闘いが始まります！ それではそろそろ観客の皆さんが暴れだしそうなので、選手入場！」

ベルトウェイが闘技場のフィールドへと姿を現すと、観客達が一気に盛り上がった。

「今回の主役の一人を紹介します！ 身長百八十八センチ！ 体重九十五キロの大男！ ベルトウェイ・ゴールドマン！ 常に相手選手を生かし続けるベルトウェイ選手ですが、今回はその行いを否定するような選手が現れました！ それでは選手入場！」

そして、相手側のターンテーブルが上昇し、マーカスが現れた。

「紹介します！ 身長百九十センチ！ 体重九十四キロ！ 常に相

手選手を殺め続けた男！ マーカス・レイジ選手です！」

マーカスの紹介が終わるや否や、ベルトウェイとはまた別の歓声が沸き起こった。

「体格的にも戦績的にも似ているこの二人！ 決定的に違うのは性格のみです！ 片や、命を預けるルールマン！ 片や、命を奪い取るイレギュラー！ 似ているようで対称的なこの二人は果たしてどのような激戦を繰り広げてくれるのでしょうか！？」

ベルトウェイは実況が続いている間、今回のフィールドを見渡していた。

満天の星空が輝く中、スポットライトの光が交差している。フィールドはコンクリートで出来ており、その中に何本かの円柱が並んでいた。円柱自身は高さが二メートルほどあり、鉄で出来ているようだ。直径が五十センチ程度なので遮蔽物には向いていない。

つまり、このフィールドでは、純粹に実力同士がぶつかることになる。

ベルトウェイはマーカスに視線を合わせた。

同じようにマーカスも、ベルトウェイから視線を逸らさない。

「現在マーカス選手のランクは十三！ 打って変わってベルトウェイ選手のランクは十四！ しかも二人は連勝中！ 競技規定によりランクアップの条件は『上位ランク保持者への勝利又は三連勝』となっております！ つまりどちらにとってもこの試合は昇格試合となるわけです！ しかもベルトウェイ選手が勝利した場合、両方の条件を満たしたとみなし一気に二つ上のランクに昇格することが出来ます！ このことから今回の試合が『本気』であることが分かることでしょう！」

その時、観客席の中から、若い女達の黄色い声援が響いた。

ベルトウェイは、彼女達が何を言っているか聞き取れなかったが、マーカスに対して強烈な愛情表現をしているらしい。

しかし、すぐにスタツフらしき男達に取り押さえられたようだ。アウトローな選手には変わったファンがつくものだ。

ベルトウェイはそう考え、目の前のことに集中した。

「ルールを説明します！ 制限時間は――え？ え、えーと……どうやら観客席から早くしろ！ との声が多数寄せられているようなので……それではスタンバイ！」

スクリーンに「Ready」の文字が浮かび上がる。

ベルトウェイは、体中の筋肉をマークスに集中させる。

「Go」の表示と共に、ベルトウェイはマークスに向けてアサルトライフルを発射した。

マークスは背中を向けると、背負っていたブレードで弾丸を防ぐ。「さあ始まりました！ 先手はベルトウェイ選手の銃撃です！」

マークスは背中を向けたままブレードを外すと、左手で構える。そのまま右手のサブマシンガンでベルトウェイに銃弾を浴びせた。

ベルトウェイはそれをシールドで防ぐと、今度はアサルトライフルをハンドガンに持ち替えて突撃した。

マークスはそれに応じるように、襲ってくる銃弾をブレードで防ぎながら、ベルトウェイに突撃していく。

「序盤から激しい闘いになりました！ 両選手お互いに距離を詰めていきます！」

マークスとの距離がゼロになった瞬間、ベルトウェイはハンドガンを捨て、背中のブレードを抜いた。

マークスもサブマシンガンを手放すと、巨大なブレードを両手で構え、ベルトウェイに斬りかかる。

ベルトウェイは、襲い掛かる刃をシールドで受け止め、右手のブレードでマークスを斬りつける。

マークスは巨大な刀身を利用し、ブレードをずらしただけで防いだ。

「これはすごい！ 凄まじい展開だ！ まさにこの競技に相応しい闘いです！」

マークスは、ベルトウェイに渾身の力でブレードを叩きつける。ベルトウェイはそれをシールドで防ぐが、凄まじい衝撃で後ろに

吹き飛んだ。

マーカスは倒れたベルトウェイに向けてブレードを振り落とすが、ベルトウェイは地面を転がりそれをかわした。

体勢を立て直したベルトウェイは、マーカスに向けて突撃すると、右手のブレードで突きを繰り出す。

それをマーカスがブレードで弾き返すと、今度はマーカスが攻撃を繰り出して来る。

二人のあまりにも壮絶な闘いぶりに、観客は大歓声を上げた。

「今日！ この試合が見れることを私は誇りに思います！ これは確実に歴史に名を残す闘いでしよう！」

お互いに一步も引かない闘いが続いたが、突然マーカスがブレードの腹でベルトウェイを殴りつけた。

重い一撃を受けたベルトウェイは、一瞬ふらついた後、とんでもない光景を見た。

マーカスがその巨大なブレードで、そばにあった鉄の円柱を真っ二つにしたのだ。

二つに切り裂かれた円柱が、真上に倒れてくるのを確認したベルトウェイは、急いで真横に飛び込んだ。

しかし、倒れてきた円柱をかわしたと思ったのも束の間、マーカスの巨大なブレードが襲い掛かってきた。

右手のブレードを使い、何とか受け止めたものの、ベルトウェイはその巨大な圧力に歯を食いしばった。

必死なのはマーカスも同じようで、ベルトウェイと似たり寄ったりの表情をしながら、再度渾身の力を込めてブレードを押し付けてくる。

ベルトウェイは徐々に押されていくうちに、酸素が足りなくなってきたのか意識が朦朧としてきた。

——今、俺がここで死んだら、ホリーは——

ベルトウェイは腹の底から獣のような怒声を上げると、マーカスのブレードを押し返していく。

マーカスも負けじと押し返すため、凄まじいつばぜり合いが生じた。

そのせいで、上空から真っ赤に燃えた火球が迫っていることに、二人は気付かなかった。

突然、二人は強烈な衝撃によって吹き飛ばされると、地面に転がった。

観客の悲鳴や、緊急アナウンスが鳴り響く中で、ベルトウェイは眩暈に襲われる。

朦朧とする意識の中で、ベルトウェイは何とか立ち上がった。

「……何が起こったんだ？」

周囲を見渡すと、あたり一面火の海になっていた。

観客席や闘技場全体に炎が燃え移っており、場所によっては崩落した部分もあるようだ。さらに炎の爆ぜる音に混じって、街中にサイレンの音が鳴り響いているのに気付く。

「まさか、戦争でも始まったのか？」

「いきなりだな」

その声に振り向くと、いつの間にかマーカスが立ち上がっていた。

「残念だが、この勝負はおあずけだな」

「ああ」

「次の機会が楽しみだ」

そう言うとマーカスは、自分のターンテーブルへと消えていった。ベルトウェイもホリーの無事を確認するため、避難する観客達と同じく、闘技場を後にした。

宣戦布告

その二日後、ベルトウェイが暮らしている「アエイル公国」は、宣戦布告を受ける。

相手は、先進国である「グラティニス共和国」と呼ばれる国だった。

豊富な水産資源に恵まれていたアエイル公国に対し、グラティニス共和国は「貴重な資源を不当に占領している」と指摘。

アエイル公国の返事を待つことも無く、突然攻撃を開始した。

これに対し、アエイル公国は応戦。

また、両国の開戦を皮切りに、周辺諸国も巻き込まれる形で参戦となった。

当初は拮抗していたアエイル公国であったが、相手が共和国であることを利用し連合軍を築き上げたことや、アエイル自身小国だったこともあり、次第に重要拠点を奪われていく。

その中でアエイル政府は、戦闘に秀でたゲオルギウスの選手達を、多額の報酬と引き換えに戦線に投入することを決意。

また、度重なる戦闘によって失われた人員を補うため、一般人の中から兵士を募集することを決定した。

それは、空戦の主力となる「ドラゴン」も例外では無く、ドラゴンに騎乗する「コマンド」までもが、素人を募集する事態に陥った。

そして、ある片田舎にも募集の手が伸びることになった……。

白銀との出会い（前書き）

Episode1までのあらすじ

アエイル公国に住むベルトウェイ・ゴールドマンは、難病に苦しむ一人娘ホリーのために、国民の娯楽競技である「ゲオルギウス」に参加していた。

多額の賞金と引き換えに、選手達に大きな危険が伴うこの競技で、ベルトウェイは挑戦者である少女、「イーリス・サングネイア」に勝利し、見事四十五連勝を飾る。

しかし、ベルトウェイの次の対戦相手は、「マークス・レイジ」と呼ばれる実力者だった。

マークスは、自分と闘った相手選手を例外なく殺してしまう、恐ろしい男だった。

激戦を繰り広げるベルトウェイとマークス。

そして、観客達の興奮も最高潮というときに突如、赤い火球により二人は吹き飛ばされる。

炎に包まれる闘技場。

鳴り響く悲鳴と轟音、そしてサイレン。

二人は、次に会うときが決戦の時と覚悟し、闘技場を後にする。

ベルトウェイはホリーの無事を確認するため、走り出した。

そしてその裏では、大きく時代が動こうとしていた……

白銀との出会い

その街は、朝から騒がしかった。

街と言っても、元が村なので人口は十万人に満たない。しかし、主要な施設や設備、また小規模ながら空軍も所有することから、コマンド募集拠点の候補に挙げられた。

そのおかげで、朝から空軍基地に人だかりが出来ている。

「エリートコマンド募集」と銘打たれた貼り紙に、様々なドラゴンが集まったその基地では、広大な敷地内を使い、晴天の屋外で上官らしき男による説明が行われていた。

「――本来、『ドラゴンコマンド』は、一年一ヶ月の訓練を経て正式に認められる。しかし、諸君らも知ってのとおりに事態は急を要する。そこで諸君らは三ヶ月の訓練で全てを学んで貰う」

上官の目の前に広がっていた百人近くのコマンド希望者達が、一斉にざわつく。

「国防を担うにはいささか強引な手段だが、私は諸君らの可能性を信じている。この空で目覚ましい戦果を挙げてくれると。勿論、そのつもりで来たのだろうか？」

希望者達は口々に答えた。言い分はそれぞれだったが、意味はほとんど同じだった。

「良いだろう。それでは基地内に設置されてあるテントからそれぞれドラゴンを選んでくれ」

希望者達は言われたとおりにテントへと散らばっていった。その中で上官は、ドラゴンの扱いに対する注意を促すため、人混みへと紛れていく。

そのおかげで、無関係な一般人が一人紛れ込んでも気付くことはなかった。

希望者でも関係者でもない一人の青年は、ドラゴン達が容れられているテントを一つ一つ覗き込んで行き、その度に「違うな……」

と洩らしながら確認していく。

すると青年は突然誰かに、「お主、何をしておる？」と呼びかけられた。

青年は心臓が跳ね上がる気持ちで振り返る。

しかし、そこには誰も居なく、テントの中にドラゴンが一匹居るだけだった。

そのドラゴンは他のドラゴンと異なり、通常は赤や茶色の体色が
多い中で、唯一白銀を放っていた。

思わず、美しい輝きを放つ白竜に見惚れていると、白竜がいきなり「どこを見ている？」と喋り掛けてきた。青年は思わず驚いて声を上げそうになったが、白竜が翼手で口を塞いだため、うめき声しか出なかった。

「静かにしろ……！ たわけが……外の連中に聞こえるような声で喋るでない」

その言葉に青年は頷くと、白竜は青年の口を自由にした。

「――でも……ドラゴンが人の言葉を使って話しているのを見たら、大抵の人は驚くよ」

「まあ、我らが人の言葉を語ることなど皆無だからな」

「でも丁度良かったよ」

「？」

「聞きたいことがあるんだ。今までに黒いドラゴンを見たことある？」

「黒いドラゴン？」

「そう。肩口に傷跡があるんだけど……」

「そのドラゴンがどうかしたのか？」

「昔、黒いドラゴンに助けて貰った事があって、それ以来もう一度会ったらお礼がしたいと思っているんだけど……」

「ほう……しかし、残念ながらここにはそのドラゴンはおらぬぞ」

「……そっか、それは……残念だな」

「……」

「まあでも、教えてくれてありがとう。じゃあね」

「待て」

「？」

「お主、ドラゴンに助けられた、と言ったな？」

「そうだけど」

「ということは、ドラゴンに恩義があるということだな？」

「まあ、そうだね」

「そこでお主に相談がある」

「何？」

「我をここから出してくれぬか？」

「え？」

そこで青年は初めて、白竜の翼手と尻尾に繋がれた鎖に気付いた。

「何で繋がれてるの？」

「頭の悪い上官を侮辱した罪だ」

そう言うドラゴンは、フンと鼻を鳴らした。

「全く……言葉を話せるようしたのは誰だと思っている？」

「そういえばどうして喋れるんだ？」

「遺伝子操作の影響だ。人間との意思疎通を円滑にするために喋れるようにしたと言っていた」

「他のドラゴンは喋れないみたいだけど……」

「私の代で懲りたのだろう。兵器としての獣は従順な方が一番だな」

「じゃあ喋れるのは……」

「我だけだ」

そう言い切るとドラゴンは、鎖を揺らした。

「では私の身の上話を聞いたところで、鎖を外してくれ」

「ちょっと待てよ。俺は——」

「ドラゴンに救われたのだろうか？」

「それはお前じゃ——」

「黒いドラゴンを知っていると言ってもか？」

「何？」

青年が驚くと同時に、テントの外から「誰か居るのか!？」という怒鳴り声が聞こえてきた。

しかし、青年はそれを無視して白竜を問いたです。

「黒いドラゴンを知っているのか!？」

「鎖を外せば教えてやる。だから早く外すのだ!」

そうこうしているうちに、「侵入者だ!」という声と共に、テントの入り口に足音が近づいて来た。

青年は入り口の垂れ幕を下ろすと、テントを固定するために使う支柱を垂れ幕に突き刺した。

「鎖を外せば教えてくれるんだな？」

その言葉に、白竜は頷く。

青年は一瞬迷った挙句、白竜の翼手と尻尾に繋がれている鎖を外し始める。しかし、白竜から支柱へと伸びている鎖を外すためには、何箇所かに付いている錠前を外す必要があった。

「鍵がないと無理だ!」

「壊せばよいであろう!」

青年はテントの中を見渡したが、錠前を壊せそうな物はどこにも無かった。

テントの入り口では、刃物で垂れ幕を切り裂いている音が聞こえる。白竜はその間も、鎖から逃れようともがいていた。

そこで青年は、白竜が大きくもがく度に支柱が揺れることに気付いた。

「合図したら思いっきり鎖を引っ張れ」

「何？」

「支柱を引っこ抜く」

青年は支柱の根元の地面を手で掘り始めた。

入り口の垂れ幕はほとんど切り裂かれ、何人かの男達が入ろうと四苦八苦していた。青年は手を擦り切りながらも、土を掘り続け、やがて支柱の骨組みが丸出しになった時に合図した。

「今だ！」

白竜は思いっきり身体を反らすと、前方に倒した。すると支柱が凄まじい勢いで地上に飛び出し、鎖が支柱から外れた。

同時に、テントの入り口から男達が飛び出してきた。

しかし、白竜が翼を大きく羽ばたかせたため、舞い上がった埃で男達は目を覆う羽目になった。それは白竜を助けた青年も例外ではなく、盛大にむせながら白竜に近付こうとした。

しかし、驚いたことに白竜は青年を尻尾で押しつけ、自分だけ逃げ出そうとしていた。頭にきた青年は白竜の尻尾に跳び付いた。

「放さぬか！」

「ふざけるな！」

白竜は大きく顎を開くと火球を発射し、テントを丸焼きにした。尻尾で振り回されている青年は恐ろしい熱気を感じる。

「熱いだろうが！」

「付いて来るでない！」

白竜はそのままテントを吹き飛ばすと、啞然とする周囲を置き去りにして、颯爽と空に飛び立った。

もちろん、青年も一緒である。

「約束が違うだろうが！」

「あの場で申せと言うのか！」

青年は何とか白竜の背中まで辿り着いた。

「もう良いだろう。早く降ろしてくれ」

「我もそうしたいのだが……」

「？」

急に言い淀んだ白竜を怪訝に思い、振り返ると、空軍基地の方角からドラゴンが三騎（三頭）、追いかけて来ていた。

ヴァルト空軍脱出戦

三騎のドラゴンが迫って来る中、青年と白竜はまだ揉みあった。
た。

「早く振り切れ！」

「無茶を言うでない！ ……あの三騎、一騎は正規軍であるぞ」

青年は三騎を確認すると、確かに一騎だけ手馴れた動きをしている。逆に言うと、残り二騎の動きはてんでばらばらだった。恐らく、この機に乗じて名を上げようとしているコマンド希望者だろう。

「墜とすしかあるまい」

「出来るのか？」

「なめるでない」

そう言う和白竜は身体を反転させ、追って来る三騎のドラゴンと対峙した。

「本来ならコマンドがリーダーを参考に我に指示を与えるところだが、仕方がない。お主が我の目となれ」

「ちょっと待て！ 俺は一体どこに掴まれば――」

「ひよっ子共に空の恐ろしさを教えてやろうぞ！」

青年を無視すると白竜は、いきなりトップスピードで三騎に向かって行く。その間に三騎は散開して、別々の方角から迫って来た。

全力でしがみついていた青年は、白竜の翼手から伸びている鎖に気付き、それを掴んだ。

「あう！」

白竜は驚くと、狙いを定めていた正規軍のドラゴンを見失った。

「何をする！」

「おお……まるで手綱みたいで丁度良いな」

「良くないわ！」

気付くと、左側から火球が迫っていた。

白竜はそれを平行移動でかわす。

その瞬間、青年は身体中の内臓が全て平行移動したような感覚に襲われた。

「う！」

「吐くでない！ 吐くでないぞ！」

白竜は右へ左へと急旋回していく。

そのおかげで青年が吐くことはなかったが、みるみる顔が真っ青になっていく。

「正規軍のドラゴンから目を離すでないぞ！」

白竜の命令におとなしく頷いた青年は、正規軍が騎乗するドラゴンを監視する。その間に白竜はコマンド希望の男が操っている茶色いドラゴンに目掛けて、火球を吐き出した。

パニック状態に陥った男が茶色いドラゴンの翼にしがみついたため、バランスを失ったドラゴンにまともに着弾した。

強烈な一撃を受けた茶色いドラゴンは、そのまま撤退していく。

そこで青年は正規軍のドラゴンがこちらに向けて、火球を放ったのに気付き、急いで白竜に知らせようとした。

が、口を開くと恐ろしいことが起こりそうなので、白竜の頭を叩いて知らせた。

「痛！」

白竜は抗議の急旋回を行おうとしたが、目の前の火球を見て止めた。

そこでまたも平行移動でかわすと、そのまま向かって来るドラゴンに対して宙返りし、上から尻尾を叩き付けた。

正規軍のドラゴンは呻き声を上げると、急いで距離をとり始めた。白竜はドッグファイトに入ろうとしたが、完全に固まっているもう一騎のドラゴンに標的を変え、雄叫びを上げた。

怯んだコマンド希望者のドラゴンはそのまま撤退していく。

「ふん。他愛ない」

顔が真っ青を越え、紫に進化した青年を従えた白竜は、正規軍のドラゴンを探し始める。

しかし、青年に頭を叩かれるまで、真下から急上昇してくるドラゴンに気付かなかった。

急いで青年が左の翼手から伸びる鎖を引くと、白竜はその勢いで左に急旋回する。そのおかげで、下方から迫る火球に身を晒さずに済んだ。

白竜は体勢を立て直すと、正規軍のドラゴンのテイル（後ろ）に付いて、ドッグファイトに入る。すると正規軍のドラゴンに騎乗しているコマンドから、銃撃を受けた。

「！！」

「身を屈めておけ！」

白竜はぐんぐんドラゴンとの差を縮めて行く。

しかし、コマンドからの銃撃のせいで、決定打を欠いているようだ。

青年は白竜に繋がっている鎖をガチャガチャと動かすと、部品の一部を外して目の前を飛ぶドラゴンに投げつけた。

予想だにしない一撃を受けたドラゴンは、鈍痛のせいで一瞬よろける。

すかさずそこに白竜が火炎放射を浴びせると、正規軍のコマンドと共にドラゴンがゆっくりと落下していった。

「私の火加減に感謝しておけ」

そう言うとき白竜と青年は大きく下降し、森の中へと消えていった。

参戦

ベルトウェイは、ドクターと共にホリーの部屋に居た。

「ホリーちゃんは無事だったみたいだね」

「はい、先生」

「まあ、俺の娘だからな」

そう言い切ったベルトウェイにドクターはかすかに笑うが、すぐに暗い表情になった。

「しかし、あの襲撃のせいで、ヘルスセンターが半壊してしまうとは……何とか医薬品だけは持ち出せたが……」

「ドクター、ホリーの薬は？」

「ああ………これで全部だ」

ドクターはそう言うと、懷から薬を取り出した。

「これだけか？」

「そうだ。きっかり二週間分しかない」

ベルトウェイは薬を受け取るとホリーに手渡す。

ホリーの不安そうな顔を見たベルトウェイは、ドクターと部屋から出た。今後のことを話そうと口を開いた瞬間、玄関のインターホンが鳴る。

「誰だ？」

ベルトウェイが玄関を開けると、そこには男が三人立っていた。

一人は仕立ての良いスーツを着込んでいるが、後の二人は軍服だった。スーツの男が名乗り出る。

「こんにちは、ゴールドさん。私達は公国の軍事機関である『アエイル軍事部ゲオルギウス連隊』から参りました。軍から通達が届いているのですが、ご存知ですか？」

「ああ、知ってる」

「まだ返事を受けていないので、こうして参りました」

スーツの男がそう言うと、ベルトウェイはドクターに尋ねた。

「あの薬は軍にもあるのか？」

「それは……………」

ドクターが口ごもると、スーツの男が言った。

「そちらの事情は存じませんが、軍では参戦したゲオルギウスの選手全てに望みの物を渡しています。……ゴールドさん、あなたは実力者が集うゲオルギウスの中でも腕が立つ、軍が欲する人材です。協力は惜しみません」

ベルトウェイは目線をドクターに合わせて、ドクターは諦めたように首を振った。

「分かった。軍には事情を伝えておこう」

ベルトウェイはまだ何か言おうとしていたが、ドクターがそれを遮った。

「ホリーちゃんのこととは任せろ」

「……ありがとう、ドクター」

そこでスーツの男が聞いてくる。

「話はまとまりましたか？」

「ああ」

「では、ここから一番近い軍事基地であるコリーナ基地で後ほど」

そう言うと三人の男達は、玄関から出て行った。

準備が出来たらコリーナ基地へと来いということらしい。

ベルトウェイとドクターは部屋に戻ると、今後のことについてホリーに説明した。

「ホリー、これから俺は軍に入隊する」

「え？」

「この前、騒ぎがあったろ？ それは俺達の住む国が戦争を仕掛けられたからなんだ」

「そんな……戦争だなんて……」

「軍に入隊すれば、薬が手に入る。そうすれば当分の心配は無用だ」
「でも！ そしたらお父さんの命が危なく——」

ホリーが全てを言う前に、ベルトウェイはなるべく優しい声音で

言った。

「お前が気にすることじゃないさ」

「……………」

「ホリーちゃん。君のお父さんは君が思っているよりずっと強い。それに娘のためになら父親は何だってする。それが普通さ」

ドクターが諭すと、ホリーはすっかり黙ってしまった。

ベルトウェイは今のうちに話を進めた。

「ドクター」

「ああ。私はヘルスセンターの方を復旧させながら、ホリーちゃんの様子を見よう。何かあったらそちに連絡する」

「分かった」

「それと、昔使っていた大型の無線機がある。それを直せばいつでもこっちと通信出来るはずだ」

ドクターはそれだけ言うと、「じゃあね、ホリーちゃん」と言い残し、ヘルスセンターへと戻っていった。

ベルトウェイはホリーと二人っきりになり、何となく気まづくなつた。

——言うべき言葉が見つからない時は、必要なことだけ伝えるべきだ。

そう思い、ベルトウェイは言った。

「今日中に出発する」

「……………」

言ってから後悔した。

これではあまりに無味乾燥だ。

「じゃあ……準備があるから、な」

その場を逃れようと扉へ向かったベルトウェイを、ホリーが呼び止めた。

「お父さん」

「ん？」

「……………」

無言で訴えてくるホリーを見てベルトウェイは、しばらく待った後部屋を出た。

誰も居ないリビングでベルトウェイは、独り言を洩らす。

「――言うべき言葉が見つからないのはお互い様か……」

腐った上官

「――それで、君はグラティニス共和国から来たというんだね？」

「そうです」

「グラティニスの最高司令官である『総務』の男とも付き合いがあったと？」

「そうです」

「ふむ……それで、君の言い分は何だったかな？」

「く……ですから、そもそもグラティニス共和国が貴公のアエイル公国に宣戦布告した理由は、内部クーデターが原因なんです。クーデターが起こる前までは、他国を侵略することについて誰も考えていませんでした。そのせいで我が軍の対応が遅れたのです」

女はそう言い切ると、苛々しながら眼鏡の位置を修正した。

女の話の聞いていたアエイル公国の上官とおぼしき人物は、それを無視して事情聴取を進めていく。

「君の要望をもう一度言ってみてくれ」

「……まず、私の身の安全の確保を。それから上層部と直接話せるようなポストを一つ。後はありません」

「こちらのメリットは？」

「私が確認している範囲でなら、グラティニス軍の装備や戦力、今後戦闘が起こりそうな地域、今回のクーデターに参加したメンバーなどをお教え出来ます」

「分かった。もう良いぞ」

「……はい？」

そう聞き返すと同時に、取調室に居た二人の男によって女は連れ出される。

「くっ！ 離せ！」

「ラヴィーナ・ミラヴィー君。君にはスパイ疑惑が浮上している。そんな人物に上層部へのポストなど渡せるわけがないだろう」

「グラティニス軍はすぐそこまで迫っています！」

「戦時中に君のような輩は非常に多い。訳の分からない狂言を言つて楽に生きようとする輩がね」

ラヴィーナはズルズルと引き摺られて取調室の外に放り出された。

「……後悔するわよ」

ラヴィーナはそう吐き捨てると、アエイル軍総司令部を後にした。

アエイル公国の首都「オルテンシア」の街並みを歩くラヴィーナは、溜め息を吐く。

「——こんなにもに緊張感が無いなんて……」

敵国だからといって期待しすぎたか。

いや、恐らくアエイルは平和ボケしているのだろう。長年争いからは無縁だったせいだ。

ラヴィーナは髪を掻き上げると、その髪を見つめる。

「髪まで染める必要はなかったわね」

茶色に染めたその髪を指で弄んだ時に、ふと、ラヴィーナは思った。

——いきなり総司令部は無理か。

ならどこから入り込めば良いだろうか？

どこから入り込めばアエイル軍を動かせるだろうか？

どこから入れば……あの男を殺せるだろうか？

「まずは小規模な所から攻めるか」

グラティニスを出る前に覚えてきたアエイルの地図を、頭の中で広げる。

「……ヴァルトにも基地があったわね」

アエイル公国の街の一つにヴァルトと呼ばれる田舎町があった。

そしてそこは小規模ながら空軍を保有していた。

——あそこなら、私の話も聞いてくれるかも知れない。

ヴァルトならオルテンシアからマグレブ（磁気浮上式鉄道）で行けばそれほど時間がかからない距離だ。

ラヴィーナは人混みを掻き分けながら駅へと向かった。

森の中の密約

青年と白竜はヴァルト空軍からの追っ手を振り切った後、森の中へ身を隠していた。

日光から覆い隠すように木々が折り重なっている中で白竜は、伸び伸びと翼を伸ばしている。

そこへ青年がこそそと戻って来た。

白竜は青年が森へ降りた途端、盛大に戻したことを思い出した。

「吐き気はおさまったのか？」

「……多少」

青年は背負ってきたリュックを地面に下ろす。

「街が大騒ぎになってた。凶暴なドラゴンが犯罪者を乗せて身を潜めてるってさ」

「愚かだな。我を助けたばかりに犯罪者扱いされるとは」

「じゃあ俺が愚かで良かったね。そんなことより、早く黒いドラゴンの話をしろよ」

「その前に、ちゃんと持って来たのであろうな？」

青年はリュックの中から鋸を取り出した。

それを確認した白竜は言った。

「鎖を外している間に教えよう」

青年は鋸で白竜の鎖を削り始める。

「我が黒竜を目に留めたのは少し前のことだ。その時は、視界の端に一瞬しか捉えることが出来なかったが、あれは間違いなく黒い体色のドラゴンであった」

青年は黙って鋸で削り続ける。

「……………」

「……………」

「……………?」

「……………」

「え!?!? それだけ!?!?」

「それだけだ」

「もっと他にあるだろ!?!? 居場所とか!」

「ああ、我がその竜を見たのは此処から東の方だ」

「『見た』居場所じゃねえよ! しかも分かんねえよ!」

青年は鋸を放り投げ、絶望した。

「ああ……訳の分かんねえ情報掴まされた挙句、犯罪者かよ……」

「お主、どうしてそこまで黒竜にこだわる?」

「訳分かんねえ情報寄越しやがって……」

青年はしばらく冷静になれなかったが、何かに当り散らしても結果は変わらないことに気づき、口を開いた。

「俺は昔、いじめられてたんだよ」

「……………」

「それである日ヤバイ状況になって、その時に助けしてくれたのが黒いドラゴンだった」

「……我からしてみれば、それこそ『それだけ?』、なのだが」

「いじめれているのを助けられたのは、それで最初で最後だ」

「ということは……それ以来、いじめられなくなったのか?」

「ああ。ドラゴンを飼ってるって噂が立ってそれっきりだ」

青年は街がある方角を見つめた。

白竜もそれを目で追う。

「それからの人生は百八十度——は言い過ぎだけど、百二十度ぐらゐ変わった。いじめられるのは無くなったし、友人も増えていった」

「ほう……しかし、いじめられていたとは意外だな」

白竜はそう言って、黒髪短髪の青年を眺めた。

「見た目で判断するなよ。確かに強面だけど別に尖ってるわけじゃないんだ」

「人間は外見で判断するものではないのか?」

「……中身が見れるきっかけが無いんだ。俺のきっかけは黒いドラゴンだった。あれのおかげでよく分からない自信がついて、身体を

鍛えることにも積極的になっていったし、人間関係も悪い方向には、中々向かなくなった」

「中身を知るきっかけか……そう言えばお主の名は？」

「苗字は佐藤木。そっちは？」

「ドラゴンに名は無い。呼ばれる時は兵器番号だ」

「……なんて呼ばれてた？」

「……前の作戦の時は『ライカ1』と呼ばれていた」

「じゃあライカだ」

「好きに呼べ。どうせ鎖が外れたらもう会うことは――」

そうライカが言おうとした瞬間、街のサイレンが響き渡った。

青年と白竜は木々の陰から少し顔を出すと、街の上空に複数の影が揺らめいているのに気付いた。

ライカは納得したように言った。

「三……六……九……それほど多い数ではないな。恐らく地上部隊と連携をとるつもりなのであろう。此処も焼かれるな」

「嘘だろ……」

「お前を馬鹿にしていた連中はまだここに住んでおるのか？」

「多分そうだと思うけど……何で？」

「丁度良いではないか。恐らくその連中は生き残れまいて」

「そうかも知れないけど……俺の友人と家族がヤバいんだよ！」

「まあ、精々努力せい」

ライカはまた森の中へと戻ろうとした。

その瞬間、佐藤木はライカの鎖を引っ張った。

「うぐっ！？ 何をする！？」

「手伝ってくれよ！」

「何故我が手を貸さなければならぬ！？」

ライカは鎖をぐいぐいと引っ張る佐藤木を尻尾で引っ叩いた。

地面に転がった佐藤木は、それでも負けじと鎖を放さない。

「手伝わなかったらお前の鎖は永遠に外れないぞ！ お前はすでに軍から追われているんだからな！ 俺以外の一般人に頼んでも逃げ

られるのがオチだ!」

そこまで言われてライカは、やっと止まる。

「全く……忌々しい奴だ」

「ふう……今回だけだ。街を救ったら、鎖を外してやる」

「その言葉を忘れるでないぞ……それはそうとお主、また我の背中に乗るのか?」

「そのつもりだけど……」

「酔う癖にか?」

「……でも、俺だけ何もしないのはおかしいだろ?」

「ふむ……では、一度ヴァルト空軍に戻ろう。あそこにはコマンド用の装備が置いてあるはずだ。それを使えば微力ながらもお主も戦力になろうぞ」

「分かった。けど、また見つかったら厄介なことになるんじゃないか?」

「我らに構う暇があるものか。それに見つかる前に、お主一人で行けば気付かれにくいであろう?」

「なるほどね。じゃあ、行こうか」

佐藤木がライカの背中に乗ろうとした瞬間、少し離れた所で爆撃音がした。

「始まっているようだな……急ぐぞ」

佐藤木を乗せたライカは空へと急上昇し、ヴァルト空軍へと飛び立った。

森の中の密約（後書き）

短編「SKY EARTH 〽竜と子〽」にて、佐藤木と黒竜について記述しています。

進路変更

ベルトウェイはマグレブでコリーナ基地へと向かっていた。

時速五百キロで走るマグレブの客室で、窓の外の砂漠地帯を眺めていたベルトウェイは、車内が少し慌しくなったことに気付く。

ベルトウェイが客室から出ると同時に、車内アナウンスが鳴り響いた。

「お客様に大変ご迷惑をお掛けします。先ほど、ヴァルト空軍基地がグラティニス軍による襲撃を受けました。現在も侵略行為が続いているため、急遽進路を変更致します。コリーナ駅の途中、ヴァルト駅の一つ手前のセルバ駅で停車致します」

「セルバか」

ベルトウェイは納得し、客室に戻ろうとする。

「また、お客様のお呼び出しがございます。ベルトウェイ・ゴールドマン様。至急、お近くの電話室までお越しください。軍事機関の方からお電話です」

自分が呼ばれたことに驚いたベルトウェイだったが、コリーナ基地まで行く人間は一般的にマグレブを利用するので、軍による監視の心配は無いと思った。

ベルトウェイは第二区画に居たので、第三区画との間にある電話室を利用した。

受話器を取ると、聞こえてきたのはスーツの男の声だった。

「ゴールドさん。今からヴァルトに向かってください」

「ヴァルトに？」

「ええ。現在、コリーナ基地からヴァルトに向けて兵士を向かわせています。ゴールドさんは現地で部隊と合流し、そのまま任務にあたって下さい。」

「部隊の数は？」

「地上部隊は四人一組で六部隊です」

「一個小隊（三十人から六十人）もないのか。空からの支援は？」

「ヴァルト空軍が居ます」

「……足りるのか？」

「そのことですがゴールドさん……気を付けて下さい。どうやら本部は増援を送るつもりは無いようです」

「……ヴァルトの規模が、小さいからか？」

「ええ……それと重要拠点がありません。しかも、兵士の人員が足りていない状態です。もうどこにも回す余裕がありません。それに、本部は敵もそれほど攻めて来ないだろうと高をくくっています」

「馬鹿な。ヴァルトの森を占拠されたら厄介だぞ。あそこに対空兵器を隠されたら二度と奪還は出来ない」

「その通りです。しかし……さすがに六部隊では難しいです。ゴールドさんは……頃合いを見て撤退してください」

「民間人を見捨ててか？」

「……仕方ありません。今、あなたを失うことは、我が軍にとって大きな損失となるのです」

「……評価してくれるのは嬉しいが、撤退するかどうかは俺が決めることだ」

「……………」

「俺が入る部隊はどうなってる？」

「はい、現在『アース隊』として三人でヴァルトに派遣しています。その他にも『ソイル隊』、『ランド隊』と、コリーナ基地からは三部隊派遣しています。あなたが合流しだい、隊長の命令に従うようにと伝えていきます」

「……その口ぶりから察するに、隊長は俺か？」

「ええ」

「……………」

「不満ですか？」

「……いや、なら今のうちに作戦を練らないとな」

「よろしく願います。装備はアース隊に合流すれば渡されるは

ずです」

「ゲオルギウスで使っている『商売道具』なら今ここにあるぞ？」

「方法は構いません。ゴールドさんに任せます。では」

ベルトウェイは受話器を置いた。

「……………」

闘いには秀でていたベルトウェイだったが、軍事活動には参加した覚えが無かった。

しかし、自分がヴァルトに辿り着く前に有効な作戦を思いつかなければ、味方全員が危険に晒されてしまう。

マグレブがセルバ駅に到着すると、ベルトウェイはヴァルトの街並みが描かれている地図を購入し、入念に考察してからヴァルトに向かった。

大敗からの奇襲

ライカは佐藤木を乗せて、ヴァルト空軍の真上を飛んでいた。

「全滅だな」

「……………」

佐藤木の眼下には、あちこちで未だに炎が燦っている空軍基地が広がっていた。至る所で人間やドラゴンの死体が転がっている。

佐藤木は思わず目を背けた。

「お主、人間の死体を見るのは初めてか？」

「爺ちゃんや婆ちゃんが死んだ時以来だよ」

「ふむ……おっと、そろそろ見つかってもおかしくない頃だ」

ライカは佐藤木を空軍基地の敷地内に降ろした。

「良いか？ 『レーダー』は巨大な腕時計のような形をした機材だ。恐らく人間の死体を持っているであろう。『フレア』（欺瞞）はベルトに発炎筒のような物が複数巻かれている。これも人間が持っている。ただし、『熱感知式ミサイル』は倉庫にあるかもしれない。形は見ればすぐに分かる。それと基地の管制塔から通信機材を持ってくるのだ。『ヘッドセット』と『無線機』だぞ。後は出来れば『ゴーグル』と『手袋』だ。初心者には必要なものだ」

「分かった」

「用意出来たらこの場所で拾ってやる。お主の姿が見えたら我の方から出向く」

佐藤木は頷くと、早速走り出した。

ライカは周りを見張るため、空軍基地の周辺を高度を下げた旋回することにした。

しばらく経つと、ライカの目に街を襲撃し始めるドラゴン達が見えた。

「やはり空を完全に支配されたようだな」

ライカは空軍基地の建物の影に隠れた。

街を占拠した後、奴らは必ずここに戻って来る。ライカがそう思った矢先、一騎のドラゴンがこちらへと向かって来た。

ライカはドラゴンに乗っているコマンドを確認すると、服に赤い紋様が見て取れる。

「グラティニス軍か。戦果の確認でもしに来たか？」

それと同じくして、合流地点にのこのこと佐藤木が現れた。

「あの阿呆……！ 確認してから出て来いというのに……！」

ライカは合流地点へと急いで向かう。

しかし、敵のコマンドも佐藤木の存在に気付いたようで一気に下降して来た。

「ミサイルを使え！」

ライカは佐藤木にそう指示すると、佐藤木は頷いてミサイルランチャーを敵のドラゴンに向けて構える。

すると、ドラゴンは佐藤木に向けて火球を発射した。

ライカも火球を発射し、佐藤木の頭上の火球を相殺する。

二匹のドラゴンの間に凄まじい爆煙が発生し、その中からミサイルが飛び出して敵のドラゴンに着弾した。

叩き落とされたドラゴンに向けてライカはさらに火炎放射をぶつけ、もう一度火球を発射した。

ほとんど炭と化したグラティニス軍のコマンドとドラゴンを尻目に、ライカは着地した。

「早く乗れ」

「……………」

「街を救いたいのであろう？」

佐藤木は無言でライカの背中に乗った。

「必要な物は揃えたな？」

「ああ」

ライカは首を曲げて佐藤木を見る。

左腕にレーダー機材を取り付け、手袋とゴーグルを身に着けたう

えで、ヘッドセットをかけている出で立ちだった。

「なかなか様になっているな」

「でも俺は何をすれば良いんだ？」

ライカは街へと向けて飛び立つ。

「コマンドが行うことは三つだ。一つは騎乗するドラゴンの操作。

二つ目はレーダーやフレア、入ってくる通信などを駆使し敵を発見、回避することだ。そして三つ目は我と共に敵を墜とすことである」

「ミサイルを使うのか？」

「銃火器も使え」

「持ってきてない……レーダーの見方は？」

「緑の光点が味方で、赤の光点が敵性だ」

「赤の光点が八つだ……」

「一騎は先ほどのドラゴンだったな……しかし、八騎を同時に相手にするのは愚の骨頂。建物の影から一騎ずつ奇襲するぞ」

「了解」

ライカと佐藤木は、八騎の動きに集中した。

合流

アース隊はソイル隊とランド隊と共に、ヴァルトの東から攻めてくる地上部隊と交戦していた。

「隠れろ！」

アース隊の一人がそう叫ぶと、他の部隊全員が近くの建物に隠れる。

その瞬間、空からいくつもの火球が降り注いだ。

崩れかけた建物の中で、アース隊の一人が言う。

「これじゃあまともに戦えない……」

ランド隊の一人も言う。

「あのドラゴン達を何とかしないと……対空兵器は無いのか？」

ソイル隊の男が答える。

「この街にあるやつは全部破壊されてる」

「そうか……くそっ、釘付け状態だな」

そう言った矢先に銃弾が飛んできた。

「伏せろ！」

頭上を銃弾が掠めていく中、ソイル隊が飛び出して行く。その後アース隊が続いた。

前方の瓦礫から、何人ものグラティニス軍兵士が進撃してくる。

アース隊の男はアサルトライフルで弾幕を張ると、近くの物陰に隠れた。すると、横からグレネードランチャーの弾頭がグラティニス軍に向けて放たれる。おかげで五、六人の敵兵が吹き飛んだ。

ソイル隊の男が思わず唸る。

「やるなあ！」

アース隊の男が言った。

「よし。あいつを基点にしてこのまま防衛すれば――」

男がそう言い終わる前に、南から銃声が鳴った。

建物の影から乗り出してアサルトライフルを連射していたランド

隊の男が倒れた。男が南の方角を見ると、街のバリケードを突破した敵軍の地上部隊が自分達に向かって押し掛けて来ていた。

「下がれ！」

アース隊の男が叫ぶ。

三部隊は建物の奥へと戻ろうとしたが、奥からも敵が現れた。アース隊の一人がそのまま敵を排除しようと蹴りを見舞おうとしたが、押し返されてナイフを向けられる。

回避しようと地面を転がるが、追い付かれてナイフを突き立ててきた。思わず目を瞑り、来るべき衝撃に対して構える。

しかし、いつまで経っても身体に痛みが走らない。

アース隊の一人は目を開けた。すると、さっきまで自分にナイフを下ろそうとした相手は地面に倒れていた。

後方で銃声がしたので振り向くと、茶髪の大男が敵兵をなぎ倒していた。

その男の動きは俊敏で、縦横無尽に敵兵を打ち倒していく。時には背中中のブレードで、時には銃器や素手で打ち倒すその姿は、人間では無く獣を思わせた。

他の三部隊も突然の乱入者に戸惑いを隠せない。気付くと、その場に立っているのは乱入者と三部隊だけだった。

アース隊の男は、はっとしたように持っていたアサルトライフルを乱入者に向けて構えた。

「誰だ！？」

乱入者である大男は素直に手を上げた。

「俺は敵じゃない」

「名前は？」

「ベルトウェイ・ゴールドマン」

「ベルトウェイだって？」

ベルトウェイが名乗った瞬間、ソイル隊の男が反応した。

「あんた、まさかゲオルギウスで有名なあのベルトウェイか？」

「ああ。コリーナ基地に向かう途中で命令を受けて、此処に来た」

「じゃあアース隊の空いた席に入るのって……?」

「ああ。俺のことだ」

それを聞いたソイル隊の男が沸き立つ。

「やったぜ! これで一気に戦力が増えた!」

しかし、アース隊の男が反論した。

「おいちょっと待てよ! いきなりこいつのことを信用して良いのかよ!？」

「良いも何も……俺達を助けてくれたじゃねえか?」

「罠かも知れないだろう!」

「味方殺してまでか? そりゃ無いね」

「よく考えろ能無し!」

「何い!？」

「お前ら落ち着いてくれ!」

アース隊の一人が二人を止めようとした時、アース隊の女が言った。

「信じるかどうかは別として、戦力にはなるんじゃない?」

「何だと?」

アース隊の男が女に突っ掛かろうとした時、ベルトウェイは気付いた。

「イーリス?」

「……………」

「何だ? あんた達、知り合いなのか?」

「ああ……少しな」

ベルトウェイは言葉を濁しながら、ソイル隊の男に聞いた。

「他の部隊と連絡出来るか?」

「ああ、この無線を使えば——」

「おい待て!」

アース隊の男が無線を取り上げる。

「何すんだ!」

「こいつが味方かどうかもわかんねえだろ!」

「まだそんなこと言ってるのか！」

「信用しなくていい」

ベルトウェイが言ったその言葉に全員が黙った。

「俺は別行動を取る。南側の敵を抑えるから、他のを頼む」

そう言うとして一人で建物に囲まれた道路を進んで行く。

「待て！」

アース隊の男がそう言うと同時に、イーリスがベルトウェイの後を追う。

「おい！」

「……何？」

「何じゃない！ どこに行く！？」

「私は生き残れる方に行くだけ」

イーリスはそう言うとして、瓦礫の奥へと消えた。

「つたく、どういつもこいつも……」

アース隊の一人が、苛々している男に言う。

「向こうが二人で、こっちが一人だから、俺はこっちだな」

「……ふん」

アース隊の男はどうでもよさそうに鼻を鳴らすと、ソイル隊の側まで戻った。

「俺達は敵が来たら倒すだけだ」

アース隊とソイル隊はその場をランド隊に任せ、東側へと向かった。

ベルトウェイはイーリスに聞いた。

「ヴァルト空軍はどうした？」

「全滅」

「……………」

ベルトウェイは予測していたとはいえ、改めて言われると自分達が苦境に立たされていることに気付いた。

「敵の地上部隊は？」

「二個小隊」

「航空部隊は？」

「九騎……だったけど、さっき確認したら八騎だった」

「墜としたのか？」

「違う。一騎、空軍基地の方に向かったきり、戻ってこない」

「ヴァルト空軍の生き残りが墜としたのか？」

「それは無い。ヴァルト空軍にそんな度胸のある奴はいない。あいつら敵兵が攻めてきた瞬間、ほとんどがビビッて動いてなかった」

「アース隊とさっきの二部隊以外は どうしてる？」

「それぞれ北と西を守ってるけどヤバイみたい」

「民間人は？」

「ほとんどが避難した」

「だとすると、後は俺達だけか」

「手助けしてくれるのは良いけど、何も考えてないってことは無いよね？」

「ああ」

ベルトウェイは適当な建物に隠れ、地図を広げた。地図に所々印が付いている部分をイーリスに説明する。

「この印は街の中で一際高い建物を示している。このビルの正面に敵兵を集めるんだ」

「どうして？」

「ビルを爆破する」

「は？」

イーリスが驚いていると、遠くでドラゴンが羽ばたく音が聞こえてきた。

ベルトウェイはイーリスを誘導し、建物の奥へと隠れる。

「ビルなんか爆破しても、巻き込まれる敵の数なんかたかが知れてるじゃん」

「ただ爆破させるだけじゃない。爆薬をビルの中と外に分けて設置して、正面に倒れるように仕掛ける」

「敵を押し潰すってこと？」

ベルトウェイは頷いて、外の様子を見る。

「うまく倒れるの？」

「爆発物に関しては、君の方が詳しいんじゃないか？」

イーリスは持っているグレネードランチャーを見つめながら思索した。

「――十分な爆薬があればいけると思うけど……ただ、爆薬を持っているのは私達じゃなくて、北にいる他の部隊」

「連絡出来るか？」

「私の無線機からは無理」

「なら直接取ってくる。君は印を付けたビルに行って、一階にある支柱や鉄骨、爆薬を効果的に仕掛けられる場所を把握してくれ」

「それは良いけど……空にいる奴らはどうするの？」

「そうだな……」

ベルトウェイが悩んでいると、突然外から爆音が響いた。

イーリスと外に出てみると、上空でグラティニス軍のコマンドを翻弄している、一騎の白いドラゴンが見えた。

「あれって……」

「今のうちだ」

ベルトウェイは北に向かって走り出した。

イーリスも地図を手にとると、印に向かって駆け出した。

呼び掛け

管制塔の中は、突然の襲撃により滅茶苦茶になっていた。

おかげでラヴィーナは管制室を見つけるまで、横倒しになった機材やデスクを何度も跨ぐ羽目になった。

「火事場泥棒になるけど……」

ラヴィーナは管制室の扉を開けると、使えそうな資料や機材を探した。

これで軍の上官が必要とする書類などを見つけてことが出来れば、良い取引材料になるかも知れない。

ラヴィーナは避難した上官が間抜けなことを祈りながら、火花が散っている管制室を歩き回る。その途中で、ヴァルトの街に展開しているアエイル軍を表示したレーダーを見つけた。

「ひどい有様ね……」

レーダーに表示されたアエイル軍は、東西南北全てに配置されたグラティス軍によって完全に包囲されていた。西や北にいるアエイル軍はほぼ壊滅状態で、残りも申し訳程度にしか配置されていないほどの戦力だった。おまけに動きもてんではばらばらである。

「上官に恵まれなかったようね」

他人事のように考えていたラヴィーナだったが、頭の中では自然とアエイル軍の戦略を立て直していた。

まず、空軍基地のある西側に地上部隊を集結させて隊列を立て直してから、向かってくるグラティス軍を編成させた陽動部隊で……。

そこまで考えてラヴィーナは、暴走した思考を停止させた。

「……これはもう、職業病ね」

レーダーを無視し、搜索を再開しようとした時、突然設置されていた通信機が鳴った。

「——えるか？　こちらグラウンド隊、敵地上部隊の攻撃で壊滅寸

前だ！ 今すぐ援軍を送ってくれ！」

ラヴィーナは無視することに決め、デスクの上の資料に目を通す。
「お願いだ応答してくれ！ もう誰も居ないのか！？」

最初は無視して読み進めていたが、結局ラヴィーナは資料を投げ捨てて応答した。

「……こちらヴァルト空軍基地管制塔」

「良かった、通じたか！ こちらグラウンド隊、敵部隊の攻撃により防衛線が破られそうだ！ 一度後退して態勢を整えたい！ 合流ポイントを指示してくれ！」

自然とラヴィーナの目は、レーダー上でグラティニス軍のいない安全地帯に動いていた。

「了解、後退を許可する。次の合流ポイントは南西の角にある百貨店だ」

「了解！ 後退する！」

そこで通信が途切れた。

ラヴィーナは自嘲した。

「何をやってるの……私は」

グラティニス軍が来る前にここを出るつもりだったラヴィーナは、レーダーから目を離せないでいた。すると、レーダーのあるデスクの端に書類が置かれていることに気付く。調べてみると、ヴァルト空軍基地に配備されていた地対空ミサイルの、有効射程距離測定の結果が記されていた。

ラヴィーナは歓喜した。

「まだ間に合う……！ 急いで書類をまとめて、敵に見つからないようにヴァルトから出れば——」

そこで途切れた通信機が再び鳴った。

「——こちらランド隊！ グラウンド隊からの通信により、そちらがまだ機能していることを報告されました！ お願いです！ 増援を送ってください！ ランド隊は既に壊滅寸前です！ 繰り返しします！ 壊滅寸前です！ 俺達は——」

そして通信が途切れた。

ラヴィーナは動けなかった。身体は出口の方向を向いているのに、心はさっきの無線の主に囚われたままだった。

このまま出口に向かうべきか。

それともレーダーの場所に引き返すべきか。

ラヴィーナは、出口へと、足を進めた。

そして、一瞬だけ、レーダーが表示されたパネルへと目を戻した。

ランド隊がいたはずの緑の光点が、全て消えていた。

遅かった。

全ては遅かったんだ。

ラヴィーナはそう自分に言い聞かせ、管制室を後にしようとした。唐突に、通信機が鳴った。

「――管制塔へ、ソイル隊から報告！ 現在、アース隊二名と共に敵を北西にあるビルに誘導中！ また、アールデ隊とアース隊一名による『ルーメンビル倒壊作戦』を進行中！ こっちはまだ諦めちゃいねえぜ！」

ラヴィーナは思った。

このまま管制室を出れば、まだ安全にヴァルトを出ることが出来るだろう。そうすれば早い段階で、アエイル軍の上層部に書類を渡すことが出来る。そして身分を隠して近付けば、恩赦で軍に入れるかもしれない。

そうすれば、あの男にまた一步近づける。

そうすれば、ヴァルトにいるアエイル軍はまた全滅の危険に晒される。

ラヴィーナは、レーダーのパネルへと、急いで戻っていた。

見捨てることは簡単だ。

だがそれでは、あの男のやり方と変わらない。

あの男と同じ道を歩んで勝ったところで、何も変わらない。

私は別の道を選んで歩み、同じ場所に立ってやる。

そして、必ずお前の息の根を止めてやる。

ラヴィーナは、ヴァルトで戦っている全アエイル軍に対して呼び掛けた。

「全軍へ、こちら管制塔。聞こえるか？」

邂逅

「無線が入ったぞ！ 一旦止まれ！」

アールデ隊の隊長が移動している隊員達を呼び止める。

無能な上官のおかげで、単独で北で交戦していたアールデ隊に「ルーメンビル倒壊作戦」を伝えたベルトウェイは、二つ返事で承諾したアールデ隊をルーメンビルまで誘導していた。

ベルトウェイは隊長の持っている無線機に耳を澄ますと、若い女の声が聞こえてきた。

「――こちらヴァルト空軍管制塔。先ほど入った通信をキャッチした。『ルーメンビル倒壊作戦』の内容を報告せよ」

隊長はさっそく作戦内容を伝えようとしたが、ベルトウェイが目で合図し、止めさせた。

「……どうした？」

「……最後に管制塔から通信があったのは、どれくらい前だ？」

「……三時間前だ」

「……今まで音信不通だった管制塔が突然、連絡を寄越してくるのはおかしい。無線機を貸してくれ」

無線機を受け取ったベルトウェイは、通信相手に尋ねた。

「こちらアース隊。まずそちらの状況を知りたい。一時間前から通信が途切れていたが、大丈夫か？」

「問題ない。今は落ち着いている」

「そちらの責任者は？」

「私だ」

「他の職員は？」

「関係者以外は避難した」

「いつ避難したんだ？」

「二時間前だ」

「……最後に通信があったのは三時間前だ。その間は何をしていた

んだ？」

「……………」

「お前は誰だ？」

「軍人よ」

「そこで何をしている？」

「あなた達を助けようとしている」

「アエイル軍なのか？」

「違う」

「じゃあなぜだ？」

「……分からない。でも敵じゃない」

「信用できない」

「信用しなくて良い。ただ、あなた達が敵の位置を把握しないで作戦を遂行するのは無理よ」

「……………」

「……大丈夫、本当に敵じゃない。危険を承知で私がここにいる時点で、あなたも気付いているはず」

「……分かった。何て呼べば良い？」

「……本名は言えない。だから、そのまま『管制塔』でお願い」
「分かった管制塔。作戦内容を伝える」

「右から近付いてくる！」

「ミサイルを使うのだ！」

佐藤木を乗せたライカは、ヴァルトの上空で八騎のドラゴンから逃げ回っていた。幸い敵のドラゴンコマンドの実力は高くないようで、八騎に囲まれながらも何とか翻弄していた。

「こんな状態じゃミサイルを使えない！」

「こんな状態で使うのがミサイルなのだ！」

ライカは相手のドラゴンが火球を放ってきたのに対して、急旋回して回避した。

「もう振り落とされそうだ……！」

「ここまで時間を稼げば十分であろう。恐らく地上部隊が何かしらの作戦を進めているはずだ」

ライカは最高速度で、敵編隊との距離を引き離した。

「吐きそうだ……」

「降りてからにして欲しいのだが……」

その時、ヘッドセットから若い女の声が聞こえてきた。

「――こちら管制塔。聞こえるか？」

一瞬返事に困ったが、今更逮捕は無いだろうと思い佐藤木は応答する。

「……はい、聞こえます」

「貴官の所属は？」

「……アエイル軍です」

「ヴァルト空軍の生き残りか？」

「……そうです」

「そうか。では『ルーメンビル倒壊作戦』のことは聞いているか？」

「いいえ」

「では、今から参加してもらいたい。作戦内容は追って伝える」

女はそう言うと、唐突に通信を切った。

佐藤木が複雑な表情を浮かべていると、ライカが言った。

「今、我らに策は無い。ならばその女のいう『作戦』に乗るのが、今、お前の街を救う手段なのだろう？」

佐藤木は静かに頷いた。

作戦開始

ルーメンビルに辿り着いたアース隊の二人は、ビルの一階にいたイーリスと合流した。

一階にある支柱部分についている印を横目に、アース隊の男がイーリスに尋ねる。

「無線で聞いたが、この作戦もベルトウェイとかいう男の案らしいな。まったく……どうしてあの男を信用してるんだ？」

「信用してるわけじゃない。少なくとも、あんたよりは頼りになるってこと」

「この……！」

「まあまあ」

暴れだしそうになったアース隊の男を、もう一人の男が抑える。

その様子に呆れたイーリスは、未だに見えない敵兵とソイル隊について聞いた。

「ソイル隊は？」

「作戦通り、グラティニス軍の陽動をしているよ」

「分かったから放せ！」

押さえつけていた男が放すと、アース隊の男は手で服を払った。

「ふん……それで？ 肝心の爆薬係はどこにいるんだ？」

「ここにいる」

イーリス達がビルの入り口を見ると、ベルトウェイが大量の爆薬を抱えて立っていた。

「チッ……」

残念そうに舌打ちしたアース隊の男を無視して、もう一人の男がベルトウェイに尋ねる。

「アールデ隊は？」

「一足早く、ビルの外側に爆薬を仕掛けに行った」

「他の二部隊は？」

「全員、敵部隊の陽動に回っている」

ベルトウエイはそれぞれに爆薬を手渡し、アールデ隊から受け取った無線機を取り出した。

「俺は管制塔に作戦準備が整ったことを伝える。三人は一階の支柱にそれぞれ爆薬を設置してくれ」

「了解。任しとけ」

「分かった」

一人を残して後の二人は、爆薬を設置しに行った。

「作戦には乗ってやる。でも、お前を信用したわけじゃない」

それだけ言うと、もう一人も渋々動き出した。

ベルトウエイはアサルトライフルを構えながら入り口に移動すると、まだなんとか日が昇っている外を警戒しながら管制塔に連絡を入れた。

「こちらアース隊。現在、ルーメンビル一階の内側と外側から、それぞれ爆薬を設置している。アールデ隊とソイル隊はルーメンビル正面に敵部隊を誘導中だ。また、他の二部隊に関しても同じだ」

「――了解、アース隊。その様子で行くと敵部隊の到着は五分後の予定だ」

「了解。爆薬を設置次第、待機する。また、先ほどからランド隊と通信が取れないんだが、何かあったのか？」

「……アース隊へ、ランド隊は既に全滅している」

「……了解」

「……しかし、嬉しいニュースもある。ヴァルト空軍の生き残りである一騎のドラゴンとコマンドが、作戦に参加した」

「……ということは、敵の航空部隊に少なからず抵抗できるのか？」

「敵騎は全部で八騎だ。例え一騎ずつだとしても墜とすことは難しいが……敵の目を地上部隊から逸らすことは恐らく可能だ」

「了解。通信を繋げられるか？」

「ああ、大丈夫だ、今から繋ぐ。それでは、三……、二……、一……、いいぞ」

「こちらアース隊、聞こえるか？」

「――聞こえます。地上部隊ですか？」

「そうだ。『ルーメンビル倒壊作戦』の内容は聞いているな？」

「はい」

「それでは貴官に指示を与えたい。大丈夫か？」

ベルトウェイは無線機から、かすかに話し声が聞こえた気がした。

「――大丈夫です。お願いします」

「……感謝する。それでは今から五分後、貴官には敵の航空部隊である八騎のドラゴンをなるべく引き付けておいて欲しい」

「――無線機から、話し声が聞こえてきた気がした。」

「――了解。どのくらい引き付けておきますか？」

「引き付けておける限界までだ。無茶を承知で頼む」

「……分かりました。やってみます」

「ありがとうございます……それと最後に質問だが、貴官は今『一人』か？」

「……ええ、まあ」

「……そうか、分かった。それでは五分後に頼む」

相手の無線機の反応が無くなると、今度は通信が切り替わった。

「――通信は終わったか？」

「ああ」

「これで全部隊に作戦は伝えた。後は……成功を祈るだけだ」

「ああ、しっかりサポートを頼む」

「任せておけ」

通信が切れると同時に、アース隊の三人とソイル隊が戻ってきた。

「外は範囲がでかいから時間が掛かっちゃったが、無事に終わったぜ」

「中も終わった。最悪、起爆装置がダメになっても倒壊させられるように、一箇所爆破すれば誘爆するように設置したよ」

「ご苦労だったな。ではこれから、ビルの側面にそれぞれ移動する。ソイル隊はビルの正面から右へ、俺達は左側に位置する。敵部隊が正面に集まるまで防衛するぞ」

「了解だ！」

ソイル隊は早速移動を開始した。

「俺達も行こう」

「ああ」

「分かった」

「……………」

相変わらず返事の無い者が一名いたが、段々と銃声が近付いてくるベルトウェイにとって、構っていられなかった。

無線機を取り出すと、ソイル隊に呼び掛けた。

「どうやら五分も経たないうちに来そうだ。全員、戦闘態勢に入れ」

「もう入ってるさ！ 左は任せろ！」

ソイル隊の言葉を聞いて、アース隊も戦闘態勢に入った。

イーリスは後方でグレネードランチャーを構えて、残弾の確認をする。

アース隊の二人の男も、アサルトライフルを構えてそれぞれの位置に着いた。

ベルトウェイは背中のブレードを抜くと、二、三振り回して感触を確かめた。

管制塔からの無線が入る。

「全部隊へ、各自戦闘隊形を取ったな？」

丁度その時、前方で爆音が鳴った。

ベルトウェイはブレードを背中に仕舞い、アサルトライフルを持ち替えて強く握り締めた。

——これが終わったら、まずはホリーを安心させてやらないとな。

「それではこれより、『ルーメンビル倒壊作戦』を開始する」

Mission01: Revenge on Wald (前書き)

Missionでは司令官の声を《》で囲んでいます。

Mission 01: Revenge on Wald

建物の影からアールデ隊が飛び出してくると、アース隊は一気に躍り出た。

意外にもさっきまでベルトウェイに反抗していた男が、先陣を切って叫ぶ。

「後退する場合はビルの正面にしろ！ 側面には行かせるなよ！」
そのまま男が、アールデ隊を追跡していた敵兵に銃弾を浴びせる。
「街路樹の陰に隠れて戦え！」

もう一人の男はそう言うと、陽動作戦を完了したアールデ隊を物陰まで誘導した。

アールデ隊と行き違いになったベルトウェイは、構えていたアサルトライフルで追いついてきた敵兵をけん制し、コンクリートの遮蔽物に身を隠した。

「イーリス、援護を頼む」

イーリスが頷いたのを確認したベルトウェイは、物陰から飛び出した。

背中のブレードを抜いたと同時に、目の前の敵が吹き飛ぶ。左腕のシールドで敵兵の銃弾を防ぎながら、イーリスが撃ち漏らした敵をなぎ払っていく。

しかし、いくら敵兵を倒しても次から次へと迫ってきた。

「下がれ、ベルトウェイ！」

いつの間にかアース隊の男がアールデ隊の誘導を完了し、前線まで戻っていた。

男の言うとおりに、ベルトウェイがビルの入り口近くまで戻ると、ソイル隊と他の二部隊が合流していた。ソイル隊は負傷した陽動部隊の隊員をビルの側面まで引っ張っていた。

「ソイル隊を援護しろ！」

ベルトウェイが叫ぶと、アールデ隊の隊員達が突撃してくる敵部隊

に銃弾を浴びせた。ベルトウェイも弾幕を張っていると、無線機に管制塔からの通信が入った。

《――全部隊へ告ぐ、敵部隊がビル周辺に集まっている模様。背後を取られる前に作戦を実行せよ》

先陣を切っていたアース隊の男が叫んだ。

「こんな状態じゃ無理だ！」

イーリスも今回はかりは同調した。

「今は作戦を忘れて守りを固めるしかない！」

ベルトウェイも賛成し、無線機で全員に呼び掛ける。

「アース隊から全部隊へ！ 直ちにビル正面に集結せよ！ 正面玄関にて敵を迎撃する！」

アース隊がビルの入り口に向かって走り出すと、無線機から応答が聞こえた。

「ソイル隊、了解！」

「アールデ隊、了解！」

アース隊が入り口に辿り着く頃には、ビルへと続く石畳の階段を何百人もの敵兵が駆け上がってきていた。

「アース隊、入り口を死守する！」

アース隊の男二人は、駆け上がってくる敵兵をアサルトライフルで迎撃する。イーリスは後から来る他の部隊のために、グレネードランチャーで階段を確保していた。

ベルトウェイは上空を気にしながらも、無線機で管制塔に通信を入れた。

「こちらアース隊、ビル一階の正面玄関に集結した。他の部隊はどうなっている？」

《アース隊へ、ソイル隊とアールデ隊はまもなくそちらに着く。他の二部隊は……壊滅した》

「くっ……！ ……管制塔へ、敵の飛行部隊はどうしている？」

《現在、味方のドラゴン一騎が注意を引いている。なんとか逃げ回っているようだが、出来れば援護が欲しいと先ほど通信が入ってい

る」

「了解、善処する」

ベルトウエイは管制塔との通信を切ると、他の二部隊へと連絡した。

「こちらアース隊、誰か地対空ミサイル又は熱感知式ミサイルを所持しているか？」

「――こちらソイル隊、こっちは誰も持ってねえ！」

「――アース隊へ、こちらも所持していない！」

「……了解、続けて合流を急いでくれ」

ベルトウエイが物陰に隠れ、敵兵をけん制しながらも必死考えていると、イーリスから無線機に通信が入った。

「――対空用じゃないけど、ロケットランチャーならある。このビルの高さなら、屋上から撃てばもしかしたら当たるんじゃない？」

ベルトウエイはビルを見上げた。

「……そうだな、試してみる価値はありそうだ。……よし、イーリス、ロケットランチャーを貸してくれ。一階は頼んだぞ」

「任せて」

ベルトウエイはイーリスが投げたロケットランチャーを掴むと、一階のエレベーターに向かって走った。

すると突然、肩に激痛が走る。

見てみると、銃弾が掠めていったようで、鎖骨のあたりまで血が滴っている。ベルトウエイは急いで振り向くと、敵の狙撃兵が自分の額を狙っていた。一瞬、脳裏にホリーの姿が思い浮かんだが、狙撃兵は真横から銃撃により突然倒れてた。

見ると、ソイル隊とアールデ隊がアサルトライフルで敵部隊に銃撃を加えていた。

「ソイル隊、アールデ隊と共にアース隊と合流！　イーリスから話は聞いているぜ！　一階は任せな！」

ベルトウエイは頷くとエレベーターに乗り、屋上へと急いだ。

ライカは背後から迫ってくる火球を、紙一重で避けていた。

「――私の腕の感覚が無くなって来た……お主、早く発射せぬか！」
「分かってる！」

佐藤木は後ろ向きでミサイルランチャーを構えていたが、発射したのは相手が先だった。

「ミサイルだ！」

ライカは急いでミサイルを回避し、戻ってきたミサイルは佐藤木が振りまいたフレアで攪乱された。

「後どのくらい逃げられる……!?!」

「もって三分だ……!」

ライカがそう唸ると、前方に敵のドラゴンが現れた。

「まずい！ 挟み撃ち――」

佐藤木がそう言いかける前に、前方のドラゴンが何かによって爆破され、撃墜された。

佐藤木達が啞然としていると、無線機に地上部隊であるソイル隊から、通信が入った。

「――もう良いぞ、十分だ！ 後はすぐに離脱してくれ！」

「……了解！」

「まったく、一時はどうなるかと思うたが……ん？ あれは……」

ライカの視線の先には、ルーメンビルの上にあった。佐藤木はライカの視線を追うと、屋上でこちら合図を送っている男が見えた。その男はすぐにビルの中に消えてしまったが、ライカは確信した。

「恐らく、あの男が先ほどのドラゴンを墜としたのだろうか」

「うん……」

佐藤木が納得し、前に振り向こうとしたその時、真横を火球が通り過ぎていった。

「ふん！ まだ相手をして欲しいようだ」

「追っかけて来ているのは一騎みたいだ……墜とそう」

「ほう、お主も言うようになったか……良いだろう！」

ライカは旋回し、敵のドラゴンの正面を取った。

「準備は良いか!？」

「大丈夫! 行け!」

佐藤木がミサイルランチャーを構えると、ライカがそのまま突っ込んでいく。

相手のドラゴンも、正面から体当たりしてきた。

ライカが火球を発射すると、相手のドラゴンも火球を発射し相殺した。コマンドが発射したミサイルを、佐藤木はフレアで攪乱する。

すれ違いざまに佐藤木は、ミサイルを発射した。

ほぼゼロ距離で発射されたミサイルを、相手のドラゴンは避けきることが出来ず、そのまま着弾しヴァルトの街へと墜ちていった。

「……………」

「……良くやった。我はお主を褒めて遣わそう」

佐藤木の無線機に管制塔から通信が入った。

《——こちら管制塔、よくやってくれた。戦闘空域を離脱してくれて構わない》

佐藤木はその命令通り、ライカと共にルーメンビルの空域から離脱した。

「ベルトウェイはまだか!？」

アース隊ら三部隊は、ビルの入り口に陣取って敵部隊の猛攻を防いでいた。

それぞれが限界を感じていたその時、全部隊の無線機にベルトウェイから通信が入った。

「——聞いてくれ、今から一階の裏口から一部隊ずつ脱出しろ。先に起爆装置を持っているアールデ隊から行かせるんだ」

無線を聞いていたアールデの隊長が聞き返す。

「分かった。でも、あんたは？」

「俺は最後に脱出する。全員が脱出次第、起爆するんだ」

「了解、脱出を開始する! あんたも死ぬなよ!」

隊長は無線を切ると、ソイル隊とアース隊に言った。

「悪いが先に行かせてもらおうぞ！　ビルの裏で会おう！」

イーリス達が頷くと、アールデ隊は一階の奥へと消えていった。

アース隊の男が入り口付近に迫ってくる敵兵をナイフで突き刺しながら、ソイル隊に告げた。

「次はあんた達だ！　俺達は最後に出る！」

「……すまん！」

ソイル隊は負傷した隊員に肩を貸しながら、裏口へと後退して行く。

「さて、後は俺達だが……」

アース隊の一人は、エレベーターの方を見ながら言い淀んだ。

「放っておけ！　遅れてくる奴が悪いんだ！」

そう言う男は、押し寄せてくる敵兵に銃弾を浴びせて後退していく。

イーリスともう一人の男も、ベルトウェイの心配をしながら裏口へと走った。背後から嵐のように銃弾が放たれる中、アース隊は裏口の扉を開け放った。

アールデ隊の隊長がイーリスに聞いた。

「ベルトウェイは？」

「まだみたい……でも、そろそろ起爆しないと敵兵が来る」

「くそっ！」

ソイル隊はそう吐き捨てながら、起爆装置を見つめた。

アース隊の一人が、祈る思いで裏口を見る。

「頼む……！　早く来てくれ……！」

その思いが通じたのか、通じていないのか、ベルトウェイから通信が入った。

「――早く起爆しろ！」

「何言っただ！　あんたが来ないと出来るわけ無いだろう！」

「今、全速力で向かっている！　いいからやれ！」

「……くそっ！」

アールデ隊の隊長は全員の顔を見てから、ベルトウェイの言葉を

信じ、起爆装置のボタンを押した。

ベルトウェイは四方八方から迫ってくる銃弾をシールドで防ぎながら、全速力で裏口に向かっていた。

《――早くしろ！ 敵に追いつかれるぞ！》

「分かってる！」

裏口の扉に体当たりをする勢いで走っていたベルトウェイは、突然周囲の空気が歪むような感覚に襲われた。

気付いた時には、目の前が真っ白になり、何も聞こえなくなっていた。

ビルの外にいた三部隊は、轟音を立てながら倒壊していくルーメンビルから全速力で距離を取っていた。

「走れ！」

隊長が叫びながら、負傷したソイル隊の隊員を担いで運んでいた。イーリスはある程度距離を取ってから、ビルの方向を振り返った。

そこにはさっきまで戦っていた面影は無く、閑散とした瓦礫が残っているだけだった。

「……死にしまったのか？」

「……………」

全員が静まり返っている中、静寂を破ったのは銃声だった。次から次へと銃弾が飛んできたため、全員は遮蔽物の陰に隠れた。

アース隊の一人が叫ぶ。

「一体なんだ！？」

ソイル隊が確認すると、赤い戦闘服がちらほらと見えていた。「あいつら、まだ生きていたのか！？」

そこに全員の無線に管制塔から通信が入る。

《――全部隊へ告ぐ！ 敵勢力は今だ残存している模様！ 繰り返す！ 敵勢力は残存している！》

アールデ隊がアサルトライフルで応戦した。

「戦闘態勢に入れ！」

イーリスは残された弾薬を自分のポーチから出そうとした時、一瞬瓦礫の山が動いた気がした。

そのままイーリスは瓦礫を注視していると突然、瓦礫の中からロケットランチャーの弾頭が飛び出してきた。

それはそのまま敵勢力のど真ん中に着弾し、爆発した。

全員が敵と交戦しながらも瓦礫を見守っていると、何事も無かったの如くベルトウェイが這い出てきた。

ベルトウェイはそのまま味方の陣営に戻ること無く、敵の残存勢力に突っ込んでいく。

アース隊の一人も、物陰から飛び出してベルトウェイに続いた。

「残滅するぞ！」

それに続いて三部隊は、敵の残存勢力を徹底的に駆逐した。

敵を残滅した後、一箇所に集まった三部隊の中で、アールデ隊の隊長がベルトウェイに聞いた。

「あんた、無敵なのか？」

「ああ」

「『ああ』って……まったく、とんでもない奴だな。あんたを見てるとうちの無鉄砲なガキ共を思い出すよ」

「子供のためになら、あんたも無敵になれるさ」

「ああ……まあ、な」

ベルトウェイは無線機で管制塔に通信を入れた。

「こちらアース隊、敵勢力を全滅した」

《了解、確認したアース隊。ヴァルト空軍に帰還せよ。これにて『ルーメンビル倒壊作戦』を完了する……あなた、生きてたの？》

「ああ」

《そう……まあ生きてて何よりよ。それと、ヴァルト空軍の生き残りも来るみたい》

「分かった。二十分程度でそっちに着く」

ベルトウェイ達は空軍基地へと向かった。

逮捕

ヴァルト空軍に到着した三部隊を待ち受けていたのは、アエイル軍の地上部隊だった。

当然のように近付こうとしたアールデ隊に、アエイル軍の銃口が向けられる。

「お、おい！？ 味方に銃口を向けるんじゃないやねえよ！」

驚いた三部隊に対して、指揮官らしき男が言った。

「黙れ。お前達に用があるわけじゃないんだ。実は空軍基地に犯罪者が居てね……そいつらを捕まえるために出向いたんだ」

「犯罪者？」

ソイル隊が聞き返すと、ベルトウェイが屋上で見た白いドラゴンと若い男がアエイル軍に拘束されていた。

ベルトウェイは男に聞いたのだした。

「あいつらがどうかしたのか？」

「男の方が白いドラゴンの脱走の手助けをしたんだ。あのドラゴンは、上官への侮辱罪で捕らえられていたのさ」

アース隊の一人が言った。

「でも、あいつらは俺達の手助けをしてくれたぜ？ それなのにあの扱いは無いんじゃないか？」

「知るか。俺達は上の命令に従っただけさ」

若い男は、アエイル軍の地上部隊によってコリーナ基地へと護送されていた。ドラゴンの方も、航空部隊によって厳重な監視を付けられたうえで、基地へと飛び立っていった。

「納得いかねえな……」

アース隊の一人がそう呟きながら、アスファルトの上にある小石を蹴飛ばした。

「お前達もご苦労だったな。司令部からコリーナ基地への帰還を命じられている。後は、俺達に任せて帰れ」

「……ふん」

アース隊の男は一人で先に、ヴァルト駅へと向かっていく。

「それじゃあ、ここでお別れだな」

アールデ隊はそう言うのと、アース隊とソイル隊の隊員達それぞれと握手を交わし、空軍基地へと消えていった。

そこでアース隊の一人は気付いた。

「そうか……アールデ隊はヴァルトの部隊だもんな……」

ソイル隊も難しい顔をしながら言った。

「ヴァルトの復興が大変だな……」

イーリスもそう感じていると、ベルトウェイは一人で管制塔に向かって歩き出した。

「ベルトウェイ？」

「俺は用が済んだら基地に戻る」

そう言うのとベルトウェイは、近くに居たアエイル軍の女性兵士に聞いた。

「管制塔の中にもアエイル軍はいるのか？」

「ええ。既に生存者の搜索は終了し、今は壊れた設備の復旧をしています」

「その生存者の中に、若い女はいなかったか？」

「いえ……既に避難した者を除き、生存者は一人も見つからなかったと聞いていますが……？」

「……分かった、ありがとう」

女性兵士が基地の奥に去っていく中、ベルトウェイは空へとそびえ立つ管制塔を見つめた。

——あの女は一体、何者だったのだろうか？

ベルトウェイはコリーナ基地へと戻る前に、マグレブでボスケツトに寄っていた。

ベルトウェイにとってボスケツトは地元であり、ホリーとドクターが待っている帰るべき居場所だった。

自分の家に着く寸前で、近くのスーパーから出て来たドクターと鉢合わせになった。

「無事だったのか!？」

「ああ」

「ヴァルト空軍で戦っていたそうだな？」

「どうしてドクターがそれを？」

「……実は、修理した無線機を使って、アエイル軍の無線を拾っていたんだ」

「そんなことが出来るのか？」

「趣味の一環だね。私の大型無線機は元々、アエイル軍が所有していた物なんだ」

「なるほど……ホリーは？」

「心配するな、元気でやってるよ」

「……そうか。ドクター、薬の件についてはどうなった？」

「心配しなくても、きちんと軍から提供されている。私がホリーちゃんと毎回渡すようにしているから、長期の任務があっても大丈夫だ」

「……分かった。俺が今頼れるのはドクター、あんただけだ」

「気にするな。お互い様さ」

ドクターは皺の重なった深みのある顔をくしゃくしゃにして笑うと、ヘルスセンターへと帰っていった。

ベルトウェイも自分の家をしばらく見つめてから、玄関を開けてホリーの部屋の扉を開けた。

父親の突然の帰還にホリーは驚いて、横にしていた身体を急いで起こした。

「お父さん!？ 大丈夫だったの!？」

「ひどいな、ホリーは。俺が大丈夫だと嫌なのか？」

「そんなわけないでしょ! ……肩、怪我してるし」

「ああ、後で治療してくれ」

「うん」

ベルトウェイはホリーの側にある椅子に座って、「商売道具」が入ったバッグを下ろした。

「葉はしっかり飲んでいるか？」

「うん……軍隊の方は大丈夫なの？」

「コリーナ基地に戻れといわれたが、ここでしばらく休憩だ」

「……大丈夫なの？」

「仕事よりお前が大事だ」

「……………」

ホリーはそっけなく顔を逸らしたが、小声で「ありがとう」と呟いた。

暗雲

グラティニス軍の司令部では、最高司令官の補佐である「総務補佐」の男が作戦会議を進めていた。

小ぢんまりとした作戦室の薄暗い照明の中、数名の男女が静かに話を聞いていた。

「――以上で、グラティニス軍の内部調査報告を終了致します」

補佐の男はそう言い終わると、アエイル全土が記された地図が置いてある机から離れた。

椅子に座って逞しい鬚を撫でている高齢の男が言う。

「クーデターはうまくいったようだな」

その言葉に、「総務」と書かれたプレートの前に座っている男が頷いた。

「軍内部の反対派の一扫も終わった。これでこれからは、アエイル軍との戦闘に集中することが出来る――ジャン」

「はっ」

補佐の男が総務の男に近付いた。

「ゲオルギウスの選手達はどうなっている？」

「はい。アエイル軍の地上部隊との戦闘にあたらせています。いずれも上位ランク保持者をグラティニス軍に引き込むことに成功しました」

「そうか。彼らの戦力的価値は高い。報酬は滞りなく受け渡すようにしろ」

「了解しました」

そこで、腕組みをしながら壁に寄りかかっていた女が机に近付いてきた。

その若い女の、流れるように美しい長髪は金色に染まっており、肌理の細かい白い肌は薄暗い室内でもかなり目立っていた。きつちりと結ばれた口元や、美しく弧を描く眉とモデルのように高い鼻は、

拔群のプロポーションとあいまってこの世のものでは考えられないほどの美貌をかし出している。

しかし、見るものを射抜く鋭い眼光のお陰で、ただの美女ではないことが分かる。

「これまでの抵抗を見る限り、アエイル軍の司令部は無能だ。ならば戦争を長引かせないためにも、ここは一気に首都を叩くべきだ」

「確かにその意見もあるな。ではモルテ中佐、オルテンシアまでの道をどう切り開く？」

モルテはアエイル軍の重要拠点を一つ一つ指していく。

「まずはオルテンシアから一番近い都市であるプラテリアを落とす。そのためにはプラテリア周辺に配置された防衛網を破る必要があるがな。しかし、それさえクリアしてしまえば、首都の電力供給を担っているプラテリア発電所を抑えることが出来る。そうすれば――」

そこでモルテの後ろについていた少年が引き継いだ。

「ライフラインである発電所を盾にされ、アエイル政府は首都を明け渡すことを余儀なくされる……」

「そうだ」

「さすがです、姉さん」

そう言う少年は尊敬の眼差しでモルテを見つめた。

絶世の美女である姉を持つ弟だからか、この少年も信じられないほどの美少年だった。唯一違うところは、姉であるモルテが金髪であるのに対し、弟である少年の髪が雪のように白い銀髪であることだ。

モルテは気付かないように少年の表情を盗み見ると、僅かに目元を和らげた。

高齢の男が頷く。

「わしもモルテ嬢の意見に賛成だ。戦争は長引くほど被害者が出る。それに首都を制圧するのに、戦わないことに越したことは無い」

総務の男は全員の顔を見た。

「俺も同意見だ。では、モルテ中佐の提案を採用――」

そう言い終わる前に、作戦室の扉が開かれた。

グラティニス軍の兵士が一礼する。

「報告します。ヴァルトを制圧しに向かった我が部隊が返り討ちに
あい……全滅した模様です」

「……そうか、分かった。もういいぞ」

「はっ」

兵士が去っていくと、総務の男はアエイルの地図を見直した。

「残念だったな……ヴァルトの森は、対空戦力を置くのに丁度良い
隠れ蓑になったんだが……」

「……噂によると、アエイル軍側の選手がヴァルトにて我が部隊と
交戦していたようです」

「そうか……やはり俺の戦略眼に狂いは無かったようだな」

総務の男は、地図から顔を上げると命令を出した。

「モルテ中佐、弟であるルイン少佐と共にアエイル軍の各発電所を
制圧しろ。引き続き航空部隊の排除も頼む」

「了解した」

「イゴール大佐はプラテリアまでの道のりにある全ての拠点、地上
部隊を頼む」

「老体に鞭打つか……任せろ」

「俺はアエイルにある主要都市と重要拠点の制圧に向かう。プラテ
リアに攻め入る時が来たら、また召集する。以上、解散」

作戦室から出た後、モルテはルインの手を握って司令部の廊下を
一緒に歩いていった。

「あの……姉さん……?」

「ん? なんだ?」

「……どうしていつも僕の手を握ってくるんですか?」

「恋人同士なんだから当たり前じゃないか」

「いつから恋人同士になったんですか!? それと僕達は姉弟です
!」

ルインがそう言うのと、モルテはよく分からないといった表情をした。

「姉弟だと、どうして駄目なんだ？」

「え？ え、えーとそれは、その……と、とにかく駄目なものは駄目なんです！」

「そうか……よく分からないものだな」

ルインは溜め息を吐きながら宿舎に着くと、自分の部屋に入ろうとした。

しかし、それと同時にモルテまで部屋に入ろうとして来た。

「何してるんですか！？」

「お前の部屋に入ろうとしている」

「駄目です！」

「なぜだ？」

「だ、だからそれは……僕は男で、姉さんは女だからです！」

「男って、まだ十七じゃないか」

「立派な大人です！」

「私にとっては可愛い弟だ」

「子ども扱いしないで下さい！」

ルインは勢いよく扉を閉めた。

モルテは含み笑いをこらえながら、扉の向こうでそっぽを向いているであろうルインに向けて言った。

「悪かった、許してくれ」

「……………」

「ルイン、ここを開けてくれ。お前の顔が見たい」

「……………」

「……扉にキスすれば開けてくれるか？」

「止めて下さい！」

ルインは扉を開け放った。

「姉さん、あんまり大騒ぎするのは止めて下さい。ここの人達はみんな朝早いんですからね……」

「そうか、それは悪かったな。でも恋は障害があるほど燃え上がるものだろう？」

「……早く寝てください、姉さん」

「おやすみのキスは？」

「失礼します！」

今度こそ扉は開くことは無かった。

秘められた思い

モルテは自分の宿舎へと静かに歩き出すと、ルインのことを思いながら溜め息を吐いた。

モルテ自身、近親者同士の恋愛が禁じられていることは分かりきっていることだった。あくまでさっきの会話は冗談を楽しむためのものである。恐らくルイン自身はそう思っているのに違う。しようがない姉だなと感じながら。

しかし、モルテは本気だった。

未だに真剣に自分の本心を打ち明けたことはないが、ルインのことを男だと認識しているのに間違いはなかった。最初は自分の感情に戸惑ったが、後からなぜもっと早くから意識しなかったのかと思うほどになっていた。

「私は……異常なのか？」

——どうしてルインは自分の弟として生まれてきてしまったのだろうか？

自分の気持ちに気付いた時ほど、神を呪ったことは無い。

ルインとは、永遠に結ばれない——

「いや、私は諦めないぞ」

あっさりとそう言い切ったモルテは、意気揚々と自分の部屋に入った。

弟に恋をしてはいけないと誰が決めた？

私は必ずルインと結ばれる運命なのだ。

絶対に、必ず。

「恋は障害があるほど燃えるもの、だろ？」

懐かしさという名の違和感（前書き）

Episode 2までのあらすじ

グラティニス軍の突然の襲撃により、ヴァルト空軍基地は壊滅してしまふ。

ベルトウェイはスーツの男の命令でヴァルトに向かうと、そこには本部に見捨てられた六つの部隊とイーリスが戦っていた。

ベルトウェイは部隊を率いると、単騎で街を防衛していた佐藤木とライカと共に「ルーメンビル倒壊作戦」を決行する。

「ルーメンビル倒壊作戦」はラヴィーナの協力もあってか、見事成功。街の防衛は無事、完了した。

しかし、ベルトウェイ達が空軍基地に向かうと、佐藤木とライカは反逆罪によりコリーナ基地に移送されることになっていた。

そして、サポートをしてくれたはずのラヴィーナも、どこかへと消えてしまふ。

ベルトウェイは様々な疑問を抱えつつも、ホリーの無事を確認しに行く。

そしてグラティニス軍の司令部では、本格的にアエイル公国攻略が始まろうとしていた……

懐かしさという名の違和感

コリーナ基地の留置場で、佐藤木とライカは隣同士の檻に入れられていた。

「……本当にこれで良かったのか？」

「……今は戦時中である。あのまま逃げ続けるのは得策ではない。それこそ亡命でもしない限り、我らは追われる身だ」

「ふーん……でも、これからどうするんだ？」

「街の防衛に貢献したのだ。最悪の事態は免れるはずだ」

「……うん」

あれから一夜明けたというのに、薄暗い留置場のせいで佐藤木とライカは外の様子が分からなかった。

「……………」

「……………」

お互いに長い沈黙が続く。

一人と一匹の間に置かれたろうそくの炎のみが、あたりを照らしていた。

「……………」

「……なあお主、質問しても良いか？」

「ん？」

「我はまだ分からぬのだ。危ないところを救われたからといって、どうしてそこまで黒いドラゴンを追うのか？ 人間は、一度受けた恩で心動くほどの生き物では無かろう？」

「そうなんだけど……正直なところ、分かんない」

「何？」

暗闇の中で、ライカの鎖がじゃりじゃりと音を立てたのが佐藤木の耳に入った。

「最初に黒いドラゴンにあった時、じっと目を見られたんだ。で、その時確かに……懐かしさを感じたんだ」

「懐かしさ？ お主は既に黒いドラゴンと会っていたということか？」

「いや、それはあり得ないんだけど……でも、確かに懐かしい感じがした。今でも黒いドラゴンを追っているのは……その懐かしい違和感を解明したいから——かな？」

「懐かしい違和感、か……」

「他にやることも無いしね」

佐藤木は誤魔化すようにそう言うと、ずっと座っていたせいで付いた汚れを払い落とした。

すると、留置場の扉が突然開かれた。

佐藤木とライカは扉から出て来たスーツの男を目で追うと、その男は丁度どちらからも見える位置で立ち止まった。

「アエイル軍との話し合いの結果、君達の処遇が決まりました」

佐藤木とライカは押し黙った。

「軍は、君達自身に選ばせるそうです」

「我ら自身、だと？」

「ええ、選択肢は二つです。このまま牢屋の中で五十年ほど過ごしてもらうか、それともアエイル軍の犬として強制的に働いてもらうかです」

「街を守るために戦ったんですけど……？」

「そのことですが、情状酌量の余地はありませんでした。国家反逆罪は重罪です。もちろん、それを手引きした者も含めてです」

佐藤木とライカは目を合わせた。

「俺の選択肢は後者だよ。黒いドラゴンのこともあるし、何よりこんな牢獄で一生を過ごすなんて無理だ」

「我とて選択肢は同じだ。ドラゴンの寿命は人間の倍近くだが、五十年もこんな暗闇に閉じ込められては自慢の翼が腐り落ちるわ」

「……話が早くて何よりです」

「たわけが。元より選択肢は一つだろうが」

スーツの男は二つの牢屋の錠前を外しながら言った。

「私も上層部に掛け合ってみたのですが、中々手ごわくて……」

佐藤木とライカは牢屋から出ると、巨大なドーム状になっていた留置場を眺めた。

「今は真っ暗闇ですが、外はもう昼間です。外で兵士が待っているので、佐藤木さんは私と共に扉で出ましょう。そちらのドラゴンは垂れ幕を利用してください」

「垂れ幕か……お主と初めてあった時を思い出すな。思えばあれが運の尽きであった」

「助けてやったのにその態度かよ」

「その見返りはしたであろう。それと鎖を外す約束を忘れておらんだろうな？」

「さあ、何だっけ？」

「なっ!？」

佐藤木とライカは互いに文句を言いながら、留置場を出た。

現状報告

ベルトウェイはコリーナ基地の作戦室に向かっていた。

兵士達が慌しく動き回る廊下でベルトウェイは、後ろから誰かに呼び止められた。

「あんた、コリーナ基地の配属だったんだな」

「お前は……」

「アース隊であんたに突っ掛かった奴を止めた男、だろ？」

「ああ。ベルトウェイ・ゴールドマンだ。よろしく」

ベルトウェイは男と握手する。

「俺はアエイル軍コリーナ基地所属のフェレル・パーカーだ。あんたと一緒にアース隊になれて光栄だよ」

二人は作戦室まで歩き出した。

「ところであんた、ここに来るのは初めてか？」

「ああ」

「じゃあ分からない事だらけだな……まあ安心しな、俺が色々教えてやるよ」

「悪いな」

二人が曲がり角を曲がると、ヴァルトでベルトウェイに掴みかかった男が歩いていった。

その男はこちらに気付くと、舌打ちをしながら作戦室に向かった。「あいつに代わって謝るよ。普段は仲間思いの良い奴なんだが、何しろ状況が悪かったから……」

「気にしてないさ。それに、あの状況では疑うのが正しい反応だ」

「あんたが寛大な奴で良かったよ。今の男はネストル・バチュシキン。ネストルって呼ばれてる」

二人は床のダンボールを避けながら作戦室の近くまで行くと、イリスに出会った。

「君も作戦室に来るように呼ばれたのか？」

フェレルがそう問いかけたが、イーリスは半ば無視するかたちで作戦室に入ってしまった。

「もしかして俺、嫌われてるのか？」

「良くも悪くも十八歳ってことだ。気にするな」

「彼女、十八歳なのか……でもあんた、まるで年頃の娘がいるような口を利くじゃないか？」

「いるぞ」

「嘘だろ！？……まったく、人は見かけによらないな……」

「どういう意味だ？」

作戦室に入ると、既に三十人ほどの兵士が椅子に座って集まっていた。その中にはソイル隊の四人も座っており、二人を見つけると手で合図してきた。

フェレルとベルトウェイはソイル隊に向かって頷くと、後ろから二番目の席に座り、それほどスペースの無い作戦室に上官らしき男が入ってくるまでじっとしていた。

「――さて諸君、私はアエイル軍司令部から来たヨエル・ヴィカンデルだ。私の名前は覚えなくて結構。どうせすぐに、こんな辺境の地からは出て行くからな」

ヨエルと名乗った初老の男がそう言った瞬間、ベルトウェイは作戦室の空気が揺らいだのを感じた。

作戦室に居る屈強な兵士達は揃って無表情を装っているが、内心ではむっとしたことだろう。

――この男、田舎だと思って馬鹿にしているな、と。

「――諸君らも知っての通り、現在我が国にはグラティニス共和国が侵略してきている。幸いなことにグラティニス軍以外の敵軍は、我々の同盟国であるデルミッサが食い止めている。しかし、それでも危険な状態であることには変わりが無い。そこで諸君らには、このコリーナ基地を拠点に様々な地域、任務についてもらう。詳しい戦術面では彼女に説明してもらおう。ミラヴィー中尉、入ってきてくれ」

すると、ヨエルの横にあった扉の奥から、縁なしの眼鏡を掛けた若い女が現れた。

「コリーナ基地に配属されました、ラヴィーナ・ミラヴィーです」
ベルトウェイはそこでふと、ヴァルトの戦いで管制塔から指示を出していた女の声を思い出した。

「ミラヴィー中尉には諸君らの指揮官を務めて貰う。以後は中尉の指示に従うように」

「ちょっと待て」

後ろから三番目の席に座っていたネストルが立ち上がった。

「突然女の指揮官を紹介されて、『はい、そうですか』と納得出来るわけが無いだろうが」

それにヨエルが答えた。

「黙れ一兵卒。田舎の軍事基地では上官への口の聞き方がなっていないようだな」

その言葉に、作戦室の兵士達の表情が一層険しくなる。

——もうそろそろ限界だな。

ベルトウェイがそう思い始めた頃、ラヴィーナがいきり立ったネストルを宥めるように言った。

「バチュシキン二等兵の言い分はもつともだ。詳細の分からない指揮官の元で働きたい部下はいない。私について知りたいことがあったら何でも聞いてくれ」

ネストルが真っ先に聞いた。

「実戦経験は？」

「直接、戦闘経験があるわけではないけど……指揮を執ったのは五十七回だ」

「何だって!？」

「五十七回だと!？」

兵士達はラヴィーナの発言にどよめき立つ。

それもそのはず、グラティニスとアエイルが戦争になる前は戦闘らしい戦闘など一つも起きていなかったのだ。

ネストルが確信したように言った。

「嘘だな」

「そう思うのも無理は無いと思う。でも、事実よ。私は各国を回りながら様々な状況で指揮を執ったわ。それこそ陸海空、選ばずにね」その言葉を聞いたイーリスが、ぼそつと呟いた。

「各国を回りながらって……傭兵ってこと？」

傭兵という言葉に反応したヨエルが説明する。

「そうだ。ミラヴィー中尉は、我が国に雇われ指揮官として来た。中尉のもたらしたグラティス軍の情報と、我が軍が必要とする機密文書を回収した功績を買われ、中尉という階級を与えられたのだ」フェレルは納得した。

「……なるほど、それなら話が通じるな。俺達が把握していない小国は腐るほどあるし、小国同士の小競り合いなんて、それこそ多種多様だ」

ラヴィーナの指揮官として能力を認知した兵士達は、それぞれ押し黙った。

そんな様子を見てラヴィーナは、努めて明るい声で言った。

「私の指揮官としての信条は、全員無事に帰還させること。次の作戦で実力をお披露目するから、その点は心配しなくて結構よ」

ラヴィーナがそう言うと、兵士達はお互いに目を合わせて確認した。

兵士の一人が言った。

「……分かった、ミラヴィー中尉。ただ、最後に一つ確認させて欲しい」

「……何？」

「今、付き合ってる男はいるか？」

「……国を跨いでまで付いてくる度胸のある男が居なくてね……ここには居るのかしら？」

その瞬間、作戦室は笑いに包まれた。

コリーナ流の歓迎式を理解出来ないヨエルは、呆れたように作戦

室を出て行った。

「……どうやらうまくいったようだ」

「ああ」

フェレルとベルトウェイはお互いに頷くと、本格的に説明を始めたラヴィーナを見た。

「まず、皆に理解してもらいたいのは敵の戦力だ。先ほどヴィカデル准将が説明した通り、グラティニス軍以外の敵軍は同盟国が食い止めてくれている。我々はグラティニス軍のみに集中出来るということだ」

そこで兵士の一人が手を上げた。

「どうしてグラティニス共和国は、我がアエイル公国に対して戦争を仕掛けたんですか？」

しかし、その兵士はすぐに仲間の兵士に殴られた。

「馬鹿……！ そんなことも分からないのか……！！？」

「だ、だってよ……『不当な搾取』なんて、俺らしてたか……？」

「そ、それは……お前……」

二人の兵士の様子を見てラヴィーナは説明した。

「確かに……表向きはアエイル公国の『不当な搾取』を理由に、戦争を仕掛けてきているが、実際は違う。本当の理由は恐らく……アエイル公国に対する『復讐』だ」

「どういうことだ……？」

フェレルが聞き返した。

ラヴィーナは作戦室にあるスクリーンを起動させると、部屋の明かりを落とす。すると、スクリーンに四名の男女の顔が浮かび上がった。

その中の赤い髪をした男をラヴィーナは指した。

「現在のグラティニス軍の最高司令官はこの男だ。名前は、ウィリアム・バザルティス」

その瞬間、ベルトウェイに軽い頭痛が走った。

「数週間前にウィリアムは、グラティニス軍内部でクーデターを起

こした。政府転覆を狙った結果、クーデターは成功。グラティニス共和国での現段階の最高権力者になった」

「それと今回のアエイル進行が、どう繋がる？」

ベルトウエイは眉間を揉み解しながら聞いた。

「私は彼の心理プロファイルを独自に入手した。その内容を見て、クーデターを起こした理由とアエイル公国に踏み入った理由を私なりに推測してみた」

ラヴィーナは軽く咳払いすると、ウィリアムの過去について話し始めた。

「彼は幼少期、アエイル公国に居たことが分かっている。両親はお互いに軍人で、職場結婚だったそうだ。彼が十四の頃、軍内部での父親の不正が発覚し、両親と共にグラティニス共和国に亡命。その際に国境付近で、アエイル軍によって母親を射殺されている。それが原因で当時、ウィリアムは父親を相当恨んでいたそうだ。その後、父親と共にグラティニス軍に入隊。十八歳の時に職場恋愛の末、結婚。二人の子供を授かっている。父親はその間に軍内部での力をつけ、結果的に軍の最高位である『総務』の座を手に入れる……が、問題はその後だ。父親がアエイル公国に軍の機密を横流ししていたんだ」

ネストルが聞いた。

「どうしてわざわざアエイルから逃げてきたのに、横流しをしたんだ？」

「噂では、アエイルにいた愛人が人質に捕らえられたらしい」

その言葉に兵士達は溜め息を吐いた。

「そのウィリアムって奴の父親は、とんだ甲斐性なしだな……」
「ウィリアムもその一件によって、我慢の限界に達したようだ。クーデターを企画したのはその直後で、当時のグラティニス政府が国民を弾圧していたことから、短期間で主要なメンバーが揃うことになった。その後は民主主義を取り戻すという大義名分もあり、国民からも支持されたクーデターは成功。総務の座を手に入れると共に、

最高権力者になった。……恐らく、アエイル公国に戦争を仕掛けてきたのは、母親を殺されたことから来る恨みと、憎んでいた父親とたびたび関係のあった我が国に対する個人的な感情からだろうと、私は推測している」

「とんだとばつちりを受けたもんだな、俺らは……」

ネストルが呟くと、ラヴィーナは注意を促すように言った。

「それと、ウィリアム自身優秀な軍人であることを忘れてはならない。下士官時代、地上戦で戦闘員及び指揮官として多大な戦果を上げて、敵部隊に恐れられたらしい。その能力は今尚、健在していることだろう」

ウィリアムの話が終わると同時に、ベルトウェイの頭痛は治まった。

「また、グラティニス軍には総務であるウィリアム以外にも注意しておかなければならない人物が三名いる。まずはこの男を見て欲しい」

ラヴィーナはスクリーンに映されている、逞しい髭を生やした男を指した。

「イゴール・ベルモンド大佐。グラティニス軍の指揮官で、現在はアエイル方面の地上部隊と航空部隊を担当している。前線での戦闘経験を生かし、グラティニス軍の指揮官に就いてからは、百近い任務をこなす中で一度しか敗北を経験していないらしい。また、クーデター計画の中心人物の一人でもある」

「名将って奴か……」

フェレルの呟きにラヴィーナは頷くと、スクリーンに映っている美しい女を指した。

「彼女はモルテ・ラングハイン中佐。航空部隊に所属している。鋭い洞察力で戦況を見渡して、迅速に行動することでも有名だ。二十二歳の若さで中佐の地位に就けたのは、その手腕を見込まれて任された任務が大成功を収めたかららしい。彼女の率いる部隊『ヴィユノーク中隊』に遭遇したら注意してくれ」

「美人なのにおっかないねえ……」

兵士の一人がそう漏らすと、ソイル隊は「まったくだ」と口を揃えた。

ラヴィーナは眼鏡の位置を修正しながら、最後に残された少年を指した。

「そしてこの少年は、ルイン・ラングハイン少佐。同じく航空部隊に所属している。先ほど説明したモルテ・ラングハイン中佐の弟だ。彼は――」

「少佐だって!？」

ネストルが信じられないといった表情で言った。

「驚くのも無理は無い。彼が弱冠十七歳にして少佐の地位を築けたのは、その異常ともいえる功績を買われたからだ」

「彼は何をしたんだ……?」

フェレルが聞いた。

「ラングハイン少佐の初陣は、彼がまだ十四歳の時だ。当時から、単身で敵陣に乗り込むなど活躍が目立っていたが、その後の三年間も破壊活動や単身潜入、果てはウェットワーク（暗殺任務）から要人護衛まで幅広く活躍していた……らしい。また、彼の強みは空戦と陸戦、どちらでも活躍出来るところにあり、その結果何度も勲章を授与されている。まだ未成年にも関わらず部下からの信頼も厚く、物腰も丁寧で上官からの信用も勝ち得ている」

「……その、間に挟んだ『らしい』っていうのは?」

ラヴィーナは溜め息を吐いた。

「実は……彼の過去三年間の戦闘記録が、どこにも載ってなかったのよ」

「ほう……」

ベルトウエイは訝しむ。

「意図的に消去されたらしいんだけど、理由は分からないわ――でも唯一つ、言えることがある。彼が率いる『ヴァローナ隊』に遭遇したら、交戦は許可できない。直ちに退却すること」

「……何で？」

イーリスがよく分からないといった表情をしながら聞いた。

「彼は……単騎で一個飛行中隊（七騎から十六騎）を撃墜したことがあるの」

「……マジかよ」

兵士達は哑然とした。

「嘘みたいな話だな……」

「ええ……でも、事実よ。地上戦でも個人では考えれない規模の戦果を上げている。彼のトレードマークである黒い戦闘服が見えたら、すぐに退却すること」

ラヴィーナはスクリーンを消すと、作戦室の明かりを点けた。

「最後に、注意することが一つある。アエイル軍はゲオルギウスの選手達を雇うことで有利になったが、最近になってグラティニス軍もゲオルギウスの選手を雇っていることが分かった」

「じゃあ……！」

ネストルが具合の悪い顔をした。

「ゲオルギウスの選手は、特別階級として少尉と同等の地位を与えられている。恐らく、集団であたることは無いと思われるが……遭遇した場合、その都度対処する」

「くそ……」

ネストルはすっかり意気消沈した。

「敵は、アエイルの重要拠点を一気に沈めていくつもりだろう。今後、軍事行動が起こった場合に備えて直ぐにでも出撃できるようにでは、解散」

ベルトウェイは、作戦室から出て行く兵士達の人だかりの中でイーリスを見つけると、呼び止めた。

「ちょっと良いか？」

「何？」

肩を落としたネストルを励ましながら歩いていくフェレルを尻目に、イーリスに質問する。

「どうして軍に入ったんだ？」

「あんたと一緒」

「戦争のせいで、ゲオルギウスの大会が閉鎖になったからか？」

「そう」

「一人で暮らしていけるだけの金も無いのか？」

「……………」

「……欲しいものもあるのか？」

「いや、それは無いけど……」

「……よく分からないが、俺が力になれることなら言ってくれ」

「……何でそんな絡んでくるわけ？」

「……俺には、君と同じ年の娘が居る。病気であまり動くことが出来ない身体だが、動ける範囲内では何不自由ない暮らしをさせてきたつもりだ」

イーリスはどう返して良いか分からず、下を向いた。

「君の自由を縛るつもりは無い。今出来ることを、好きなだけやれるのが一番だからな。でも、なるべく無茶はしないでくれ。楽しいことは、これからまだまだ沢山あるからな」

ベルトウェイがそう言って立ち去ろうとすると、イーリスがぼそりと呟いた。

「……妹がいるの」

「？」

「でも……今は行方不明」

「……仲は、良いのか？」

イーリスは頷いた。

「妹を探すのに、軍にも協力してもらってる」

「だから、金が必要だったのか。搜索代として」

「そう。でも……妹は今、グラティニス共和国にいる」

「君はてっきりアエイルの人間だと思っていた」

「え？」

「逃げてきたんだろ？　グラティニスから」

「……何で知ってるの？」

イーリスは一瞬警戒したが、ベルトウェイがすぐに誤解を解いた。「戦争が始まる前から、グラティニス人間がアエイルに亡命することは、そう珍しいことではなかったんだ。当時は酷い弾圧だったからな」

その言葉にイーリスは肩の力を抜くと、アエイルまでの経緯を話し始めた。

イーリスの過去

「私の両親は、グラティ二スの軍人なの」

コリーナ基地の休憩所で、ベルトウェイはイーリスの話を聞いていた。

「私と妹は、生まれてすぐにお母さんと暮らし始めたから、父親の顔は知らない」

「お父さんは会いに来てくれなかったのか？」

「うん……お母さんは『そんなことは無い』って言ってたけど、父親は私達に興味無かったみたい」

「それは……悲しいな」

「別に。その分、お母さんが私達に構ってくれたから」

イーリスはテーブルの上に置いてあるイチゴ牛乳を飲んだ。

「――それで私と妹は、軍人のお母さんに憧れて士官候補生になった……で、訓練を受けていくうちに言われたの。『もうすぐ戦争が始まるから、すぐに逃げなさい。危険が迫ってきているから』って」

「その『危険』っていうのは、恐らく戦争のことでは無いな」

「そう……私と妹は、アエイルに出発する日にグラティ二ス軍に襲われた。それで国境を越える時、妹は軍に捕まった」

「残念だったな……」

イーリスは当時のことを思い出したのか、怒りで少し、手が震えていた。それはグラティ二ス軍に対してか、それとも不甲斐無い姉である自分に対してかは、ベルトウェイには分からなかった。

「アエイルに着いてからは、妹を見つけるための方法を探した。もしかしたら妹もうまく逃げ出せて、こっちに来てるかもしれないって思ったから。それで、軍に色々と隠しながら協力を頼んだんだけど……」

「撥ね返された、か」

「『人件費が掛かる』って言われた。それでゲオルギウスに……」

「なるほど……両親は今頃、心配しているだろうな」

「父親は別」

父親の話が出てくるたびに不機嫌になるイーリスを見て、ベルトウェイは父親については触れないことにした。

「お母さんと連絡は……無理か」

「今、戦争中でしょ。それにお母さんが、アエイルに着いたら自分の方から連絡するって。無線が軍に監視されてるって言ってたから」

「賢いお母さんだ」

「まあね。グラティニス軍でお母さんの名前を知らない人は居なかったし」

「なんて名だ？」

「クリューメ」

その名前を聞いた瞬間、ベルトウェイは驚いた。

「……偶然だな」

「え？」

「妻と一緒に名だ」

「へー……アエイルには多いのかな？ クリューメって名前。お母さんも昔、アエイルに居たって言って――」

そこから先は、ベルトウェイの耳に入っていなかった。

作戦室の時の頭痛が、またも襲ってきたのだ。

「ぐっ……悪いな。後で、また話そう……」

「え？ 大丈夫？」

「ああ……先に戻っていてくれ」

「別に……良いけど……」

イーリスは自分の宿舎へと戻っていった。

ベルトウェイはイーリスを見送ると、眉間を揉みながら休憩所の電話を借りた。ヘルスセンターの電話番号に掛けると、丁度良いタイミングでドクターが出た。

「ドクター、実はさっきから、酷い頭痛が起こるんだが……」

「どれくらい前からだ？」

「十五分ほど前だ」

「――恐らく、ヴァルトでの疲労からだと思うんだが……心当たりは無いか？」

「そう言えば……誰かの話し声を聞いている時に、頭痛が起こった」

「話し声……？」

「……ドクター？」

「いや、珍しい症例だと思ってな。慢性頭痛の中では全般性不安障害に当てはまると思うが……君の場合は急性頭痛だ。急性頭痛になると、くも膜下出血や脳出血などがあるが、それだと立ってられない筈だ。医者の私が言うのもなんだが、一度コリーナ基地の医療スタッフに診てもらったらどうだ？」

「……そうしよう。ホリーの様子は？」

「ぐっすり寝てるよ」

「そうか」

「……まったく、娘の心配と同じぐらい、自分を心配して欲しいものだな。私の無線機の周波数を教えておこう。任務中にまた頭痛が起こったら、それこそ対処出来ないからな」

「分かった。恩に着る、ドクター」

「ああ」

ベルトウェイは電話を切ると、診療所に向かった。

航空部隊の仲間

佐藤木とライカは兵士達に連れられて歩いて行くと、コリーナ基地の航空部隊が集まっている飛行場に到着した。

「あれが、お前達が配属された『ブラスト隊』だ」

兵士の指差す方向へ目を向けると、一組の男女がなにやら言い争っているようだった。

ライカは遠ざかっていく兵士達を尻目に、佐藤木の背中を軽く小突くと、早く行くように促した。恨みがましい目をライカに向けた佐藤木は、男女に近づいていく。

男の方は、茶色い短髪で二十歳前後の若い男だった。活発そうな顔立ちから見て取れるように、話し相手の女が何かを言う度に笑っている。

女の方は、艶やかな黒髪を頭の上で束ねて、美人には変わりないが気の強そうな印象があった。話している男とは正反対に、恐ろしい剣幕で怒っていた。

佐藤木は男女にある程度近づくと、話している内容が聞こえてきた。

「――だからさ、あんたいくら情報収集が趣味って言っても、男と女の関係に首を突っ込むのは無粋だって言ってるんだよ！」

「悪かったって！ 俺もそれが理由で別れるとは思ってなかったんだよ……」

「だとしても、後で謝れ！」

「分かった、分かった！ ……やれやれ」

佐藤木が声を掛けるのに戸惑っていると、先にライカが二人に話しかけた。

「ブラスト隊というのは、お主等のことか？」

「！？」

「！？」

「……………」

二人は面食らった表情になると、男の方が恐る恐る佐藤木に話し掛けた。

「……し、失礼ですが、現在……おいくつですか……?」

「二十歳ですけど……。それと、さっき喋ったのはこっちです」

佐藤木がライカのことを指すと、ライカは鼻を鳴らしながら偉そうに言った。

「ふん。お主等、なぜ尊大な私の言葉を無視して、この男に質問しているのだ?」

その瞬間、女の方が物珍しさに目を大きく開いた。

「へえー! 喋るドラゴンか! そういうのもいるんだねえ!」

「いや、もっと驚けよあんた! 喋るドラゴンだぞ!」

そう言っただけ男は女に突っ込みを入れると、興味津々に佐藤木に詰め寄った。

「あんたこんなどこから連れてきたんだ!? 覚えさせたのか!?
? どこかの基地に居たのか!」

佐藤木は、凄まじい勢いで質問をぶつけてくる男を回避するためにも、自分とライカのここまでの経緯を二人に説明した。

「——そうか、ヴァルトの戦闘に参加してたのか……」

「戦争に強制参加だなんて、あんた達も苦労したんだね……」

飛行場のドラゴン達が納められている格納庫に、佐藤木達は移動していた。

「でも、ヴァルトの戦闘に参加していたのは興味があるな……あんたの名前は?」

「佐藤木です」

「二十歳って言ってたよな?」

「はい」

「なら同い年だ。俺はダレル・エアハート。ダレルで良い」
「分かった」

「あたしはカルラ・ブロー……じゃなかった、カルラ・フレータ。あんたらよりは年上だけど、フレータで良いよ」

「フレータさんはこの前、結婚してな。まだ自分の姓が変わったことに慣れて——」

カルラは顔を真っ赤にすると、ダレルの顔面に肘鉄を食らわした。「おおっ……!」

「本っ当に、余計なことベラベラ喋る口だねえ! ……あんたも結婚する時に、口が聞けない身体にしてやろうか?」

「分かったから……止めてくれ……」

「そう言えば、何でさっき言い争ってたの?」

佐藤木は、ずっと疑問に思っていたことを聞いた。

「ああ、あれか。俺の趣味は情報収集でな。とある男女に質問してた所、俺がうっかり発した一言により、男が隠していた秘密がばれちまって女が別れを切り出したんだよ」

「こいつは、その男が別の女と歩いているところを目撃してて、そのことをうっかりその場で漏らしたんだ」

「……ああ、なるほどね」

「で、女があたしに泣きついてきたって訳。……あんた、分かってんでしょうね?」

「へいへい……仲直りはさせますって。そんなことより、そのドラゴンに聞きたいことが山ほど——」

その時、コリーナ基地全体に緊急出撃を知らせるサイレンが鳴り響いた。

佐藤木達が一斉に格納庫から出ると、アナウンスが鳴り響いた。

「——全兵士に告ぐ、直ちに作戦室に集合せよ。セルバがグラティ二ス軍による襲撃を受けている。これは訓練では無い。繰り返し、これは訓練では——」

「セルバだって!?!」

驚いているカルラにダレルは聞いた。

「どうしたんだ?」

すると、カルラは見る見るうちに顔色が悪くなった。
「あたしの亭主がいるんだ……セルバの基地に」

セルバの重要施設

「では、現在の状況を伝える」

ラヴィーナは、作戦室に集合した航空部隊と地上部隊に、スクリーンでセルバの状況を説明した。

「現在、セルバの重要施設である『セルバ風力発電所』がグラティ二ス軍の地上部隊、及び航空部隊によって襲撃を受けている。街の防衛には現地の警官隊、発電所ではセルバ基地の地上部隊と航空部隊が交戦している。敵戦力は、地上部隊と航空部隊、どちらもおよそ一個小隊だ。敵部隊の攻撃は発電所に集中し、セルバの部隊は苦戦を強いられているようだ。そこで、我々は現地の味方部隊と合流し、そのまま敵部隊と交戦する。……奴らの狙いは恐らく、発電所の奪取、又は破壊だ。現代において、発電施設は我々の生命線と言っても過言では無い。必ず防衛を成功させるぞ。」

ラヴィーナはそう締めくくると、急いで作戦司令室に向かった。

佐藤木も格納庫に急ぐと、まだ顔色を取り戻していないカルラを見て声を掛けた。

「……大丈夫ですか？ カルラさん」

「……ああ、大丈夫だよ」

その様子を見てダレルは、格納庫へと続く通路を歩きながらカルラの肩に手を置いた。

「……セルバに着いたら、無線でセルバ基地に呼び掛けてみよう。

あんたの亭主がどこで戦っているか、教えてくれるはずさ」

「……ありがとう」

佐藤木とダレルは頷くと、それぞれ自分達のドラゴンに装備を取り付けた。

ダレルのドラゴンは茶色い体色で、これから向かう戦いに思いを寄せているのか、じっと一点を見つめていた。

カルラのドラゴンは反対に、戦いに向かう喜びからか、時々その

赤い身体を震わせていた。

佐藤木はライカに跨ると、取り付けた鞍の部分が緩んでいないか確認した。

「また私の身体が酷使されるのか」

「セルバでの戦いが終わったら、この基地の人に鎖を外せないか頼んでみるよ」

「お主に引っぱられるこの忌々しい鎖を、早く断ち切ってもらいたいものだ」

ブラスト隊は格納庫から飛行場に出ると、他の航空部隊と共にセルバへと飛び立っていった。

ラヴィーナは司令室のレーダー前の席に座ると、深く息を吸って深呼吸した。

——この戦いを必ず成功させて、この基地にいる人達の信頼を勝ち取らなければ。

ラヴィーナは他の指揮官を補佐する兵士達と共に、レーダーの表示に集中した。

アース隊とソイル隊は、マグレブでセルバ駅へと向かっていた。それぞれの隊員達は自分の武器を点検しながら、お互いにプロテクターなどを付け合っていた。

ベルトウエイはホリーとまた無事に会えることを祈りながらも、セルバ駅に到着した途端、戦士の表情に戻っていた。

呼び名

セルバの上空に近づいて来たブラスト隊に、司令室から通信が入った。

《――こちら、指揮官のミラヴィー中尉だ。聞こえるか?》

佐藤木達が返事を返すと、コリーナ基地から共に出撃した他の三騎のドラゴンが隣に移動してきた。

《彼らは『ゲイル隊』だ。今回の作戦だけではなく、これからの作戦において君達と共に出撃するいわば、同志だ。リーダーである一番騎は、『ゲイル1』の彼が務めている》

「よろしくな。そっちのリーダーは誰だ?」

ゲイル1の男は、ブラスト隊の面々を見たが、一目でリーダーと分かる人物は見当たらなかった。

《ゲイル1、ブラスト隊のリーダーはまだ決まっていない。一応、最も戦闘経験が豊富な彼女をリーダーとする。異論はあるか?》 『ブラスト1』》

ラヴィーナに促されたカルラは、素直に首を振った。

「無いよ、司令室。そっちは何て呼べば良い?」

《こちらは『リーリオ』で頼む。作戦行動中は、お互いにコードネームで呼び合え。では、白いドラゴンに騎乗している彼を『ブラスト2』として、編隊を組め》

「ということは、俺は三番騎の『ブラスト3』ってことか」

ダレルが不満そうに隊列を組むと、ラヴィーナが言った。

《我慢してくれ、即席でつけたコードネームだ。それに私はブラスト3の戦績をまだ確認していない》

そう言ったラヴィーナにライカは疑問を覚えた。

「佐藤木、お主、ヴァルトでの戦闘が初陣だったな?」

「そうだよ」

「……そうするとあの時、ミラヴィーとかいう指揮官はヴァルトで

我らの戦いぶりを見ていたということか」

「そう言えば、あの時間こえてきた女の人の声にそっくりだ……」

《どうした？ ブラスト1》

「いえ！ 何でもありません……」

《？ では、今から戦闘空域に入る。各騎、敵航空部隊を発見後、交戦せよ。ただし、味方部隊との合流を最優先とする》

「ブラスト隊、了解」

「ゲイル隊、了解」

二つの部隊は、それぞれリーダーを先頭にデルタ（三角形）を作ると、一気に速度を上げた。

Mission 02: Windmill

「お主、酔う癖は治ったのか？」

「いや、まだだけど……今は平気」

佐藤木がそう答えていると、前方の地上に風力発電用の巨大な風車が見てきた。

《リーリオから各機へ、こちらのレーダーで捉えた敵航空戦力のうち、三騎がそちらに向かっている。》

「了解。発見次第、交戦——」

すると、ゲイル1が言い終わる前に、ダレルの腰に装備していたMAWS（ミサイル警報装置）が鳴り出した。

《ブラスト3、ミサイルが接近中！ 十二時の方向だ！》

「了解、回避する！」

ダレルは速度を上げて前に出ると、フレアを撒いた。

カルラと佐藤木は散開して、正面に見えてきた三騎の敵ドラゴンに向けてミサイルランチャーを発射した。

ゲイル隊は敵の三騎の後方に回り込むため、徐々に高度を下げて左から回り込もうとする。それに気付いた敵編隊は、一騎を残し他の二騎がゲイル隊に向かって行く。カルラと佐藤木の放ったミサイルは、二発とも残った一騎に回避された。

「恐らく、残った一騎がリーダーであるな」

「なら、リーダーをやろう」

佐藤木の言葉に頷くと、ライカは残ったリーダーと正面からぶつかることにした。

リーダーが放ったミサイルをライカは紙一重で交わすと、火球をリーダーに向けて発射した。リーダーはそれを横移動でかわすと、向かって来たライカに自分のドラゴンを組み付かせた。

ライカと敵のドラゴンが激しくぶつかり合う中、リーダーのコマンドが佐藤木に向けてアサルトライフルで銃撃してきた。

「白いドラゴンか……珍しいが、我々にとっては銀蠅でしかない」

激しい弾幕を張られた佐藤木が必死に対抗の手段を考えていると、横から凄まじい勢いでダレルのドラゴンが体当たりしてきた。そのままリーダーのドラゴンに激しくぶつかると、苦しそうな呻き声を上げてリーダーのドラゴンが離れていく。そこにカルラのドラゴンが火球を発射して、リーダーのドラゴンを撃墜した。

「一人で戦うなよ」

「ごめん」

ダレルに謝った佐藤木は、リーダーの男がパラシュートで脱出していくの見た。

「普通は自分のドラゴンと生死を共にするもんだが……グラティ二スの考えは違うらしいねえ……」

ダレルが呟いていると、ラヴィーナから通信が入る。

《ブラスト隊へ、ゲイル隊が先ほどの二騎を撃墜したようだ。リーダーに敵航空部隊は見当たらない。ゲイル隊と共に発電所へと急いで——待て、ブラスト1！ 先行しすぎだ！》

見ると、カルラが発電所近くの敵地上部隊に接近していた。

《ブラスト2、ブラスト3、急いでブラスト1の援護に付け！ まだ我々の地上部隊は敵対空兵器を無力化していない！》

「ブラスト1！ 何やってんだ！」

「急いで追い着こう！」

佐藤木とダレルは、カルラのドラゴンが風車を潜り抜けて飛んでいる様子を見た。

「あんな近くで飛んでいたら、すぐに蜂の巣にされちまう！」

《ゲイル隊は味方地上部隊を援護しろ。地上にはセルバ基地の地上部隊『ダーディ隊』と、こちらの部隊であるアース隊、ソイル隊が敵対空兵器及び、発電所付近の敵地上部隊殲滅を開始している。上空の警戒は、セルバ基地の航空部隊『シムーン隊』に任せろ》

「了解、地上部隊の援護に入る」

ゲイル隊は地上で交戦している敵味方部隊の状況を確認するため、

一気に高度を下げた。

《こちら司令室のリーリオ。アース隊、敵対空兵器の無力化はまだか？》

「ベルトウェイだ。敵の機銃のせいだと思うように動けない」

アース隊は、フェンスに覆われた発電所の施設内にまだ入れないでいた。

イーリスとフェレルがコンクリートの遮蔽物から身を乗り出してたまに銃撃するも、機銃の圧倒的火力に決定打を与えられないでいた。

《レーダーで確認する限り、ソイル隊は現地のダーディ隊と共に発電所内部で応戦しているようだが？》

「フェンスに破れていた部分があって、そこから侵入した。ただその直後、敵の迎撃にあつて俺達は足止めを食らっている。」

ベルトウェイは、ネストルと共にコンクリートから身を乗り出してアサルトライフルの銃弾を敵兵に向けて発射したが、五十メートル以上離れた相手に一瞬のうちに弾丸を叩き込むには、やはり機銃の制圧射撃を止める必要があつた。

「ネストル、さっきから顔色が悪いが大丈夫か？」

「……………」

ベルトウェイの問いかけに応じる気力も無いのか、ネストルは下を向いたまま黙っていた。

徐々に敵の激しい銃撃によって削られていくコンクリートを見ながら、フェレルはぼやいた。

「照りつける太陽に、ざらざらに乾いた砂……そろそろ突破しないと、俺達の体力とコンクリートが持たない。一か八か、俺がここから飛び出すからその瞬間に——」

「やめろ。俺がやる」

「え？」

ベルトウェイは左腕のシールドを展開しながら、右斜め前方のコ

ンクリートに向かって走り出した。

一斉に浴びせられる敵の銃弾をなんとかシールドで防ぎながら、怒涛の特攻でコンクリートに接近していく。

「イーリス！」

ベルトウェイが命令する前に、イーリスは持っていたグレネードランチャーを遮蔽物越しに乱射した。敵兵が何人か吹き飛ぶ共に、機銃の掃射が止む。

その間にフェレルとネストルは、ベルトウェイの後に続いた。しかし、すぐに機銃の砲火が再開した。

取り残されたイーリスがベルトウェイに無線を送る。

「やっぱりあの機銃を何とかしないと……」

「分かった。リーリオ、航空支援を頼む」

《了解、そちらは待機せよ》

《ゲイル隊へ、アース隊を足止めしている機銃を確認できるか？》

「……ああ、見えた」

《無力化しろ》

「了解、リーリオ」

ゲイル隊はそのまま高度を下げていくと、地上に見える敵機銃手に向けて火球を何発か放った。

機銃手周辺に爆発が起こり、近くにあったフェンスが吹き飛んでいった。ゲイル隊は地上の被害を確認していると、アース隊の大男がこちらに手を振っているのを見た。ゲイル1は合図を返すと、他の三騎を引き連れて発電所に向かった。

「こちらアース隊、航空支援感謝する。脅威が去ったのでそのまま前進する」

《了解、アース隊。引き続き敵地上部隊の殲滅を頼む》

ベルトウェイは無線を切ると、追いついてきたイーリスと合流し、フェレルとネストルと共に発電所内部に侵入した。

カルラは敵の対空砲火を無視しながら、地上で戦っている味方兵士達の顔を一人ずつ確認しようと、なるべくゆっくりと飛行していた。

《ブラスト1！ 早く戻れ！ SAM（地対空ミサイル）が確認された！》

その言葉にはっとしたカルラは、自分の身勝手さに気付き急いで高度を上げた。

しかし、その瞬間にMAWSが鳴り出した。

すぐ後ろに迫っているミサイルを見て、カルラが半ば諦めの気持ちで右に旋回しようとした時、どこから飛んできたフレアがミサイルの軌道を狂わせた。

「ブラスト1、そのまま高度を上げろ」

ダレルの投げたフレアが拡散していくのを見ながら、カルラは佐藤木達の元に戻った。

《ブラスト隊、十時の方向からシュヴァルム（四騎編隊）の敵影を確認。接近してくる。シムーン隊と共に迎撃せよ》

「了解、リーリオ」

佐藤木は無線を切ると、カルラに怒鳴りだしそうなダレルを抑える形で、カルラに話し掛けた。

「心配なのは分かりますけど、今は敵を倒しましょう」

「……悪かったよ、ごめん……」

その様子に溜め息を吐いたダレルは、シムーン隊と合流しながら言った。

「さっさと敵を黙らせて、亭主の安全を確認しようや」

カルラは頷くと、近づいてくる敵影に向けてミサイルランチャーを発射した。

アース隊は、発電所内部に侵入すると、やけに静かなことに気付いた。

「ソイル隊、ダーディ隊、現在どこにいる？」

ベルトウェイは無線で呼び掛ける。

「――こちらソイル隊、今から対空兵器の無力化に行くところだ」

「ダーディ隊はどうした？」

「発電所の内部の敵兵をあらかじめ排除した後、そこに残ったはずだぜ？」

「……そうか、分かった。対空兵器を頼む」

「任せときな」

通信を終えたベルトウェイは、アサルトライフルを構えながら施設内の廊下を前進する。後ろから付いてきているフェレルが話しかけてきた。

「ダーディ隊はどこに消えたんだ？」

「さあな。とりあえず、まだ敵兵が居ないか確認するぞ。ダーディ隊はもしかしたら負傷して、休んでいるのかもしれない」

ネストルは地面に転がる死体をよけながら、ダーディ隊に無線を送る。

「こちらアース隊、ダーディ隊聞こえるか？」

しばらく待った後、ネストルは首を振った。

イリスは通り過ぎた部屋を一つ一つ覗き込みながら、ダーディ隊がいなかったか確認しながら歩いた。

「司令室に連絡してみよう」

ベルトウェイは階段の踊り場で立ち止まると、無線を開いた。

「こちらアース隊、そちらのリーダーでダーディ隊の位置を特定できるか？」

「――いや、ビーコンが消失している。最後に確認したのは中央にある管理室のあたりだ」

「了解したリーリオ、こちらに敵兵は見当たらない。今から管理室に向かう」

ベルトウェイは階段を上りきると、他の三人と共に管理室へと向かった。

佐藤木は敵の対空砲火をかわしながら、敵のドラゴンとドッグフアイトを続けていた。

「誰かあの対空砲を止めてくれ！」

ダレルはそう叫びながら、カルラと共に二騎のドラゴンと戦っていた。シムーン隊は敵のリーダー一騎に翻弄されているようだ。

「私の翼に穴が開く前に、地上部隊に命令するのだ！」

佐藤木は司令室に通信した。

「こちらブラスト2、対空砲火に晒されている！早くあれを止めてください！」

《了解、ブラスト2。地上ではソイル隊が対空兵器の無力化にあたっている。それまで耐えてくれ！》

ソイル隊は高射砲を陣取っていた敵兵を排除すると、高射砲に爆薬を設置した。

「こちらソイル隊、今から敵高射砲を爆破する！」

すぐに高射砲から距離を置くと、起爆装置のボタンを押した。

一瞬置いて、爆風と衝撃音があたり一面響いた。ソイル隊は高射砲のあった場所を確認すると、鉄くずと化した砲身部分が地面に転がっていた。

「リーリオへ、対空兵器を無力化したぞ！」

《良くやった、ソイル隊！敵航空部隊に気付かれる前に、急いで発電所内部に避難してくれ！》

「対空砲火が止んだぞ！」

フェレルが敵のドラゴンに組み付かれながらも、無線でブラスト隊とシムーン隊に伝えてきた。

佐藤木はミサイルランチャーを敵騎に発射し、フレアを撒いたところでライカが火球を放った。敵騎は急旋回で避けようとしたが、火球の速度に間に合わずそのまま直撃し、落下していった。

「リーリオ、こちらブラスト2。敵騎を撃墜しました」

《了解、ブラスト2。良くやった》

佐藤木がフェレルの方に振り向くと、丁度敵騎の組み付きから離れて、火球を当てたところだった。

カルラもすでに交戦を終え、逃げ回る敵騎のリーダーを追い詰めるシムーン隊の援護に向かったようだ。

佐藤木もシムーン隊の援護に向かうとしたところで、ある異変に気付いた。

敵騎のリーダーが、徐々に高度を下げているのだ。

「あのドラゴンに乗っているコマンドは、何を考えておるのだ？ 部隊が全滅したのならば、さっさと退却すれば良いものを……」

ライカと同じことを考えていた佐藤木は、疑問に思いながらも敵リーダーの向かう先を見た。

その瞬間、ライカの鎖を引っ張った。

「っ！ 言われなくても気付いたわ！」

ライカが急加速していくと、佐藤木は司令室に無線を送った。

「こちらブラスト2、敵一騎がソイル隊に向かって急降下しています！」

《――ブラスト2、こちらでも確認出来た。撃墜できるか？》

「分かりません！ 地上部隊を援護していたゲイル隊はどうしたんです？」

《彼らは、発電所周辺の敵地上部隊の搜索にあたっている。今からでは間に合わない！》

ライカが敵リーダーに合わせて急降下、急旋回繰り返したところで、佐藤木は激しい嘔吐感に襲われた。

何とかこらえながらも前方を確認すると、発電用風車を地面すれすれで潜り抜け、うまい具合にシムーン隊とカルラの追撃をかわしていた。

「あの若輩者共では追いつくのは不可能だ」

「いける？」

「お主こそ、どうなのだ？」

何の気後れもせずに風車に向けて突入していくライカに、佐藤木は思った。

——恐らく、ライカが恐れずに立ち向かえるのは、今まで同じような修羅場を何度も潜り抜けてきたおかげなのだろう。なら、俺も今だけは若輩者でいるわけにはいかない。

「大丈夫」

「しっかりと掴まっておけ」

ライカはそのまま敵リーダーとの距離を縮めていく。

風車の動きに合わせるため、身体を回転しながら近づいていくライカの背中にしがみつきながら佐藤木は、胃からせり上がって来る物を喉で押さえつけた。無線でダレルやカルラが一喜一憂している声が聞こえてくる。敵リーダーのドラゴンがソイル隊に向けて顎を大きく開けようとした時、ライカがドラゴンの尻尾に噛み付いた。悲鳴を上げてドラゴンが軌道を変えようと身をよじるが、コマンドがまだ諦めずにミサイルランチャーで発電所に駆け込むソイル隊を狙うせいで動けずにいた。

そこに佐藤木は、ミサイルを発射した。

真っ直ぐに敵のドラゴンに命中すると、ドラゴンはコマンド共に発電所の敷地内に墜ちた。そのまま地面を転がっていくと、フェンスにぶつかり止まった。

「すげえ……」

ダレルが感嘆の声を漏らすと、カルラが無言で頷いた。

「すげえぞ、ブラスト2！ 本当に二番騎なのか！？」

シムーン隊とゲイル隊の称賛が無線で聞こえてきた頃には、佐藤木の酔いは収まっていた。

「こちらブラスト2、ソイル隊を追っていた敵騎を撃墜しました」

《こちらも見えていたブラスト2、素晴らしい腕だ。良くやった》

佐藤木は通信を切ると、何食わぬ顔でブラスト隊に戻っていくライカを誇らしく思った。

「ほんとすごいよ……ライカ」

「お主も良く耐えたな」

佐藤木は、笑顔で出迎えてくれたダレルとカルラに手を振った。

《全騎に告ぐ、味方地上部隊の報告があるまで待機せよ。上空の警戒を怠るな》

ラヴィーナは航空部隊を示すレーダーから目を離すと、指揮官補佐が持ってきた炭酸飲料を受け取りながら一安心した。

「さて、後は地上部隊、か……」

アース隊は管理室の手前まで来ると、部屋の中から複数の呻き声を聞いた。ベルトウェイは三人に合図すると、部屋の中へと突入した。

フェレルが部屋の中を見渡すと、アエイル軍の象徴である青のライン線が入った戦闘服を着た四人の男女が壁にもたれ掛かっていた。全員何かしらの傷を負っているようだ。ベルトウェイがその中の男の一人をゆっくり起こすと、なるべく傷口に響かない声で言った。

「……大丈夫か？」

「ああ……その床に寝ている奴よりは軽症だ……」

イーリスが床の上で呻いている隊員の傷口を押さえた。

フェレルはバックパックから消毒液と包帯を取り出すと、他の負傷者達の手当てを始めた。ネストルは周囲を警戒しながら、司令室と連絡を取っているようだ。

「お前達がダーディ隊だな？」

「ああ……そうだ」

「何があった？ ソイル隊は、発電所内の敵兵はあらかじめ片付けたと言っていたが……？」

隊員は軽く咳き込みながら答えた。

「ソイル隊が高射砲を片付けに行った後だった……いたんだ、隣の計測室に」

隊員は近くの鉄の扉を指した。

「敵兵は今もいるのか？」

「恐らくな……」

「待っている、片付けてくる」

「待つんだ……！」

隊員がそう言ってベルトウェイを掴んだその腕は、切創で満たさ
れていた。

「その腕は……？」

「奴にやられた……」

「奴？ 敵兵は複数じゃないのか？」

「ああ……一人だった……」

見ると、負傷している隊員達全員の傷口は、鋭利な刃物で切られ
たようだった。

ベルトウェイは考え込むと、司令室に無線を送った。

「こちらアース隊、さっき男からどこまで聞いている？」

《こちらリーリオ、ダーディ隊を発見し治療しているところまでだ》

「了解、俺は今から計測室に向かう」

床で倒れている隊員の出血を抑えながら、イーリスがベルトウェ
イを見た。

《まだ敵兵が残っているのか？ 増援はどうする？》

「いや、いい。敵兵は一人だ」

《一人？》

「そいつにダーディ隊は全員やられたらしい。恐らく……ゲオルギ
ウスの奴だ」

《……分かった、気を付けろ》

「ああ」

ベルトウェイは無線を切り、さっきの隊員に自分の医療道具を渡
すと言った。

「四人分の傷を負わせてくる。ここで待っている」

「頼んだ……」

計測室に続く扉を開けようすると、イーリスが付いて来た。

「君は負傷者の手当てを頼む」

「私にはこっちの方が向いてる。それに一人で殺れると思ってるの？ 早く開けて」

「この先にいるのは――」

「知ってる。やばくなったら助けてくれるでしょう？」

「危険――」

「足手まといにはならないって。早く開けて」

ベルトウェイはイーリスの気迫に押される形で、同伴を許した。筋骨隆々の大男が、年頃の娘に言い負かされた図を見てフェレルは苦笑いを浮かべると、ベルトウェイに言った。

「ここは俺達に任せろ。そっちは頼んだ」

「……化け物同士の戦いには巻き込まれたくないからな……」

ネストルが手当てに加わりながらぼそりと呟いた言葉に、フェレルは溜め息を吐いた。

「おいおい……じゃあ、頼んだぞ」

ベルトウェイとイーリスは頷くと、扉を開けて計測室へと入っていった。

Mission 03: The battle with the tenth

計測室の中は、発電所の従業員が機器類の点検を行うための計器で溢れていた。

ベルトウェイは扉を開めると、イーリスを自分の後ろに付くように指示する。天窓から差し込む陽光で室内は照らされていたが、壁にこびり付いた血の跡のせいで陰惨とした空気が漂っていた。

「後ろを頼む」

ベルトウェイはイーリスにそう言って、鉄パイプで出来ている手すりを乗り越えた。

《いたか？》

「いや、まだ見えない。恐らくどこかに隠れて――」

「ひゅお！」

ベルトウェイは誰かが発したその掛け声を聞いた瞬間、適当な物陰に飛び込んだ。さっきまで自分が居た金網状の床に、ナイフが三本刺さっていた。

イーリスがナイフが飛んできた方向に向かって、ハンドガンを連射する。すると、人の形をした影が、天井にある太いパイプに飛び移った。

「お前らも俺のアートになりに来たのか!？」

「アート？」

ベルトウェイは疑問に思いながらも、物陰越しに天井に向かって言った。

「お前の部隊は全滅した。発電所の制圧は失敗したんだ。早く降りて来い」

「発電所の制圧？　おいおい……何を勘違いしてるんだ？　俺はここに芸術の花を咲かせに来たんだぞ？」

その言葉を聞いてベルトウェイは、うんざりしながらも司令室に報告した。

「リーリオ、敵側の選手を発見」

《分かった。ひとまず、降伏勧告を――》

「もうしたんだが……相手は花を咲かせに来たらしい」

《花？ 一体、何のことを――》

「頭のイカれた奴の言葉だから、気にしないで」

イーリスはベルトウェイの無線機をひったくると、そう言った。

《……了解、とりあえずそいつを無力化してくれ》

イーリスは無線機を返すと、耳元で囁いた。

「花とか芸術で思い出したんだけど、あいつはゲオルギウスランク十位の『ストレンジナイフ』。闘技場で直接見たから、間違いない」

「ストレンジナイフ（イカれたナイフ）……そのまんまだな」

「でも、あいつのナイフ捌きはヤバイ。かなり正確」

ベルトウェイは地面に刺さったままのナイフを見て、頷いた。

「そのようだ。リーリオ」

《どうした？》

「少し、発電所の中が荒れるが、良いか？」

《……弁償するさ》

ベルトウェイは無線を切ると、物陰から飛び出し天井のパイプに向けてアサルトライフルの弾丸を叩き込んだ。

すると、影はまた他のパイプに飛び移った。

「話し合いは済んだようだな！？ ならアートの時間だ！」

「イーリス、奴をあぶり出せ！」

ベルトウェイは、次々に飛んでくるナイフをかわしながら命じた。

イーリスは天井に向かってグレネードランチャーの嵐をお見舞いしながら、ベルトウェイの後ろに付いた。

いたところで爆発、炎上が起こり、ベルトウェイが顔を背けていると、パイプが交差している所からモヒカン頭の男が落下してきた。

「ぐわあ！」

悲鳴を上げながら地面に激突したストレンジは、直ぐに態勢を立

て直し、ナイフを手品ののように扇状に広げながら突進してくる。

ベルトウェイは飛ばしてきたナイフをシールドで弾きながら、背中のブレードを抜き、ストレンジのナイフホルダーをそぎ落とした。

「俺の芸術が!？」

「安っぽい芸術だな」

「素人に何が分かる!？ 死ねえ!」

ストレンジは地面を蹴って大きく跳躍すると、ベルトウェイに隠し持っていた何十本ものナイフを投げつけた。しかし、何本かはまともに飛んでこないブラフ（はったり）で、ベルトウェイはそれを正確にブレードで弾き返すと、残ったナイフをシールドで防ぎ、ストレンジの顔面に右ストレートを打ち込んだ。

地面に泡を吹きながら倒れ込んだストレンジは、手に持っていたナイフを取りこぼした。

「こんな奴が俺より上のランクとは……」

「戦争が始まって、ランクの変動が落ち着かないから」

仕方なさそうにイーリスはそう漏らすと、グレネードランチャーの弾倉を交換した。

「でも、これであんたのランクも上がるんじゃない？」

「君のランクもな」

ベルトウェイはストレンジのナイフを取り上げると、陽光にかざして眺めた。

「よく磨かれているな……ナイフのグリップも投げやすいように調整されているようだ。こいつには悪いが、これからの戦いに使わせてもらおう」

ベルトウェイがナイフをバックパックにしまうと、無線に通信が入った。

「ベルトウェイ、無事か？」

「ドクター、また無線を傍受していたのか？」

「ああ……頭痛の件で心配になってな……」

「大丈夫だ。発電所の防衛も成功した」

「良かった……無事に戻ってきてくれ」

「ああ」

無線を切ると、イーリスが怪訝な顔をして聞いてきた。

「誰？」

「俺の娘の主治医、ドクターだ」

「どうしてこの無線を知ってるの？」

「無線を傍受していたらしい。その過程で俺達の周波数も見つけたんだろう」

「……大丈夫なの？」

「多分な」

「……………」

イーリスの呆れた顔を見無視して、ベルトウェイは司令室に連絡した。

「こちらアース隊、最後の敵を片付けた」

カルラの再会

セルバ基地に帰っていくシムーン隊を見送って、ブラスト隊は発電所に着陸した。

佐藤木が発電所の中から担架で運ばれてくるダーディ隊を眺めていると、突然、横に居たカルラが走り出した。そのまま真っ先に大男に肩を貸されながら歩いている男に抱きついた。

「あの人かな？」

佐藤木は隣で自分のドラゴンに水を与えているダレルに聞いた。

「多分な。怪我してるみたいだけど、あの様子だと大丈夫そうだな」
「うん……」

お互いの無事を確認して喜びを分かち合っている二人を見て、佐藤木も一安心した。

「あんた……！ その怪我、大丈夫なの……？」

「ああ……アース隊のおかげだ。その二人は、残っていた敵の排除もしてくれたんだ」

カルラは隣に居た少女と大男に感謝した。

「ありがとうございます……おかげで、うちの亭主が助かりました」すると、大男が納得したように言った。

「あんただったのか……」

「え……？」

「さっきまで、あんたの亭主に聞かれていたんだ。『妻が航空部隊にいるんだ。無事なのか？』ってな」

「出来れば、それは言わないで欲しかったんだが……」

愛する夫、イバンは赤面すると、頭を？きながらそっぽを向いた。カルラも顔を赤くしながら、目線を泳がせた。

大男は笑いながら「大事にな」と言うと、二人の兵士と共に施設の外へと歩いていった。恐らくセルバ駅へと向かっているのだろう。

カルラはその場を去ろうとした少女を引き止め、お礼を言った。

「あんたも、ありがとう……」

「別に……」

少女もダーディ隊を運んでいくソイル隊の後を追って、発電所から遠ざかっていった。

佐藤木は、抱き合う二人を遠巻きに眺めているライカに話しかけた。

「ライカも、怪我とかしてない？」

「……一概にも言えぬのだな」

「え？」

「いや、我は人間は私利私欲の塊だと考えていたのだ。しかし……全てが当てはまるわけでは無い様だ……」

「……うん。でも、だいたいは欲の塊だよ」

ライカは佐藤木を見た。

「お主もか？」

「そうだよ」

「即答であるな？」

ライカは少し驚いて、翼を伸ばすのを止めた。

「人に迷惑を掛けるほどでは無いけど、俺だって『有名になりたい』だとか、『大金持ちになりたい』とかは思ったことはあるよ」

「ならぬのか？」

「……方法が浮かばない。それと、そういう風になる人は既に行動を起こしてる」

カルラの夫は、カルラと共に衛生兵に連れられてどこかへと歩いていく。

「カルラはもう少しここに居るってさ。俺達は戻ろうぜ」

佐藤木はダレルの言葉に頷き、ライカの背中に乗った。

「欲は誰しも平等……か」

「そう。それを実現する方法が見つからないだけ」

そこでふと、カルラと夫が仲睦ましく歩いているのを見て佐藤木は思った。

「そう言えば、ライカは雄と雌、どっち何だ？」

「……同種にモテないからといって、他の種族に走るのはどうかと――」

「うるせえよ！」

翼手に付いている鎖を引っ張った。

「あうっ……で、では、お主に恋人か何かは居るのか？」

「……居ない」

「……今までは？」

「居ない。モテたことも無い」

「……」

《――各騎に告ぐ、任務は終了した。基地に帰還せよ》

ライカは佐藤木を乗せて地面を蹴る。そして、翼を大きくはためかせ、徐々に高度を上げていった。

隣でダレルとゲイル隊が今回の戦いについて話していると、ライカはぼそりと呟いた。

「……我は雌だ」

「ふーん」

「……」

「……」

お互いに何故だが気まずい空気になり、一瞬の沈黙の後、佐藤木が何も取り繕っていないように誤魔化した。

「日が暮れてきた。段々寒くなるから、早く帰ろう」

「うむ」

佐藤木とライカは無言になると、コリーナ基地に向けて速度を上げた。

夜の帳をコリーナ駅に向けて突き進んでいるマグレブでは、戦いの疲れからかアース隊とソイル隊のほとんどが眠っていた。

ただ一人、ベルトウェイを除いて。

ベルトウェイはマグレブの電話室で、コリーナ基地に電話を掛けていた。

「——はい、もしもし。こちらコリーナ基地です」

「コリーナ基地アース隊のゴールドマンだ。ミラヴィー中尉に繋いでくれ」

「分かりました。少々お待ちください」

しばらくの待機音の後、ラヴィーナが受話器に出た。

「わざわざマグレブの電話から掛けてくるなんて……どうしたの？」

「無線だと話が聞かれるだろ？ 君と二人きりで話したい」

「ロマンチックね。いきなりどうし——」

「ヴァルトの管制塔に居たのは君か？」

「……単刀直入ね」

「遠回りは嫌いなんだ。どうなんだ？」

ベルトウェイは、長らく疑問に思っていたことを聞いた。

「……そうよ。私があなた達に指示を送った」

「なぜあの場に残らなかった？」

「私はアエイルの人間じゃないから」

「それは知っている。君は雇われ指揮官で——」

「それは嘘。アエイルに来る前にはグラティ二スの軍にいた。生まれも育ちも、グラティ二スなの」

「まさか……君はスパイなのか？」

「いいえ。私はもう……アエイル軍で戦うと決めた」

「……なぜだ？」

「……長い話になるわ」

ベルトウェイは近くにあった椅子を引き寄せると、そのままラヴィーナの声に耳を傾けた。

ラヴィーナの目的

「――私は……グラティニス軍の総司令官ウィリアムの直属の部下として、奴の部隊を指揮していたの」

受話器の向こうで語りだしたラヴィーナの言葉を、ベルトウェイは静かに聞いた。

「ある日、ウィリアムは私の元にクーデターの話を持ちかけてきた。それ以前に軍内部でクーデターは噂されていたし、私自身も祖国を救うチャンスだと思ってそれに参加したわ」

「……当時のグラティニスの弾圧は凄まじかったようだな。何の罪もない国民が、いわれの無い反逆罪で大勢殺されたと聞いた。」

すると、電話口からラヴィーナが震えた声を出した。恐らく、怒りだ。

「弾圧なんかじゃない……あれは虐殺よ」

「そうか……軍人として、辛かったな」

「……ごめんなさい」

「いいんだ」

ラヴィーナは落ち着いた声で続けた。

「それで私は、クーデターに参加した。最初は順調に賛同者を増やしていった、軍内部での権限も徐々に上がってきた。でも、どうしても近づけない領域があった」

「ウィリアムの父親か」

ベルトウェイは自分の口からウィリアムと口走った瞬間、頭の中でチカチカと何かが光るような感覚が湧き上がってきた。

「そう。ウィリアムの父親が居座っている総務の席と、その周辺にはどうしても近づけなかった。総務自身も身の危険を感じて、自分の配下に総務に近い権限を持つ軍人達を抱きこんでいたの」

「汚職の上の汚職か。そこまですれば、総務は何でもするだろうな」
「ええ。でもウィリアムは、ある方法でそれを打開する術を見つけ

た」

「ある方法？」

ベルトウエイは首をかしげた。

「当時、総務補佐の地位に就いていた自分の妻を……暗殺したの」

「何だって!？」

「そのおかげで……ウィリアムは自らの腹心をその席に座らせることが出来た。そのおかげで……父親の動きを知ることが出来た。そして、クーデターは成功した」

ラヴィーナはそう言い切ると、一息ついたようだ。

「俺には……理解出来ない。国のためとはいえ、自分の妻をこの手で殺すなんて……」

ベルトウエイはウィリアムが取った行動を、亡き妻を思い浮かべながら否定した。

ラヴィーナは溜め息を吐くと、ぼそりと呟いた。

「――親友、だった……」

「……？」

「総務補佐だった彼女とは、無二の親友だったの……唯一の、理解者……」

「それで復讐、か」

「そうよ。私はウィリアムを許せない。祖国では英雄でも、私にとっては憎んでも憎みきれない仇よ」

ラヴィーナはそう言うのと、黙り込んでしまった。

ベルトウエイは、何故か会った事もない無いウィリアムに対して、ラヴィーナと同等かそれ以上の怒りを抱いていた。それは、自らの妻を殺したという事実から来るものでもなければ、ラヴィーナが巻き込まれたことに対しての哀れみから来るものでもない。ベルトウエイが感じていたのは、自分の内なる所から来る『何か』だった。

ベルトウエイは、車窓から見える夜の砂漠地帯を眺めながら、話題を変えることにした。

「親友のために、か……さぞかし、素晴らしい人だったんだな」

「ええ……彼女は、どんなことでも受け入れてくれる人だった。私が軍人になって初めの頃、周囲にうまく溶け込めない私を見て、わざわざお弁当を持参して『一緒に食べよう』と誘ってくれるほどだった」

「……しかし、意外だな。君は社交的な性格だと思っていた」

「そんなことはないわ。学生時代は、休み時間にノートの端に絵を描くタイプだった」

「……人は見かけによらないな」

ベルトウェイは、ラヴィーナの意外な過去に驚きながらも、受話器の向こうの声質が、また変わったことに気付いていた。

「だから、私はウィリアムをこの手で殺してやりたいの。金髪を茶色に染めたのは、変装もあるけど……あいつが最後に見るものを、彼女の髪の色にしたいから」

「栗毛だったのか、彼女は」

「そう。それで、菖蒲の花が好きな人だった……」

菖蒲。

その響きにベルトウェイは、沸々と込み上げていた怒りがすっと収まる感じがした。

「約束して欲しいの。もし、この先ウィリアムと接触する機会があれば……奴を拘束して欲しい。私自身の手で……地獄に落とすわ」

「……出来ればな」

「勿論よ。アエイルの人達に、迷惑を掛けるつもりは無いわ」

拘束したウィリアムをラヴィーナが銃殺する映像を頭に思い浮かべたところで、ベルトウェイは気付いた。

「……しかし、拘束したとしても裁判にかけられるだろう？」

「大丈夫よ。その前に殺すわ」

「そんなことをすれば、捕まるぞ？」

受話器の先で鼻を鳴らす音が聞こえた。

「構わないわ。奴さえ殺せばどうなろうと」

投げやりなその意見に、ベルトウェイは内心溜め息を吐いた。

後先考えずに行動することは、若者の短所であり特権だ。

「……分かった。約束しよう」

「……ありがとう」

「良いんだ」

「……ベルトウェイ？」

「？」

初めて名前を呼ばれて、少し驚く。

「あなた、娘さんがいるのよね？」

「ああ」

「……一度、会ってみたいものね」

ホリーの話題を出されて、ベルトウェイは少し嬉しくなった。

「……喜んでくれると思う。家から出られない身体だから、世間のことに少し疎いんだ」

「心配しないで。私が色々教えてあげる」

「……余計なことまで吹き込むなよ？」

「それ、どう言う意味かしら？」

二人は静かに笑い合うと、ラヴィーナが「じゃあ、基地で」と言い残し、先に切った。

受話器を置いたベルトウェイは、電話室を出てアース隊のいる区画に戻った。

静かに寝息を立てているアース隊の面々を見ながら、ある決意をする。

——どのみち、ホリーのためにも戦争を終わらせなければならぬ。そして、終わった後には、若い奴らの力が必要だ。もちろんそれには、ラヴィーナも含まれている。つまり、俺に出来ることは……。

静かに席に着きながら、ベルトウェイは思った。

ラヴィーナには悪いが、ウィリアムは俺が殺すことになるだろう、と。

佐藤木の訓練（前書き）

Episode 3までのあらすじ

ライカを逃した罪から逃れるため、共にこの戦争を戦い抜く道を選ぶ佐藤木とライカ。

その頃、ベルトウェイはコリーナ基地で仲間達と共に、基地の指揮官となったラヴィーナから、この戦争の現状を聞かされる。

また、佐藤木も航空部隊「ブラスト隊」に配属され、この戦争と共に戦う仲間を得ることになった。

グラティニス軍による襲撃を受けたセルバで、「ブラスト2」という新たな呼び名を得た佐藤木は、敵騎のリーダーであるドラゴンからソイル隊を守りきり、仲間からの称賛を浴びる。

また、地上ではセルバ基地の地上部隊「ダーディ隊」を退散させた男、ゲオルギウスランク十位の「ストレンジナイフ」を、ベルトウェイとイーリスが協力して打ち破り、セルバの発電所を見事防衛した。

そして、仲間達の過去と目的が、徐々に明かされていく……

佐藤木の訓練

セルバでの戦いから一夜明け、兵士達が早朝の走りこみをしている時に、ライカは目覚めた。忌々しそうに鎖をじゃらじゃらと鳴らしながら、昨夜の記憶を思い出す。

コリーナ基地に戻ってから、佐藤木は基地の整備員と協力し巨大なチェーンカッターでライカの鎖と悪戦苦闘していた。

結論から言うと切れなかったが、汗水を垂らしながら必死に鎖と戦う佐藤木と整備員を見て、ライカは攻めることが出来なかった。

「もう、良いわ」

所々切りまくったせいでバリが生じ、無駄に攻撃力を高めてしまった鎖を引き摺りながら、ライカは格納庫に用意されている水を飲むとする。

しかし、突然射撃場から鳴った銃声に身をすくませた。

「射撃訓練にはまだ早いな……一体、誰だ？」

格納庫から出て射撃場に向かうと、そこには佐藤木がアサルトライフルで人の形をした的を撃っていた。

全弾、外しているが。

ライカは、なるべく驚かさないような声音で聞いた。

「……お主、何をしているのだ？」

「何って……訓練だよ？ 見て分らない？」

もう一度的を見てから、佐藤木の周りを見渡した。

「教官は居ないのか……お主一人で射撃の腕を上げられるほど、銃の鍛錬は甘くないぞ」

「銃も撃てないなんて恥ずかしいんだよ……だから、自主トレ」

また射撃を再開した佐藤木だったが、一向に弾は的から逸れていなかった。

「心意気は買うが……まあ、せいぜい腱鞘炎に気を付けるのだな」
朝の空中散歩を楽しもうと、翼を大きくはためかせようとしたが、佐藤木の足元に何百発もの葉莢が転がっているのを見て、翼手を止めた。

「――まずは、ハンドガンから始めるのだ」

銃を撃つ手が止む。

「ライフル銃の場合は……まあ、お主に簡単に説明するでしょう」
ライカは翼手を伸ばして、佐藤木の身体を固定した。

「力を抜け」

静かに息を吐いた佐藤木は、左手にアサルトライフルを持ち替えて肩を回す。リラックスしても真剣な表情の佐藤木に、ライカは質問した。

「今が最も楽な姿勢か？」

「ああ」

朝日の光が汗で反射している佐藤木に、静かに指示を送る。

「引き金を引く時は、『引く』ことよりも『絞る』ということを考えるのだ」

「分かった」

「では、肩のくぼみに銃をしっかりと当てよ」

言われた通りに、右手でアサルトライフルを構える。

「反動を抑えるために、重心を落とせ」

腰を落とし、少しだけ前屈みになる。

「狙え。気張るでない」

自然と的が照準に入るように、徐々に眼差しを強くする。

「息を止めろ」

周囲では、遠くで号令を掛けながら走っている兵士の声だけが響く。

「心臓の鼓動に合わせて……撃て」

佐藤木がゆっくりとアサルトライフルの引き金を絞ると、三十メートルほど先にある的の肩の部分に命中した。

「おお……！」

感嘆の声を上げた佐藤木を見届け、ライカは黙って朝日の昇る空に向かって飛び立った。

ランクアップ(1)

ベルトウェイは、昨夜戻ってきたコリーナ基地の宿舎で起床した。凝り固まった筋肉を解しながらベッドから下りると、ほぼ毎日の日課となっている筋力トレーニングを始めようとする。

しかし突然、部屋の扉をノックされたことで中止が決まる。

ベルトウェイが扉を開けると、そこには前に会ったことのある、スーツの男が立っていた。

「おはようございます、ゴールドさん。ゲオルギウスランク『八位』に認定されました」

ベルトウェイの脳内で、昨日セルバの発電所で戦ったストレンジナイフが思い浮かぶ。

「……イーリスの言った通り、戦争中でもランクの変動は変わらないのか」

「はい。また、先ほどイーリスさんにもランク『九位』の認定報告をしたのですが……どうやらシャワーを浴びている途中だったようで、危うく殺されかけました……」

「……今が一番気にする年頃だ。気を付けろ」

「肝に銘じておきます——それでは」

そう言い終わると、スーツの男は去っていく。

ベルトウェイは扉を閉めて、トレーニングを再開した。

途中でイーリスの、「死ね！ 変態！」という叫び声と銃声が聞こえたが、無視することにした。

ベルトウェイはトレーニングを終えると、ホリーに会いに行った。いつものように笑顔で出迎えてくれたホリーと雑談していると、マグレブでのラヴィーナの言葉を思い出し、ホリーに相談する。

「——なあ、ホリー。実は、お前に会わせたい人が居るんだが、ここに連れて来ても大丈夫か？」

「……………」

今まで終始笑顔だったが、その言葉を聞いた途端、ホリーは少し暗い表情をした。

「嫌か？」

ホリーは静かに首を横に振った。

その様子を見て、ベルトウェイは思う。

——今まで、俺とドクター以外の人間に会う機会が無かったんだ

……仕方が無いな。

「考えてみてくれ」

「……………」

ホリーは無言で頷くと、それっきり黙り込んでしまった。

ベルトウェイも何となく居づらくなり、「また来る」と言い残し、ホリーの部屋を後にした。

盗み聞き

佐藤木が射撃場で練習を終え、基地の休憩所に行くと、そこにはダレルが居た。

ダレルは佐藤木を見つけると手招きする。

佐藤木が近づいていくと、突然ダレルに強引に引き寄せられた。

「何すんだよ!? 俺にそんな趣味はねえ!」

「馬鹿野郎! 違えよ! ……お前、ミラヴィー中尉って知ってるか?」

「え? ああ、知ってるけど……」

ダレルは周りを警戒しながら、声を潜めて佐藤木に伝えた。

「実は……昨日、ミラヴィー中尉がここの電話で誰かと話してるところをたまたま見たんだが、その内容が……かなりヤバかったんだ」
「……何で?」

聞いてはいけなことを聞いた、という表情をしているダレルに佐藤木は疑問を覚えた。

「ミラヴィー中尉は……元グラティニスの軍人らしい。しかも、雇われ指揮官って話は嘘だ」

「じゃあ……何でアエイルに居るんだよ? まさか、スパイ——」

「誰がスパイですって?」

二人はその声に振り向くと、何かの書類を持っているラヴィーナが立っていた。

一気に青い顔になったダレルが、必死に敬礼をして取り繕う。

「い、いえ! 決してミラヴィー中尉のことではありません!」

「そう……でも、いくら情報屋を兼ねているからと言って、盗み聞きはいけないと思うわ」

「情報屋」という単語が出た瞬間、ダレルの表情が変わった。

「……知ってたんですか」

「勿論よ。この戦争にも、それが理由で参戦したんでしょう?」

佐藤木は、ダレルのことを情報屋だというラヴィーナの顔を見ながら、先ほどの話を思い出した。

「ミラヴィー中尉、元グラティニス軍だというのは本当ですか？」

「本当よ」

「……どうして今、アエイルに？」

「それは――」

ラヴィーナは答えようとしたが、休憩所に入ってきた茶髪の大男を見て口を止めた。大男はラヴィーナを見つけると、一緒に居る佐藤木とダレルを横目で見ながら、近づいて来た。

「君に話があって来たんだが……後で話そう」

「別に大丈夫よ。……それで、どうせあなたは最後まで聞いていたんでしょう？」

突然話を振られたダレルは居心地が悪そうに頷いた。

「じゃあ、あなたから彼に説明出来るわね？」

ラヴィーナはそう言うのと、大男の肩を叩いて二人でどこかへ消えてしまった。

「はあ……」

ダレルの溜め息に反応して、佐藤木は疑問に思ったことを聞いた。
「……ミラヴィー中尉は、どうしてアエイルに居るんだ？」

「中尉は――」

ダレルは、佐藤木に盗み聞きした内容を全て話した。

「――娘さんに？」

ベルトウェイは、ラヴィーナにホリーに会って欲しいと頼んでいた。
た。

「ああ。マグレブでの電話の時、ホリーに一度会ってみたいと言っていただろう？　それで、一度ホリーを俺とドク――ホリーの主治医以外の人間に会わせてみたいんだ」

ラヴィーナは、基地の廊下で腕組みながら考えた。

「勿論、私も会ってみたいけど……ホリーちゃんは承諾しなかった

んでしょう？」

「ああ……でも、このままではホリーは人との関わり方を忘れるかもしれない。それは、病気が治った時に相当あの子を苦しませるはずだ。その前に、君の手を借して欲しい」

いつに無く真剣な眼差しで嘆願するベルトウェイに、ラヴィーナは折れた。

「……分かったわ。私も出来る限り協力する。……まったく、娘さんのことになる、仏頂面の面影が消えるのね」

「……ありがとう」

ベルトウェイは礼を述べながら、自分の顔に手を当てて顔の筋肉を解してみた。その様子にラヴィーナがくすくすと笑っていると、基地内に出撃のサイレンが鳴り響いた。

「じゃあ、任務が終わったら」

「ああ、頼む」

ベルトウェイは、ラヴィーナと共に作戦室に向かった。

都市への侵攻

「では、現在の状況を伝える」

ラヴィーナは、作戦室に集合した航空部隊と地上部隊に、スクリーンでアエイル公国の全体像を映し出した。

「現在、アエイル公国の都市の一つ、『フロレスタ』にグラティニス軍が進撃している。グラティニス軍は、フロレスタの西にある遺跡地帯から迫ってきているようだ。そこで我々は、フロレスタ基地の味方部隊と共に遺跡に向かう。そこでグラティニス軍を都市に入らせる前に、迎撃するんだ」

地上部隊の一人が手を上げた。

「グラティニス軍の規模は？」

「正確には分からないが、フロレスタはアエイルにとって物資流通の要だ。そこを狙うというのだから、恐らく……地上部隊は一個中隊（六十から二百五十人）、航空部隊もそれと同等（七騎から十六騎）だろう」

「一個中隊か……」

兵士達は、皆それぞれ緊張した面持ちになった。

「それと、フロレスタからの情報によると敵戦力の中にゲオルギウスの選手が確認された。選手の名は、マークス・レイジというらしい」

「マークス……」

一番後ろの席に座っていたベルトウェイは、一人でそう呟いた。

「彼の現段階のランクは不明だが、私はセルバでの戦闘を見て、今後一般兵がゲオルギウスの選手と交戦することを禁止とした。敵選手には、こちらの選手と交戦してもらう」

話を聞いた兵士達は、一様に重い表情をしていた。

ラヴィーナはその様子を見て、励ますように言う。

「……多分、一個中隊規模の敵戦力を相手にするのは、初めてだと

いう人も居ると思うわ。でも、安心して。私は、この規模以上の敵軍を相手にしたこともあるし、今回はフロレスタの仲間が大勢付いてる。……大丈夫、私がしっかり指揮する。私を信じて、そして自分を信じて」

その言葉に、兵士達は頷いた。

いつもの決意に満ちた表情に兵士達が戻ると、ラヴィーナは声を改めて再開した。

「フロレスタはアエイル公国が認める重要都市の一つだ。これを奪われると、アエイル公国にあらゆる物資が行き届かなくなる。必ず防衛を成功させるぞ」

ラヴィーナはそう締めくくると、急いで作戦司令室に向かった。

ベルトウェイは、他の兵士達と一緒に武器庫に向かうイーリスを呼び止める。

「何？」

「君に頼みがある」

「……？」

「さっき、ラヴィーナが言っていたマークスという選手を知っているか？」

「知ってる。闘技場でも見たことがあるし」

「そうか、なら分かるな？ マークスが現れたら、君は闘うな」

途端に、ベルトウェイの想像通りイーリスの表情が一気に冷めた。

「それ……馬鹿にしてんの？」

「違う。君の実力は充分理解している。ただ、俺とマークスの闘いを邪魔しないで欲しいだけだ」

イーリスは、悔しそうに唇をかみ締めた。

「それとも、君は俺より強いのか？」

「分かったって……」

そう言うと、イーリスは一足早く武器庫に向かった。

ベルトウェイもその後続く。

——悪いな、イーリス。君にもプライドがあるだろう。しかし、

マーカスは危険すぎる。俺が相手にならなければ。それを奴も望んでいるはずだ。

佐藤木は、カルラが装備の点検に集中している間に、ダレルに聞いた。

「ダレル、さっきミラヴィー中尉が言っていた情報屋って……？」

ダレルは溜め息を吐きながら、自分のドラゴンに跨った。

「フロレスタに向かう途中で話すよ……」

佐藤木もそれ以上は聞かず、ライカに跨る。

「お主、射撃の腕に自信は付いたか？」

「多少……でも、足手まといにはならない」

ブラスト隊はゲイル隊と共に、フロレスタに向けて飛び立った。

ダレルの正体

《——各機に告ぐ、フロレスタに到着次第、味方航空部隊と合流せよ》

「ブラスト隊、了解」

カルラが無線を切り、ゲイル隊と話している隙を狙って佐藤木は、ダレルに先ほどの話を持ちかけた。

「ダレル、さっきの話だけど……」

ダレルは嫌そうな顔しながら、口を開いた。

「俺の親父は、昔のまだ資源が残っていた時代に情報屋をやっていたんだ。各国を相手に、資源が残っている場所を探して、その情報を売っていた。……もう死んだけどな」

「じゃあ、父親の跡を継いで？」

その瞬間、ダレルは吹き出した。

「まさか！ ……親父はクソ野郎だった。お袋が病気で死んだ時も、国に戻って来ることさえしなかったんだ……」

初めてダレルの本心に触れて、佐藤木は思わず下を向いた。

ライカは今までの話を聞いているはずだが、何も言うことは無かった。

しかし、そこで疑問が浮かぶ。

「なら、どうして情報屋になった？」

朝日に照らされながらも、どこことなく表情に陰を持ったダレルは言った。

「親父は……最初から俺達家族に冷たいわけじゃなかった。ある日、突然様子がおかしくなったんだ。その時から、情報屋になったらしい。……俺は、親父を狂わせた原因を知りたいんだ」

「……そして、父親と同じ道を歩めば何か掴めると考えたのか……愚かな事よ。今更お主がどう足掻いたところで、何も変わらぬというのに」

佐藤木は、ライカの物言いを思わず咎めようとしたが、ダレルが意外にも「その通りさ」と認めたため、黙った。

「分かってる……分かってる」

その様子から、佐藤木とライカは何かを感じ取り、それ以上追及するのは止めた。

「そう言えば、あんた喋れるんだっただな？」

突然、明るい口調に戻ったダレルに戸惑いながら、ライカは答えた。

「そ、そうだが……」

「何でそんな口調なんだ？　まるで、大昔の物語に出てきそうな物言いだ」

「そう言えば、俺もそれずっと気になってたんだよな……何で？　ライカ」

「これには……訳があるのだ」

たじろくライカに、ダレルは思案しながら質問した。

「……訳って言うと、製造された時に関係が？　兵器開発研究所で有名な所は、一箇所しかない——」

「男同士でなに内緒話してんだい？」

カレルがダレルの肩をどついた。

「おいおい！　今、重要な話をしてる途中なんだ——って、おい待て！？」

ライカはダレルから離れるように、ゲイル隊の側に移動した。

「ライカ？」

「……………」

無言になってしまったライカに聞くわけにもいかず、佐藤木がどうしようか考えている時に、ラヴィーナから無線が鳴った。

《こちらリリーオ、もうじきフロレスタ上空に到着する。戦闘空域に突入する用意をしろ》

Mission 04: Floresta Defensive battle

アース隊とソイル隊は、遺跡に配備されたフロレスタの地上部隊と合流していた。

「かなりの数だな」

広大な砂漠地帯に、二百人近い地上部隊が集まっている光景を見て、フェレルは呟いた。

「君達がコリーナ基地からの援軍か？」

石柱の影で兵士に指示を送っていた男が近づいて来た。

少量の砂が混じった風から目を覆いながら、ベルトウェイが答える。

「そうだ。ミラヴィー中尉の命令で助けに来た、アース隊とソイル隊だ」

「ありがとう。私はこの地上部隊を率いている者だ。君達には私達と共に、西から来る敵地上部隊をこの遺跡地帯で足止めして欲しい」

男はそう言っていると、イーリスが周囲を見渡しているのを見て、もう一つ付け加えた。

「それと、もう気付いていると思うがここには遮蔽物が無い。崩れかけた石柱や、積み残っているレンガなどを盾にして戦ってくれ」

ネストルは、風化しながらも何とか建っている遺跡を眺めながら「ついてない……本当についてない」と呟き、石柱の陰に隠れた。

フェレルがそれを追って、ネストルに「最近おかしいぞ？ 大丈夫か？」と心配そうに話しかけているのを横目で見ながら、ベルトウェイは男に言った。

「ここからだ、相手から丸見えだな」

「だが、相手も丸見えだ。フロレスタを巻き込まないためには、ここで真正面からぶつかるしか方法は無い」

男に言葉に頷いた瞬間、通信兵が駆け寄ってきた。

「偵察兵からの報告！ もうすぐ敵地上部隊、及び航空部隊が到着

するとのことですよ！」

「分かった。地上部隊に戦闘態勢を取れと伝えろ」

「了解！」

アース隊とソイル隊の面々も、それぞれの武装を確認していると、男が地上部隊の中から四人の男女を招集した。

「彼らは『シムリヤー隊』だ。君達のサポートを頼んでおいた。うまく使ってくれ」

「よろしく頼む」

隊員達と握手を交わすと、立ち去る男に向けてベルトウェイが言った。

「敵側の選手は任せておけ」

「ああ……。私は闘技場で間近に見たことは無いが、既に多くの同胞がやられていると聞いた。……。部下を危険な目には合わせたくはない。どうか頼んだぞ」

そう言い残し、部隊の中へと消えて行く。

ベルトウェイはマーカスのことを思い浮かべながら、背中のブレードを抜いた。

太陽が刃で反射しているのを確認すると、後方でアサルトライフルを構えているシムリヤー隊に向けて言った。

「雑魚は頼んだ。俺は敵側の選手を探す」

「任せろ。露払いは得意だ」

シムリヤー隊が横に並ぶと、ソイル隊がやって来た。

「本隊の援護に付く。あんたの所の隊員も一緒だ」

「分かった」

前方の砂塵の影から、赤い戦闘服がちらほらと見え始めた頃、ラヴィーナからの通信が入る。

「敵の航空部隊は気にするな。こっちで片付ける。マーカスは頼んだぞ」

「了解」

石柱の陰に隠れて、砂塵の向こうの様子を窺う。

すると突然、銃弾が石柱を削った。

それを皮切りに、あたり一面で一斉に銃声が鳴り響き交戦が始まる。敵兵が物陰を利用し、徐々に距離を詰めてきたところでベルトウェイは飛び出した。

後ろからシムリヤー隊が援護射撃を加えてくる中、冷静に敵を判断し背中ブレードを抜く。こちらに気が付いた敵兵に向けて、ストレンジナイフから手に入れたカスタムナイフを投げつけた。そのまま敵兵の胸に勢いよく突き刺さり、一言呻くと倒れた。

「ベルトウェイだ!」

ブレードで敵を切り払いながら、どこからか叫び声が上がった。ゲオルギウスで名が知れているからか、その叫び声で一気に敵の銃撃が激しくなった。さすがにシールドだけでは防ぎきれず、近くの遮蔽物に飛び込みあたりを見渡していると、敵兵が迫撃砲を担いで運んでいる姿が目映った。

「リーリオ、聞こえるか?」

《———どうした?》

「敵の迫撃砲を確認した。ここからでは手が出せない」

《了解、すぐに航空部隊を向かわせる》

無線が切れる音と同時に、迫撃砲の爆音が鳴り始めた。

どうにか敵の銃撃をかいくぐる方法を考えていると、後ろからシムリヤー隊が敵兵に銃撃を加えながら追いついてきた。

「行け!」

ベルトウェイは、物陰から飛び出しマーカスの姿を探した。

《ブラスト隊へ、敵航空部隊は本隊及びゲイル隊に任せ、敵迫撃砲の破壊を優先せよ》

「地上が迫撃砲の雨あられだってよ! ブラスト2、行くぞ!」

「了解!」

佐藤木とダレルは、敵騎の火球とミサイルを回避しながら地上へと近づいていく。

前方から敵が二騎迫って来たが、カルラが飛び出して攻撃を加えたため、それに釣られてカルラ食いついて行った。

「あたしに任せな！ 二人は迫撃砲を！」

無線でカルラの指示に従い、二人は敵の迫撃砲に攻撃を加えた。ライカとダレルのドラゴンの火球で、瞬く間に地上が爆炎に飲まれていく中、佐藤木は敵の陣地にテントがあるのを発見した。

「こちらブラスト2、敵の陣地にテントのようなものがある」

《こちらリリオ、地上からも確認した。恐らく敵の補給地だと思うわ。ブラスト3と協力し破壊せよ》

「了解」

佐藤木はライカに火球でテントを破壊するように指示した。

しかし、突如地上から浴びせられた対空砲火により、ライカの翼に銃弾がめり込んだ。

「大丈夫か!？」

佐藤木は地上に向けてアサルトライフルを発射しながら、ライカの背中を叩いた。

「気にするでない……！ しかし、どうする？ これでは、テントに近づくことは難しいぞ？」

「そうだな……」

佐藤木は作戦司令室に無線を送った。

「こちらブラスト1、対空砲火が激しく、地上に近づくことが出来ない」

《了解、ブラスト1。対空砲は地上部隊に任せ、航空部隊を頼む》

「ブラスト1、さっき攻撃を受けているのを見たが大丈夫か？」

ダレルが横に並び、ライカの身体を確認していた。

「大丈夫らしい。対空砲は地上部隊に任せて、俺達は航空部隊をやるってさ」

「そうか……それと、さっきカルラの援護に向かっていて分かったんだが、西からもう三騎来るらしい」

激しい空中戦を繰り返している遺跡上空を横目に、西の方角を見

ると太陽に目がくらんだ。

「これじゃ来ても本隊が気付かない……ダレル」

「分かってるって」

二騎は西に向かって速度を上げた。

しかし、そこで佐藤木はテントから敵の地上部隊が、さらなる迫撃砲を担いで持って行くのを発見した。

「やばい！」

佐藤木は急遽方向転換し、地上へと急降下した。

「どうした！？」

無線でダレルが呼び掛けてくる。

「また迫撃砲が出てきた！ 破壊しに行く！」

「対空砲は！？」

「……でも、やるしかない！」

「……くそっ、分かった！ 西から来る三騎は任せろ！」

凄まじい風圧と重力が身体に押し掛かり、思わず気を失いそうになる。

無線が切れると、ライカが尋ねてきた。

「まったく、よくもこんな無茶な行動に出たものだな……！」

「じゃあ、何でお前は付き合ってくれるんだよ……！」

「お主が死んだら、誰が私の鎖を外すのだ……！？」

佐藤木はこちらに気付いた敵兵に向けて、アサルトライフルを構えた。

「迫撃砲が止んだぞ！ 前進しろ！」

アース隊とソイル隊は、本隊と共に敵兵と銃撃戦を繰り広げていた。

イーリスがグレネードランチャーで応戦していると、司令室から無線が入る。

《地上部隊へ、味方航空部隊が危険に晒されている！ 今すぐ対空砲を破壊せよ！》

「対空砲……!?!」

フェレルが敵のいる方角を見ると、白い体色をしたドラゴンが地上に向かって急降下していた。

「あれじゃ蜂の巣だ! ネストル! イーリス! 行くぞ!」

三人はソイル隊の援護を受けながら、急いで対空砲の元に接近していく。

イーリスが敵兵を確認しながら走っていると、石柱の影から何かが飛んできて地面を転がる。

——あれは、手榴弾——

「手榴弾だ!」

フェレルがとっさに近くにいたイーリスに覆いかぶさると、瞬時に爆音が鳴り響いた。

「くっ……!」

「背中が……!」

イーリスはフェレルの背中に手榴弾の破片がいくつか刺さっているのを見た。

「このぐらいならまだ大丈夫だ……! それより、ネストルは……!?!」

「うわあああ!」

二人は、耳から血を流しながら地面を転げまわっているネストルを見つけた。

「ネストル、落ち着け!」

「これが落ち着いていられるか!?!」

ネストルはフェレルの手を振り払うと、レンガの陰に隠れた。

「くそっ! くそっ! コリーナ基地は田舎だから行くのはヴァルトぐらいじゃなかったのか!?! 何で俺はこんな前線にいるんだよ!?! 話が違いすぎるんだよ!」

「ネストル、取り敢えず手当てを——」

イーリスが医療用に取り出した小型ナイフを見て、ネストルは驚愕した。

刀身に映った自分の左耳が無かったのだ。

「うわあああああ！」

「ネストル！ そっちに行ったら——」

フェレルが言い終える前に、石柱の陰に隠れていた敵兵にネストルは撃たれた。血しぶきを上げながら、ネストルが倒れる。

「何、で……！ 俺……こ……な……はず、じゃ……」

銃撃はフェレルとイーリスも襲い、二人はレンガの陰に飛び込んだ。

「くそっ……ネストル……！」

「フェレル……今は……」

《アース隊！ 早くしろ！ 対空砲が航空部隊を捉えた！》

「くそっ！ 分かってる！ ……イーリス、援護を！」

イーリスは頷くと、石柱の陰に隠れている敵兵に向けて物陰からグレネードランチャーを発射する。

瓦礫が飛び散る中、フェレルは手榴弾を対空砲に向けて投げた。

「吹き飛ばし！」

佐藤木は地上に向けてアサルトライフルで銃弾を浴びせ、ライカは迫撃砲を地面に設置しようとしている敵兵目掛けて火球を放つ。

迫撃砲は火球によって四散したが、対空砲がこちらを捉えていた。

「く……！」

ライカは一瞬息を吞んだが突然、対空砲が吹き飛んだ。地上を確認すると、どうやら地上部隊の男が対空砲を破壊したようだ。

「よし！ これで一気に……」

「いや待て！」

ライカの視線の先を見ると、テントの中から対空砲が次々と運び出されていた。

「……………」

「……ライカ……俺が、対空砲をやる。でも、ここからじゃ狙えない。俺の身体を足で固定してくれ」

「……お主にやれるのか？」

「やらなきや……どのみち撃たれて死ぬ」

「やれやれ……お主を乗せたのが運の尽きか」

「始まりかもしれないだろ？」

「ふむ——賭けるか」

佐藤木は、ライカの背中から飛び降りた。

ライカは佐藤木の身体を足で掴むと、佐藤木はそのままアサルトライフルを構えながら逆さ吊りになった。

「テントを！」

ライカは迫撃砲を運び出す途中の敵兵を、滑空しながら次々と火炎放射で焼き払った。佐藤木は逆さ吊りのまま、頭が地面と数メートルしか離れていない位置から対空砲の射手を正確に撃ち抜いていた。

一人と一匹が通った後には、炎と銃弾を撃ち込まれた何十もの敵兵が転がっていた。

「見ていたぞ、ブラスト2！　すごいじゃないか！」

「地上部隊から航空部隊へ、今のは何だ！？」

一気に騒がしくなった無線を聞きながら、佐藤木は上空へと戻ったライカの背中に戻った。

「皆すごいってよ」

「誤解だな。すごいのは我のみだ」

「よく言うよ……ダレルが心配だ。急ごう」

ライカの偉そうな態度を無視し、一気に西の空へと上昇する。

ダレルの茶色いドラゴンは、三騎の敵航空部隊に追われていた。

「ずいぶんと遅かったな！？」

ダレルに追いついた佐藤木は、ヘッドセットから伝わってきたその声に笑った。

「これでも頑張った！」

三騎の後ろを取ったライカは、火炎放射を浴びせて一騎墜とした。後ろのいる白銀のドラゴンに気付いた二騎は、二手に分かれて散

開した。

「これがセルバにいたという銀蠅か……」

「『エースコマンド』だったアドルフが墜とされたらしい——抜かるなよ」

グラティニス軍のコマンドは無線でそう伝ええると、二手に分かれた相棒は茶色いドラゴンへと向かった。

「覚悟してもらうぞ」

コマンドは白銀のドラゴンに向かって、ミサイルランチャーを構えた。

《ミサイルだ！ 回避しろ！》

腰に付いているMAWSが鳴り始め、佐藤木は目の前に迫ったミサイルに向けてフレアを投げつけた。寸前でミサイルが軌道を変えて、はるか彼方に消えてくと休む暇も無く敵のドラゴンがライカに組み付いた。

佐藤木はアサルトライフルで敵コマンドを狙おうとしたが、敵もショットガンで応戦してきたためにライカの背中に隠れた。

ライカも敵ドラゴンに向けて尻尾を叩きつけたが、空中でかわされ逆に火炎を吐かれた。急いで距離を取り、難を逃れたが、敵騎を逃してしまった。

「危なかった……ブラスト3は？」

「あそこだ！」

ライカが向かった先では、ダレルが後ろに付かれて振り払おうとしていた。

カルラが後ろに付いている敵騎を狙おうとしているようだが、ダレルに当たるのを恐れてか手が出せないでいる。

「体当たりだ！」

佐藤木が言う間も無く、ライカは既に敵騎の横に付いていた。急接近して来たライカに敵ドラゴンは驚き、減速して逃げようと

したがそのままライカの尻尾の鎖で吹き飛ばされた。

「助かったぜ」

地上へと真っ逆さまに落ちていく敵騎を見ながら、ダレルは無線で礼を言った。

「後ろだ！」

カルラの叫びに気付き、佐藤木は振り向くと先ほどの敵騎が間近に迫っていた。

「ライカ！」

佐藤木もアサルトライフルで銃弾を叩き込みながら、一気に近づいていく。

二騎が擦れ違う寸前に、敵コマンドが撃った弾丸が佐藤木の肩にめり込み、顎や顔を掠めていったが、同時に佐藤木の銃弾が敵コマンドの腹に命中した。

佐藤木は苦痛で顔を歪めながら、擦れ違った敵騎を振り返ると、ゆっくりと敵コマンドが地上へと落ちていった。ドラゴンの方もライカの攻撃を受けたのか、数メートル飛んでいった後にふっと、墜ちていった。

《ブラスト隊、大丈夫か？》

「……大丈夫、です」

「大丈夫なものか。その肩では銃も持てまい」

ライカに言われた通り、佐藤木は自分の肩を見てみると、肉が裂けて血がとめどなく溢れていた。

「ショットガンで撃たれたんだ。死んでないんだから大丈夫な方だろう……？」

「ブラスト2！ うわっ……酷い怪我だね」

寄ってきたカルラは、佐藤木の肩を見て司令室に連絡した。

「リーリオ、こちらブラスト1。ブラスト2が負傷した。戦闘は続行出来そうにない」

《了解、ブラスト3。ブラスト2は安全な場所で待機するか、そのまま着陸しろ》

「降りた方がよいぜ……この怪我は」

ダレルが心配そうに包帯を投げてきた。

佐藤木は適当にぐるぐると包帯を肩に巻くと、ダレルとカルラと共に本隊へと戻っていく。

「おいおい、その怪我じゃ——」

「分かっている。戦うつもりは無い。ここで待ってる」

佐藤木はライカにも同意を求めた。

「お主が動けぬのなら、我も動く必要は無い。ここで高みの見物としよう」

「いい身分だねえ……じゃあ、そいつを頼んだよ」

《ラスト1と3へ、敵航空部隊の数が減少した。そのまま本隊と合流し、残りの敵騎を撃墜しろ》

まだ銃声が鳴り響いている遺跡近くで、ベルトウェイは敵兵を相手にしながらマークスを探していた。

——まだ出てこないとはおかしい……奴は前線には居ないのか……？

周囲の敵兵を片付けたベルトウェイは、燃やし尽くされた敵のテント付近を探索しようと歩き始めた。

敵の死体を避けながら進んでいると、目の前に地面にある物が置いてあった。

「クレイモア地雷……どうしてこんな目立つ所に？」

「目立たないという意味が無いからさ」

ベルトウェイは後ろからの殺気に気付くと、振り向きざまにブレイドを抜いた。

目線の遥か上から迫ってきた大剣を受け止めると、そこにはかつて闘技場で闘った男の顔があった。

「戦場でまた会うとはな……お前も行き場を失ったのか？」

ベルトウェイは力で大剣を弾き返すと、後ろに退いて距離を取った。

「稼ぎ口が無くなって困ったんだ」

正直な物言いにマーカスはくつくつと笑うと、大剣を大きく振った。

「一生食えるだけは稼いだだろう……？ お前の目的は？ ランクか？」

「違う。お前はどうかんだ？」

逆に質問してみたが、マーカスはなぜか悲しそうな顔をした。

「それは残念だ……お前に追いつくために、俺は必死に苦勞してランク『七位』まで上り詰めたって言うのに……」

「俺より上だ。良かったな」

「ありがとう」

マーカスは、適当に喜んだ振りをする。と大剣を仕舞い、サブマシンガンに持ち替えた。ベルトウェイが左腕のシールドを展開するのと、銃弾が叩きつけられたのは同時だった。

「だが、それでは意味が無い。俺は、お前をどうしても殺さないといけないんだ。まあ、運が無かったとでも思ってくれ」

マーカスはサブマシンガンをホルダーに戻すと、大剣を構える。ベルトウェイもブレードを構えた。

「運が無くて闘いには勝てる。生きる覚悟があるからな」

マーカスは闘技場の控え室での言葉を思い出したのか、にたりと笑った。

「――じゃあ、その覚悟がどのほどのモノか……測らせてくれ」

ベルトウェイとマークスは同時に地面を力強く踏み込み、まるで磁石が引き合うようにぶつかった。

両手で構えた大剣を左方向から斬りつけて来たマークスに対して、ブレードを斜めに構えて振り下ろしてきた大剣を刀身で滑らせる。獲物を見失った大剣が地面に突き刺さったところで、ベルトウェイは右手のブレードでマークスの首を狙った。しかし、突然身体が宙に浮き、ベルトウェイは地面に派手に倒れた。

マークスがもぐら叩きのように大剣を地面に叩きつけてきたため、ベルトウェイは地面を転がり何とか体勢を立て直した。

あれは何だったんだ、ベルトウェイはマークスの武装を確認すると、腰のあたりにぶら下がっている矢じりのような物を見つけた。

「闘技場ではなかった代物だろ？」

マークスは腰に付いている矢じりを外すと、ベルトウェイの顔のある位置に向けた。ベルトウェイはとっさの判断で首を横にずらすと、真横をロープの付いた矢じりが飛んでいった。

「『十一位』の女が持っていた武器だ。使うことは二度と無いみたいだから、俺が使わせてもらってる」

マークスが棒の部分のスイッチを押すと、瞬時にロープと矢じりが手元に戻っていった。

「手品の原因はそれか」

ベルトウェイはブレードを構えて、一気に距離を詰めた。

思わぬ速さにマークスは急いで大剣を構えて、ブレードの突きを防いだ。火花が散った後、マークスはベルトウェイの踏み込みに思わず唸った。

「お前も、何人殺して来たんだ？」

「数えてない」

ベルトウェイは足払いをかけ、マークスを地面に倒すと上から何

度も突きを繰り出した。マーカスは大剣の巨大な刀身で全て防ぐと、ベルトウェイの腹を蹴り後転して起き上がった。マーカスが起き上がった瞬間を見逃さずに、ベルトウェイも一気に斬りかかる。マーカスも大剣を構えなおし、受け入れる態勢を取ったが、ベルトウェイが不意にブレードを投げつけてきたのに驚愕した。

「馬鹿め！」

一直線に飛んでくるブレードを弾き、ベルトウェイに向き直ると特殊な形をしたカスタムナイフが五本飛んでくるのに気付く。横っ飛びに避けようとしたが、クレイモア地雷が地面に置かれているのに気付いて、急いでナイフを取り出しカスタムナイフを振り払う。しかし、その内の一本が脚に突き刺さった。

「闘技場ではなかった代物だろ？」

ベルトウェイはブレード拾って構えながら突撃した。

「ふん！」

しかし、マーカスがその場で大剣を一回転させ、ベルトウェイを弾き飛ばした。

装備しているシールドで防いだものの、ベルトウェイは後ろにあった石柱に背中をしたたかに打ちつけた。一瞬、息が止まりそうになったところでマーカスの大剣を横にかわす。すると、後ろの石柱がガリガリと削れて倒壊した。

ベルトウェイがブレードを振りかぶると、それより速い速度でマーカスが大剣を振るってくるため、防戦が続く。

本気になったか、ベルトウェイはそう思い、両手でブレードを構えてマーカスの剣技を受け止めていく。大剣の動きが鈍くなってきたところで、マーカスの顎に左アッパーを入れて距離を取った。

マーカスは口の中を切ったのか、血を地面に吐きつけて脚に刺さっていたカスタムナイフを抜くと、何を思ったのか自分のナイフホルダーに入れた。

「臆がズタズタになるぞ」

思わずそう洩らすと、マーカスは大剣を構えなおし言う。

「別に良い。お前の研究材料が増えたからな」

「研究熱心だな」

二人はお互いに一気に距離を詰め、激しい剣技を交わす。

お互いの腕の感覚が無くなってきた頃、同時に無線機の受信音が鳴り響いた。

二人は大きく獲物を振りかぶると、一気に振り下ろし激しいつばぜり合いが生じる。歯を剥き出しにしながら迫ってくるマーカスに、ブレードさらに力を込めるベルトウェイは、口の中で奥歯がぎしぎしと鳴っている音しか感じられなくなっていた。

そこに突如、地面に銃弾による穴が掘られたの気付き、双方は距離を取った。

「ベルトウェイ！ どこだ！？」

フェレルの声が響くと、マーカスが無線に出た。

「何だ？」

わずかに聞こえてくる電子音に、ベルトウェイは耳を傾けた。

「――地上部隊が大幅に削られた。これ以上は持たない。部隊と共に退却しろ」

「まあ待て、あと少しだ」

「お前は自分の価値を分かっていない。いいから退却しろ」

その声で、ベルトウェイはまた激しい頭痛に見舞われた。

マーカスは無線を切ると、眉間を押さえているベルトウェイを見ながら言った。

「次に会うまでに、もう少し腕を上げておけよ……」

そう言うと、マーカスは遺跡の瓦礫の奥へと消えていった。

ベルトウェイも、眉間を押さえながら無線の応答に応じた。

「……誰だ？」

「私だ、ベルトウェイ。苦しそうだが、大丈夫か？」

ドクターの問いに応じる前に、ブレードを背中にしまった。

「ああ……また頭痛だ」

「そうか……少し、調べてみたんだが君は慢性頭痛かもしれないな。」

単なる片頭痛なら、良くあることなんだが……」

「……思い出した」

「なに？」

「医療スタッフから薬を貰っていたんだ」

ドクターの盛大な溜め息を聞きながら、バックパックから錠剤を二、三粒取り出し、口の中に放り込んだ。

「君の抜けている部分は相変わらずだな」

「ドクター、ホリーの様子は？」

「相変わらずだ。……もう一度言うが、君も相変わらずだな」

「それが俺だ。ホリーに伝えておいてくれ。『昨日は会いに行けなくて悪かった。夕方にそっち着く。客人を連れてな』と」

「客人……？」

「俺の上官だ。ホリーのことはもう話してあるから、心配しなくていい」

「…………」

「ドクター？」

「いや！ 何でもない！ ホリーちゃんもきっと喜ぶだろう。伝えておくよ」

「ああ」

「それはそうとして、薬は決められた時間に――」

ベルトウェイは無線を切ると、駆けつけてきたフェレルとイーリスと合流した。

「敵の地上部隊は退却を始めている。ひとまず、俺達の勝利だ」

「マーカスは！？」

前に出て来たイーリスに伝える。

「消えた。決着は付いてない」

「そう……」

安心したイーリスにベルトウェイは和んだが、アース隊に後一人足りないことに気付いた。

「ネストルはどこだ？」

そう尋ねた瞬間、二人が一気に重い表情になったことで、ベルトウェイは察した。

「そうか……だが、二人が生きているだけでも安心した。……本隊に戻ろう」

二人は頷くと、一人居なくなったアース隊は本隊へと向かった。

《――各機へ告ぐ、敵地上部隊は退却を始めた。任務完了だ。繰り返す――》

佐藤木は右肩を押さえながら、ヘッドセットから伝わるミラヴィー中尉の声をただ漠然と聞いていた。

「何だかぼうっとしてきた……ミラヴィー中尉の言うことも、何だかひとごとって感じた……」

「血が足りなくなってきたのであろう。任務は果たしたのだ。帰るぞ」

ライカは佐藤木の身体をなるべく揺らさないつもりなのか、いつもより緩やかに切り返し、戦闘空域の外に向けて動き出した。

後方からドラゴンの羽ばたく音が聞こえ、振り返るとダレルとカルラも疲れた顔をしながら合流した。

「今回の戦いはきつかったな……早く基地に戻って、食堂のパスタが食いてえ……」

「給仕係が風邪で休みだから、今週はレーションとインスタント食品だけって言ってなかった？」

「マジかよ！？ はあ……俺、フロレスタの基地に着陸するか――」
ダレルとカルラの会話も、徐々に聞き取り辛くなっていく。

「そんなことより、肩の傷は大丈夫？」

突然、話を振られた佐藤木はぼんやりとしながら頷いた。

二人が心配そうに見つめる中で、ゲイル隊が追いついてきたのを横目で確認すると、司令室からの無線が届いた。

《――皆、今回は本当にご苦労だった。特にブラスト1、目に余る活躍だったぞ？ こちらでは表彰を検討している者も居る》

「ふん、我は当然のことをしたまでだ」

「お前じゃ、ねえ……」

佐藤木はライカの頭を叩こうとしたが、ほとんど力が入らず小突

いた程度で終わった。

《ブラスト隊及びゲイル隊へ、ブラスト1の様子を見ながら、各機基地に帰還——いや、待て！ あれは何だ？》

佐藤木は朦朧としながらも前方に目を向けると、雲の切れ目から七つの騎影がちらほらと見えていた。

《各機へ、西から敵影が七つが迫っている。国籍不明騎だ。確認せよ》

ゲイル1が先行して、雲の切れ目の部分に目を細める。

すると、ゲイル1の震えた声がヘッドセットから伝わってきた。

「あの白い腕章……赤いラインが入った戦闘服……間違いない——ヴィユノーク中隊だ！」

その言葉と同時に、佐藤木は雲の切れ目から現れた七騎の編隊を確認する。

V字状に広がっている編隊の中で、先頭にいる一番騎はぐんぐんところちらに迫ってきていた。

《ブラスト隊及びゲイル隊へ！ 国籍不明騎はモルテ・ラングハイン中佐が率いるヴィユノーク中隊だと判明した！ ただちに本隊の航空部隊と合流しろ！》

その命令が発せられた瞬間、六騎は急いでもと来た道を引き返し始めた。

「奴らの地上部隊は退却したはずだろ！？」

「どうしてあいつら追ってくるんだ！？」

後ろからヴィユノーク中隊が迫ってくる恐怖からか、ゲイル隊の面々が取り乱す。

「ブラスト2、傷は大丈夫か！？」

「何とか……」

まだ力の入る左腕で、佐藤木はライカの背中にしがみついた。

「あいつら……たった一個中隊で何しに来たんだい……！？」

カルラが速度を上げながらそう呟くと、無線が入った。

《ブラスト隊及びゲイル隊！ そのまま東に向かえば本隊が居る！

そこで再度編成しろ!」

その途端に、六騎のMAWS全てが警戒音を鳴らした。

後ろを振り返る余裕の無く、それぞれは飛んでくるミサイルを勘でかわしていく。

「見ろ! 本隊だ!」

ゲイルの言葉に反応し、前方を見ると十騎以上の味方がこちらに向かっていた。

「助かった! これで――」

「各騎へ告ぐ! 北の方角から未確認騎が二騎接近中! 気を付けろ!」

佐藤木はMAWSに気を配りながら北の空を見渡すと、凄まじい速度で接近してくる二騎の騎影を確認した。

その中には、黒い戦闘服に雪のように白い髪をした少年も混じっていた。

「あの編隊は……まさか……ヴァローナ隊なのか……!?!」

ゲイル隊の一人が、ヘッドセット越しにそう呟く。

本隊もヴィユノーク中隊とヴァローナ隊に挟まれた形になり、次取るべき行動を決めかねていた。

「このままじゃ挟み撃ちだ! リーリオ、どうしたら良い!?!」

本隊の誰かが無線でそう司令室に叫ぶと、司令室の音声から一瞬息を呑む音が聞こえ、指示が飛んだ。

「退却しろ! 全騎、退却だ! 直ちに都市上空まで戻るんだ!」
その命令が下りた瞬間、一斉にアエイル側の航空部隊はフロレスタの上空を目指して退却を始めた。

「しっかりと掴まっているのだ!」

佐藤木は片腕で必死にライカの背中を掴むと、吹き付けてくる突風に耐えた。

「フロレスタの都市まで戻れば味方の対空砲が援護してくれる! それまで何とか持ちこたえるんだ!」

ヘッドセットからはその指示以外にも、様々なことが伝えられた。

「嫌だ！ 死にたくない！」

「止めてくれ！ うわああああ……！」

阿鼻叫喚と化したアエイル軍側を持ち直すため、ミラヴィー中尉が必死に無線で兵士に呼び掛けた。

《敵地上部隊は退却を始めている！ 恐らく、追跡してくる彼らの目的は退却する地上部隊の援護と我々航空部隊の殲滅だ！ しかし、都市に入ってしまったえば彼らも追ってこなくなるだろう！ 速度を上げて、なるべく敵騎に捕捉されないようにしろ！》

「『捕捉されるな』って言われても……！」

ダレルはジグザグと飛んでヴィユノーク中隊の追跡を振り切ろうとする。

しかし相手はますます接近し、一番遅いカルラを狙い始めた。

本隊が次々と撃墜されていく中で、佐藤木はライカに指示するとカルラの後方に回った。

「あんた……！」

「行って下さい……！」

カルラを先に行かせると、どこからかゲイル隊の悲鳴が聞こえてきた。

「隊長！ ダメです！」

「早く行け！」

「ゲイル1！」

悲鳴が上がっている場所を発見すると、今まさにゲイル隊のリーダーであるゲイル1が他の隊員を逃すため、ヴァローナ隊と対峙しようとしているところだった。

「止めろ！」

佐藤木は自分の制止の声が、司令室に居るミラヴィー中尉の声と重なった気がした。

ゲイル1は無謀にもヴァローナ隊の中に突っ込み、リーダーであるルイン少佐の騎乗しているドラゴンにその身体を噛み砕かれた。そのまま落下していくゲイル1の男自身も、後からきたヴァローナ

隊の僚騎のドラゴンに噛み付かれ、血と肉片をばら撒きなら空中分解した。

佐藤木は思わず顔を背けていると、M A W Sが反応する。

《ブラスト2！ ミサイル！》

はっとして、ミサイルを回避したライカの挙動に間に合わず、そのまま振り落とされそうになる。

「何をしておる！？」

ライカは思わず佐藤木を怒鳴りつけ、後ろか来るミサイルと火球を次々とかわしていく。しかし、佐藤木が身体の片方に体重をかけているため、思うように進めない。

その時、横に並んだヴィユノーク中隊の一騎が、そのまま火球をぶつけてきた。

ライカはぎりぎりでかわそうとしたが、佐藤木の目から見て間に合う距離ではなく、思わず目を瞑ってしまう。

しかし、突然ゲイル隊の一騎がライカと火球の間に飛び出し、そのまま直撃し墜ちていった。

「あやつ……！」

「何で……！？」

危機を脱した佐藤木は、改めてライカの背中にしがみつく。

その瞬間、ヘッドセットから僅かにゲイル隊の男の声が聞こえた。

「あなたに……任せ……、ま……す……」

「……！」

墜ちていったゲイル隊の男の顔が脳裏に浮かび、思わず涙が出そうになった佐藤木は前だけを向いた。

《全騎へ！ もうすぐフロレスタだ！ 何とか頑張ってくれ！》

本隊は既に都市の上空へ移動しているようで、前方の眼下では慌しく動いているであろうフロレスタの風景がよく見えた。

ダレルとカルラも先を飛んでいるようで、その後ろには唯一生き残ったゲイル隊の隊員が飛んでいた。

「よし……みんなもう逃げ切ったみたいだ……！」

佐藤木は少し安心すると、後ろを振り返りぎよつとした。

ヴァローナ隊の僚騎であるドラゴンが、口を血で光らせながら大顎を開けて噛み付こうとしていた。

佐藤木はアサルトライフルに手を伸ばそうとしたが、肩の激痛に呻き、叫んだ。

「ライカ!!」

返事が来るまで、間があった。

「すまぬ……佐藤木……」

見ると、ライカの翼が血でぐっしりと濡れていた。

恐らく、自分を敵騎の銃弾から庇った時に負った傷だろう。

「……ああ」

佐藤木は頭の中でどこか冷静にそう答えると、ライカを労わるように頭をやさしく撫でた。

《ブラスト2!》

ヘッドセットからミラヴィーの声が虚しく響く中、佐藤木とライカは死を覚悟した。

すると次の瞬間、佐藤木の身体を吹き飛ばすかのように、恐ろしい勢いの突風が過ぎていった。

佐藤木は、恐る恐る目を開いた。

すると、佐藤木の目の前に広がったのは、猛々しいほどの「黒」だった。

いや、よく見てみると、それが一枚一枚の鱗の輝きだと分かる。

それを目で追っていくと、立派な翼手へと辿り着き、そこから目を離すと、一枚の大きな翼だと分かる。

そして佐藤木は、その猛々しい「黒」と、目を合わせた。

その「黒」は、自分と同じ茶色い眼を持ち、自分と正反対の勇ましさを持つ黒竜だった。

黒竜との再会

佐藤木の目の前に再び現れた黒竜は、一般的なドラゴンの二倍近いその巨体で、ライカに噛み付こうとしていたヴァローナ隊の僚騎に体当たりし吹き飛ばした。

突然の乱入者により、グラティニス軍側もアエイル軍側も、そして何より黒竜を知る佐藤木自身も、驚きと戸惑いに溢れていた。

《ブラスト2、その黒いドラゴンは何だ……!?!?》

ヘッドセットからミラヴィー中尉の困惑した声が聞こえた。

その間も黒竜は、さっきまでフロレスタの航空部隊を追い詰めていたヴィユノーク中隊とヴァローナ隊を、漆黒の巨体と紅蓮の火球を駆使し、うまい具合に翻弄していた。

「分かりません……唯一つ言えることは、あの黒竜は敵じゃありません」

《なぜそう断言出来る? たった今救われたからか?》

「違います。過去に、救われたことがあるからです……!?!?」

《……それは――》

「いずれにせよ、お主の言っておった黒いドラゴンが作り出した好機を逃すわけにはいかぬ! 急ぎ退却するぞ!」

ライカは、フロレスタの都市上空に退却している本隊に向かって、最高速度で飛んだ。

白い体色をしたドラゴンを後一步まで追い詰めたところで、ヴィユノーク中隊とヴァローナ隊は突如出現した謎のドラゴンと交戦を強いられていた。

「何だ……!?!? この黒いドラゴンは……!?!?」

「こいつもアエイルの航空部隊なのか……!?!?」

ヴィノーク中隊の隊員達が、一斉に混乱を始める。

しかし、ヴィノーク中隊の隊長であるモルテは凜とした声で言っ

た。

「落ち着け！ ……私達の任務は果たした、現在交戦している国籍不明騎は放っておけ。今から西に向かい、そこで再編成する」

「ヴィユノーク2、了解」

「ヴィユノーク3、了解」

モルテの一声により、先ほどまで乱れていたヴィユノーク中隊は落ち着きを取り戻し、黒竜を振り払い一斉に西へと移動した。

「――ヴィユノーク1、聞こえますか？」

ヴァローナ隊として黒竜と闘っているルインが、無線を送ってきた。

無事な声を聞き、ひとまず安堵したモルテは、それを表に出さないように無線に応じた。

「どうした？」

「僕がこの黒いドラゴンを引き付けますから、その間に西へと向かってください」

「……了解した、気を付けろヴァローナ1」

そんなことは危険すぎる、本当はそう言いたかったが、モルテは軍人として弟に接した。戦場ではいつもそうなのだ。弱みを見せた者から死んでいく。

「任せてください」

ルインはそんな心配を知ってか知らずか、黒竜と対峙していた。

ヴァローナ隊

ヴィユノーク隊を先に逃がしたルインは、僚騎と共に黒いドラゴンに向けてミサイルランチャーなどの攻撃を加えていた。

既にフロレスタの上空へと逃れてしまったアエイルの航空部隊を苦々しく思いながら、目の前で羽ばたく邪魔者に照準を合わせる。僚騎であるコマンドと共に、ミサイルと火球を矢継ぎ早に撃ち込んでいくが、黒いドラゴンはその巨体に似合わず俊敏な身のこなしで華麗にかわした。

「チッ……！」

僚騎の男が苛々しながら、自分の騎乗しているドラゴンに速度を速めるように命令した。

「おら！ このくそトカゲ野郎！ さっさとあの忌々しい黒トカゲに追いつけ！」

男はドラゴンの脇腹を何度も蹴り上げると、顎から血を滴らせながらドラゴンが一気に加速した。

しかし、そこでルインが制止の命令を出した。

「ヴァローナ2、撤退です」

「知るか！ 撤退ならお前一人でしやがれ！」

ヴァローナ2はそのままルインの命令を無視すると、黒いドラゴンに向かって一直線に飛んでいく。

その時、今度は別の人物からの命令が下りる。

《――ヴァローナ2、いいかげんにしろ。二度と戦場で戦えなくなるぞ。異常者だったお前を拾ってやったのは誰だと思っている？》

「……………けっ」

空中で唾を吐きながら、ヴァローナ2はルインの横に並んだ。

《世話のかかる奴だ……ヴァローナ隊、ヴィユノーク中隊及び地上部隊は既に退却を完了した。帰投しろ》

「ヴァローナ1、了解」

「……了解」

二騎は西へと方向転換する。

ルインが後方を確認しながら飛行していると、ヴァローナ2がにやにやしながらこちらを見てきた。

「すました顔しやがって……俺は知ってるんだぜ？ お前が敵騎を撃墜する度に、その綺麗な顔が笑いを浮かべてるってよお……」

「……今に始まったことじゃありません。あなたは、僕と組んだ時からそれを知っているでしょう？」

「けっ、まあな。だから俺達は組まされたのかもな……だが噂じゃ、昔はもっとヤバかったって聞いて――」

ルインがそれ以上は聞きたくない、と思ったところで丁度無線が入った。

「――ルイン、無事なのか!？」

じゃじゃ馬が、ヴァローナ2があからさまに嫌そうな顔でそう呟いたのを尻目に、ルインは敬愛する姉をたしなめた。

「……姉さん……コードネームが……」

「あ……！ わ、悪かった、ヴァローナ1。それで怪我は――」

「ありません。今から帰投するところです」

「そうか……良かった」

ヘッドセットの向こうで安堵の溜め息が聞こえたルインは、思わず苦笑した。

「ヴィユノーク1、心配しすぎです。僕の実力は理解しているはずでしょ？」

「だが、私にとってお前は大切な存在だ……頼むから、無茶だけはしないでくれ……」

「了解です。では……基地で」

「あ！ 待てヴァローナ1！」

「え？」

「愛してる」

「……………」

「……あ、愛して——」

「二度も言わなくても結構です！」

ヘッドセットの向こうから、いつものクスクス笑いが聞こえてきて、ルインは内心安堵した。

「そうか……じゃあ、基地で」

「はい」

無線が切れると、ヴァローナ2がつまらなそうな表情を浮かべながら言った。

「暢気なもんだな……お前の姉さんは」

「そんなことはありません。姉さんは姉さんなりに、結果を出しています」

「誰の結果何だそれは？ それに、どっちにしろ戦場にじゃじゃ馬がしゃしゃり出る自体で、俺は嫌なんだよ」

「姉さんはじゃじゃ馬なんかじゃありません。訂正してください」
真剣に怒っているルインを見て、ヴァローナ2はそっぽを向きながら「悪かったよ……」と悪びれもせずと言った。

「でも、お前の姉さんは知ってるのか？ お前の本性をよ」

「……知っています。それでも、姉さんは僕を受け入れてくれた——偉大な人です」

その答えに少し驚きながら、それでも毒を吐かずにはいられなかった。

「それでもお前に言い寄ってくるのか……狂った姉弟だぜ」

ルインは何も返さずに、ただひたすら西を目指した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1323z/>

SKY EARTH

2012年1月13日23時02分発行